

2016年度

教師海外研修プログラム(マラウイ)

報 告 書



2017年（平成29年）



独立行政法人 国際協力機構
九州国際センター（JICA九州）

目 次

I. 研修概要

参 加 者 リ ス ト	5
派遣前研修スケジュール	6
現地研修スケジュール	8
帰国後研修スケジュール	9
実 践 授 業 報 告 会	11

II. 海外研修報告書

市 丸 恵 理	15
伊 東 望	21
裏 久 代	25
緒 方 美 恵	30
藏 園 清 邦	35
嶋 田 亜日香	39
清 水 啓 子	43
吉 田 宗 平	48

III. 授業実践例報告書

市 丸 恵 理	57
伊 東 望	64
裏 久 代	70
緒 方 美 恵	76
藏 園 清 邦	87
嶋 田 亜日香	95
清 水 啓 子	119
吉 田 宗 平	126

※ 教員、および児童／生徒の原文を活かして掲載しています。一部表現や体裁のばらつきがありますがご了承ください。

※ 過去の実践事例を、JICA 九州のホームページに掲載しています。

<http://www.jica.go.jp/kyushu/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/index.html>

I. 研 修 概 要

参加者リスト

■ 参加教員

	県	所 属	氏 名	担当科目
1	長 崎	長崎県立虹の原特別支援学校	市 丸 恵 理	音 楽
2	宮 崎	宮崎学園中学・高等学校	伊 東 望	国 語
3	大 分	大分県立大分上野丘高等学校	裏 久 代	地 理
4	熊 本	菊陽町立菊陽西小学校	緒 方 美 恵	全教科
5	鹿児島	霧島市立横川中学校	藏 園 清 邦	英語・技術
6	福 岡	福岡市立福岡女子高等学校	嶋 田 亜日香	英 語
7	福 岡	直方市立直方東小学校	清 水 啓 子	全教科
8	佐 賀	佐賀市立新栄小学校	吉 田 宗 平	全教科

■ 同 行 者

	所 属	氏 名
1	一般社団法人 九州観光推進機構	有 吉 千 絵
2	JICA デスク長崎国際協力推進員	茂 田 敬 介

■ 地方メディア派遣

	所 属	氏 名
1	大分合同新聞報道部記者	池 田 美 香

派遣前研修スケジュール

■ 7月9日（土）

時 間		内 容	担 当
10：20		受 付	
10：30	5	司会及び担当スタッフ紹介	JICA 九州 中野 職員
10：35	5	JICA 九州市民参加協力課長 挨拶	JICA 九州 瀧沢 課長
10：40	20	JICA 事業概要、教師海外研修趣旨説明	JICA 九州 中野 職員
11：00	60	マラウイ国概要	有吉千絵氏 (元マラウイ青年海外協力隊員)
12：00	30	事務手続き（渡航、保険、留意点他）	JICA 九州 中野 職員
12：30	60	休 憩（昼食）	
13：30	100	現地研修スケジュール詳細説明 (途中適宜休憩)	長崎県 茂田 推進員
15：10	60	教師海外研修 過年度参加者からの経験談	唐津東高校 中島 教諭 (2015年度参加)
16：10	10	休 憩	
16：20	30	◆参加者の関係性を作るワーク ・自己紹介 + a	ファシリテーター： Edu 松本亜樹 氏
16：50	45	◆開発教育とは？（レクチャー）	Edu 松本亜樹 氏
17：35	5	事務連絡（翌日のスケジュール確認等）	JICA 九州 立野 専門嘱託
17：40		終 了	

■ 7月10日（日）

時 間		内 容	担 当
9：30	60	◆ワークショップ体験	ファシリテーター： Edu 松本亜樹 氏
10：30	90	◆参加者ミーティング ＊グループ分け、役割分担、テーマ設定 研修までの準備など	松本亜樹 氏 茂田 推進員 立野（相談対応）
12：00	60	休 憩（昼食）	
13：00	30	参加者ミーティング（続き）	
13：30	30	ふりかえり & 今後（渡航当日と帰国後）の流れ 確認 アンケート記入	JICA 九州 立野 専門嘱託
14：00		閉会の挨拶	JICA 九州 瀧沢 課長
14：35		解 散	

現地研修スケジュール

月 日	曜日	行 程
7月30日	土	福岡発
7月31日	日	午前：移 動 午後：マラウイ着
8月1日	月	午前：在マラウイ日本国大使館表敬・JICA マラウイ事務所オリエンテーション（リロングウェ） 午後：（無償）リロングウェ中等教員養成校建設プロジェクト/OVOP（一村一品）ショップ視察（リロングウェ） 夕方：事務所員・隊員・専門家との歓迎夕食会（ノーブルチャイナ）
8月2日	火	午前：（技プロ）中等理数科教育強化プロジェクト事務所訪問（リロングウェ） プロジェクト専門家との意見交換会 午後：（技プロ）中等理数科教育強化プロジェクト（サリマ） プロジェクト支援校視察
8月3日	水	午前：中等学校での交流授業（ナマロンバ） ナマロンバコミュニティ中等学校での交流授業 午後：マラウイ教育研究所（ゾンバ） マラウイ教育研究所施設見学
8月4日	木	午前：隊員活動視察（理学療法士） ゾンバ県病院施設見学 午後：UNICEF 事務所訪問（リロングウェ） UNICEF 事務所意見交換会 一村一品マルソユニオン取材（大分合同新聞 池田記者のみ）
8月5日	金	（技プロ） ザラニヤマ森林保護区の持続的な保全管理プロジェクト（リロングウェ）
8月6日	土	カスングナショナルパーク見学・カムクワンバ氏の風車見学（大分合同新聞 池田記者を除く） 吉岩隊員配属先・エンフェニヘルスセンター取材（大分合同新聞 池田記者のみ）
8月7日	日	午前：マラウイ柔道協会見学・交流会 午後：帰国準備
8月8日	月	午前：JICA マラウイ事務所報告（リロングウェ） 午後：マラウイ発
8月9日	火	（ヨハネスブルグ経由）
8月10日	水	福岡着

帰国後研修スケジュール

■ 8月27日（土）

時 間		内 容	担 当
10:00		受付開始	
10:20	5	開会のあいさつ	JICA 九州 江頭 課長
10:25	5	帰国後研修の流れについて	JICA 九州 中野 職員
10:30	50	マラウイ研修のふりかえり ・各教師 ① マラウイ研修で最も印象に残ったこと ② マラウイで意外に思ったこと ③ マラウイで見つけた「日本とのつながり」 の中からテーマを選び、5分でプレゼンする。 (①～③はどれか選んでもいいし、3つを織り交ぜてもよい) ・同行者 対象：茂田 推進員	ファシリテーター： Edu 松本亜樹 氏
11:20	40	授業実践のために 「記者の目から見たマラウイと日本」	大分合同新聞社報道部 池田美香 記者
12:00	60	休 憩（昼食）	
13:00	30	マラウイ研修後の実践事例と実践のためのポイント	いちき串野本市立川上小学校 岡留真吾 教頭 (2015 年度参加)
13:30	60	貿易ゲーム ① 貿易ゲームを体験 ② 貿易ゲームの振り返り ③ 貿易ゲームのやり方	" ファシリテーター： Edu 松本 亜樹氏 岡留教頭他 "
14:30	10	休 憩	
14:40	180	教材案作成 各教師および推進員 ① 目的の整理 (この教材を通して何を伝えたいか?) ② 教材を作る ③ 教材の活用法を考える (適宜休憩あり)	ファシリテーター： Edu 松本亜樹 氏
17:40	5	事務連絡（翌日の日程確認等）10分程度	JICA 九州 中野 職員

■ 8月28日(日)

時 間		内 容	担 当
9:30	10	集合、模擬授業準備など	
9:40	140	模擬授業 グループ発表+コメント・意見交換	ファシリテーター： Edu 松本亜樹 氏
12:00	60	ラ ン チ	
13:00	60	模擬授業 つづき	ファシリテーター： Edu 松本亜樹 氏 "
14:00	30	ふりかえり ① アンケート記入 (5分) ② 一人一言 (3分×8人)	JICA 九州 立野 専門嘱託
14:30	5	今後に向けて	JICA 九州 江頭 課長
14:35		解 散	

実践授業報告会スケジュール

時 間	内 容	担 当
10:30～10:35	開会の挨拶	JICA 九州 市民参加協力課 江頭 課長
10:35～10:40	全 体 説 明	JICA 九州 市民参加協力課 中野 職員
10:40～12:20	2016 年度教師海外研修参加者からの実践授業報告（1 人当たり 10 分報告）	2016 年度 教師海外研修 参加者 8 名
12:20～13:10	昼 食	
13:10～14:30	当日出席者自己紹介・質疑応答・開発教育ワークショップ	2016 年度 教師海外研修 参加者、その他出席者 ファシリテーター： Edu 松本亜紀 氏
14:30～14:50	休 憩	
14:50～15:50	開発教育ワークショップ	ファシリテーター： Edu 松本亜紀 氏
15:50～16:10	開発教育実践者間のネットワーク強化	宮崎学園中学・高校 伊藤 望 教諭 JICA 九州 立野 専門嘱託
16:10～16:20	閉会の挨拶	JICA 九州 市民参加協力課 江頭 課長

※ かつて教師海外研修に参加された方或いは今後参加を希望されている方や国際理解教育・グローバル人材育成に関心のある方に案内、公開セミナーとして実施

Ⅱ. 海外研修報告書

学 校 名	長崎県立虹の原特別支援学校（長崎県）		
氏 名	市 丸 恵 理	担 当 教 科	特別支援全科（音楽科）

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

「どんなに困難な時でも、現状に楽しみや喜びを感じて生活していくこと。」

マラウイは電気や水が簡単に手に入る環境ではありません。また、日本のように義務教育や医療も保証されず、厳しい現状があります。しかし、私が感じたマラウイ人の印象は、とてもキラキラした目で幸せに見えました。ボールがないなら紙をぐるぐる巻きにしてボールを作ってサッカーを楽しんでいる少年たちがいました。日常茶飯事の停電では、高級レストランは今できる料理を準備し、ロウソクの素敵な雰囲気をお客さんが楽しんでいました。日本人から見たら不便な状況でも、マラウイ人は工夫して楽しんでいます。世界中どこに住んでいても、上手くいかないことや失敗は多くあり、くじけそうになることは誰にもあると思いますが、「生き抜く力」とは、困難な時こそピンチをチャンスに発想を変えて楽しめる力だと私は研修を通して感じました。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

【自身の成長につながったこと】

- マラウイで見たこと、感じたことの全てが刺激的で、自分の知らない世界を知り、見聞が広がった。
- 遠い存在であったアフリカが身近に感じられるようになった。
- JICA や UNICEF の活動を目の当たりにして、国際協力について知るきっかけになった。
- 「教育」の大切さを深く感じたこと。読み書きはもちろん最優先ですが、「音楽」は心豊かにし、国境の壁を越えて仲良くなれる力があることを改めて感じた。

【子供たちに伝えたいこと】

- 世界には様々な文化や生活があり、自分の価値観が当たり前ではない。
- 途上国のことは日本に関係ないことではない。途上国の資源の恩恵を受けて日本の恵まれた生活が成り立っており、途上国を支援することが日本の発展につながる。
- 国際協力をする日本人の活躍と今自分にできる国際協力や平和について。
- 何をもって「幸せ」なのか？ 自分の生活を振り返ることの大切さ。

3 教育指導への活用について

「生活単元学習」「総合的な学習の時間」「道徳」「音楽」「平和・人権学習」「日常生活の指導」など、対象生徒の発達段階に応じてふさわしい内容や場を設定し、テーマを絞って授業したいと考えます。校内にマラウイコーナーを作り、展示物などから教職員や多くの人にマラウイのことを知っ

てもらふことも実施したいです。

<内 容>

- チェワ語で挨拶や簡単な会話をしたり、頭上に物を乗せて運んだりする体験活動。
- 現地の布製品を身につけたり動物の置物を触ったりする。また、写真や映像を見て感想を共有する。
- 困難な環境で発電する風車を作ったカムクワンバ氏の話（本や写真、映像）
- JICA 隊員の世界での活躍を紹介。
- 「頭・肩・膝・ポン」のマラウイ語バージョンで手遊び歌。
- ゾンバ刑務所バンドの紹介と CD や映像の視聴。
- マラウイの写真によるフォトランゲージ。
- 「世界がもし 100 人の村だったら」「貿易ゲーム」の集団でのワークショップ。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

「アフリカ」で研修できるなんて私にとって夢のような時間でした。私が特に印象に残ったのは、マラウイの女性たちです。きれいな布を腰に巻いておしゃれして笑顔で歩いている姿や、頭にかごや果物をのせてさっ爽と歩いている姿が素敵で、マラウイの女性はとても美しかったです。また、マラウイで出会った人たちは「Warm heart of Africa」の名のとおり穏やかで人懐っこく、私がイメージしていた最貧国とは全く違ったものでした。厳しい環境でもそこに悲壮感はなく、生き生きとしていて幸せそうでした。もちろん私が見た様子は一部分でしかなく、教育や福祉の現状は深刻で驚くものがあり、そんな中、遠い異国の地で懸命に支援する JICA の協力隊員をはじめ現地で働く日本人の姿にはとても感銘を受けました。マラウイでは、教育が不十分なため上手くいっていないことが多いと思います。この研修を通して、自分にできることはないか強く考えさせられ、教師という仕事の重み・やりがいを感じるきっかけになりました。出会った JICA の方々や県外の様々な校種の先生方、マラウイの先生方と一緒に様々な視点で教育について話したことも大きな成果となりました。事前・事後研修をはじめ JICA の方々のサポートで、安全で充実した研修ができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

5 JICA に対する要望・提言

- 綿密に計画されたスケジュールに加えて、柔軟に要望に応じて下さり大変実りのある研修でした。ありがとうございました。
- 研修の日程やマラリア予防薬の準備など、できるだけ早目に知らせていただくと助かります。
- 宿は、安全を考慮してのことだと思いますが最高級ホテルばかりだったので、現地の暮らしを味わえる体験や少し安価な宿も経験してみたかったです。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- 日本から小さくてすぐ配れるお土産をたくさん持っていくと、いざという時に役立ちます。
- 買った物の金額やいろいろな数値をメモしておく、日本と比較ができてよいです。
- 写真は多く撮ると思いますが、動画をとっておくと臨場感があります。
- 現地研修では、毎晩参加者で所感を共有し合ったのが、多様な意見に触れられてよかったです。
- スーツケースの重量オーバーに要注意です。思った以上にすぐ重くなります。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月30日(土) 7月31日(日)	日本発 (移動) 	○ トランジットは順番に並んでいても絶対乗り遅れる状況。交渉しながら先に通してもらい、なんとか出発できた。 ○ 南アフリカからの飛行機では、客室乗務員が出発時に蚊よけスプレーをしていたのに驚いた。
8月1日(月)	・ マラウイ日本国大使館 ・ JICA マラウイ事務所 ・ 中等教員養成校建設プロジェクト  ・ 一村一品プロジェクト	○ マラウイ人の生活や経済面、教育面などの現状を学んだ。近年のデータでは、5歳未満死亡率67.9／1000人。HIV／AIDS感染率約10%、1／3弱の青空教室、貧困率約72%、平均寿命54.7歳、内陸国であり資源が乏しくアフリカの最貧国であることが分かった。また、マラウイは「Warm heart of Africa」と言われており、アフリカの中でも温かい人柄の国民と言われている。先進国から物的・人的支援を受け、共に開発していくことで生活をよりよくすべくJICAをはじめ世界中から支援者が入っている。数値やデータは参考でしかない。大使館やJICAで話を伺ってさらに自分の五感でマラウイをもっと知りたいと思い、マラウイで働く日本人についても注目して研修を深めたいと感じた。 ○ 一村一品プロジェクトのコンセプトを聞いて製品を拝見した。蜂蜜・ボディオイル・布製品などがあり、品質が良く安心して買い物できる商品ばかりだった。
8月2日(火)	・ 中等理数科教育強化プロジェクト 	○ 現地の先生方と小グループになって意見交換を行った。私はマラウイで特別支援教育をされている2名の先生と教育の現状について意見交換を行った。マラウイでは初等教育(8年)が義務教育であるが、進級試験があり、不合格すると留年や退学をするため、卒業者は半分以下になる。またマラウイの特別支援教育は、盲学校・ろう学校はあるが、その他の

日 時	訪 問 先	所 感
		支援を要する生徒は小学校（初等教育学校）で一緒に授業を受けられる生徒のみであり、健常の生徒同様に進級試験で合格できなければ留年や退学をしていくことが分かった。私が、「日本は、たとえ読み書きが難しくても誰もが15歳まで進級しながら学校教育が受けられる」と現地の先生に伝え、とても驚いていたのが印象的であった。また、マラウイは学習道具の不足や教師1人に対する生徒数の多さ（小学1年では教師1人あたり生徒110人程度）も課題であった。加えて教員の待遇や地位が低いことから、無免許の教師や遅刻する教師が当たり前になる負の連鎖が続いていることを知った。一緒に話したマラウイの先生方は日本の特別支援教育についても関心を示しており、日本の教員採用等についても大変興味深く話を聞かれた。互いの疑問を頼りに話し合いを深め、有意義な交換会となった。
8月3日（水）	・ 中等教育学校での交流授業 ・ マラウイ教育研究所  	○ 中等教育学校を訪問し交流授業を行った。生徒は入学試験にパスした成績優秀かつ裕福な家庭の生徒である。交流では、日本の食事や通貨、スポーツ等をクイズで紹介したり、手遊び歌「頭肩膝ポン」を日本語と現地語（チェワ語）を交えて披露したりして、マラウイの生徒と一緒に楽しんだ。予定時刻より2時間以上も遅れて現地に到着した我々に対して嫌な顔をする様子は全くなく、本当に期待感あふれるキラキラした瞳で私たちを見つめてゲームに参加する姿にとっても感激した。また、とても礼儀正しかった。生徒に夢を書いてもらい掲示物を作成した。迷わず医者や弁護士などスラスラ書く姿がとても印象的で嬉しく思った。学ぶ環境さえ整えば、マラウイの子供たちの将来は広がる。自分に何か貢献できることはないか強く考えさせられた。
8月4日（木）	・ 隊員活動視察（理学療法士） ↓ 段ボールで作ったイス 	○ 病院を訪問した。衛生環境が悪く、HIVに感染している患者も多くいた。子供たちに日本から持参したキーボードで賛美歌を演奏すると興味深そうに見ていた。マラウイの学校では音楽の教科はないが、生活の中で音楽を楽しみ、癒されたり楽しんだりしていることは万国共通だと改めて感じた。また、理学療法士として働くJICA隊員が現地語を覚えて患者とコミュニケーションをとり、少ない物資で工夫して働く姿がとても素敵で心に響くものがあった。

日 時	訪 問 先	所 感
	・ UNICEF 事務所	○ マラウイについて最近のデータを元にした分析や教育支援について話を伺った。また、UNICEF の世界に渡る支援活動の幅広さに圧倒された。
8 月 5 日 (金)	・ マラウイ柔道協会  ・ 森林保護区の持続的な保全管理プロジェクト 	○ 以前 JICA 隊員によって指導された柔道が現在も残っており、練習の様子を見せて頂いた。一礼して入退室する様子、基礎練習を地道に行う姿にとっても好感をもった。また、彼らから日本の武道の清々しさや素晴らしさを感じ、日本人として嬉しく思った。生徒は片道 1 時間以上の長距離を徒歩で練習に通う者もあり、親から「お腹がすくから柔道はやめなさい」と言われることもあるという。空腹のため、おもしろい体を動かせない現状が分かった。 ○ 不法な森林伐採が多発するため、森林保護区を設置しており、現状を伺った。マラウイ人の生活にとって木(薪)は欠かせないものであり、また炭にして売ると儲かるため不法な伐採が後を絶たないことが分かった。生きるため、森林伐採は今後すぐになくなるような問題ではないと思った。
8 月 6 日 (土)	・ ナショナルパーク見学   ↑レンジャー ↑停電中  ↑カバ	○ 森林伐採の影響もあり動物の個体数が激減し、イメージしたようなサファリパークには程遠かった。レンジャーと一緒に 3～4 時間公園のでこぼこ道を車で走ったが、鹿や鳥、カバが数頭いるだけだった。レンジャーはとにかく視力がよく、遠くにいる動物をいち早く見つけることに驚いた。夜は公園内に宿泊したが停電になり、ろうソクの火を囲んで食事をいただいたり部屋でゆっくり過ごしたりして幻想的な雰囲気幸せを感じた。また、夜空に満天の星が球体となって一面に現れ、とても感動的だった。アフリカの国立公園だというのに全く商売っ気がなく、動物を集めるわけでもなく、そこがマラウイらしくもあり、夕日や朝日を見ながら自然と共に生きる素敵なマラウイ人の日常を体感したように思った。
8 月 7 日 (日)	・ カムクワンバ氏の風車見学	○ 日本の教科書(高校英語)にも載っている話『風をつかまえた少年 14 歳だったぼくはたったひとりで風力発電をつくった』の舞台となったカムクワンバ氏の生家や廃品で作った風車を見学した。現在は観光地になっており、ご両親に対面して話を聞くこともできた。2002 年当時マラウイ世帯の 2% しか電気が通ってない状況で、独学で廃品を組み立て自宅に明かりをとめた彼の功績は素晴らしく、彼を突

日 時	訪 問 先	所 感
	 ・ JICA マラウイ事務所 報告	き動かしたその信念と努力に驚くばかりであった。マラウイでは理科・数学に特に力を入れているが、生きていくために必要な教養を誰もが当たり前に学べる環境作りが喫緊の課題だと思った。 ○ 研修を振り返り、共に学んだ先生方や JICA の方々と研修を振り返り、想いを共有することができた。マラウイでの出会いに感謝すると同時に、今後も開発教育について学び、多くの方々に伝えていきたいと感じた。
8 月 8 日（月） 8 月 9 日（火）	（移動） ヨハネスブルグ→香港→ 日本着	○ 南アフリカ共和国のヨハネスブルグで 1 泊。同じアフリカなのにとっても華やかで裕福な都会の印象。世界一治安が悪いと言われるだけに常に異様な緊張感と怖さがあったが、マラウイとのギャップがおもしろく勉強になった。

学 校 名	宮崎学園中学・高等学校（宮崎県）		
氏 名	伊 東 望	担 当 教 科	国 語 科

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

【許容していくこと】

日本にいる私たちは、多くの場面で倫理的な行動を求められる。物心ついたときから、「道德」の授業を受け、「正しいこと」「間違っていること」について学ぶ。また、教員として仕事をしていると、「正しいこと」を相手にも、自分にも求めがちである。いろんなバックグラウンドを抱える人たちがいて、いろんな生き方がある。ベストを尽くすことは大事なことだが、その時にベストを尽くせなかったとしても、それは罪ではない。いろんなことに「ねばならない」という考え方をもちがちだった私が、帰国後考えるようになった『生き抜くこと』それはいろんなことを許容していくこと、自分のダメな部分も許容していくことではないかと思っている。自分の物差しで考えると許せないこと、他人と比べて落ち込んでしまうこと、どんなことがあっても『今日も一日生きていられた』『明日はきっといい日になる』そう思いながら日を繋いでいくためには、何事も、他人も、自分も許容するキャパシティが大事ではないだろうか。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

【学校に行けないことは不幸なこと？】

貧困が原因で学校に行きたくても行けない子どもにとってそれは悲しいことかもしれない。しかし、マラウイで「学校に行けること」＝「幸せ」だと思わない子どもたちも多くいることを知った。自分にとって学校に行くよりも価値のあることを持っている子どもたちをどう考えるか、「学校に行けない」という現実だけを切り取って考えるのではなくもっと広い視野で相手を理解していくことの重要性を感じた。

自分の価値観で他人の幸せを判断することは残念なことだ。これまで、部活動などを通し、途上国支援に関わってきたが、相手の置かれている状況を、不幸な部分だけでなく、全体的に理解し、相手を尊重して支援を行っていくことが大事なことだと知った。今後、子どもたちと共に活動を行っていく中で、相手の置かれている状況を深く、広く理解しようとする姿勢が大事だと伝えて行きたい。

3 教育指導への活用について

出発前から、授業の一部で「マラウイを知ること」「日本を伝えること」「途上国支援の在り方」などについて生徒と共に調べたり、まとめたりしてきた。2学期になり、これらが、小論文指導や、キャリア教育の中で大いに役に立った。今後は、外国を知ること、日本がよくわかった経験から客観的に思考を持つことや、支援を考える際に相手の状況を理解することの大事さなど、学ん

だことを発展させていきたい。一時的なものや、部分的な偏りを持たないように、多角的に捉え、様々な切り口で指導に生かしたい。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

今回の研修から、たくさんの気づきを与えてもらった。私立高校に勤務する私にとって、他校の先生方や、小学校・中学校の先生方と共に研修に参加できたことはたいへん刺激になった。また、途上国に生きる人たちと共に活動し、支援をしている方々のことを現地で実際に知り、国際社会の中で活躍できる生徒を育てていきたい。また、自分自身も、何ができるのか、原点に返ってもう一度考えたいと思うようになった。今回の参加は、何にも替え難い経験になった。このような機会を与えていただいた JICA、そして全面的にサポートいただいた JICA のみなさまには本当に感謝しています。ありがとうございました。

5 JICA に対する要望・提言

スケジュールの発表がギリギリだったのももう少し余裕があるとよかった。帰国前・後の研修での授業案作成が漠然としすぎていて、やりにくかったので、出発前に具体的に分かっていると、出発前に準備し、ネタを仕入れて、形にしていこうというのがやりやすかったと思う。教員は、実際の現場で使えることを想定して作成したいと思っているので、そのためにはもう少し枠組みがあるといいと思う。また、そうすることで、各 JICA デスクの方にアドバイスもいただきやすくなるのではないだろうか。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

他者理解、他国理解、自己理解、自国理解…楽しいことがたくさん詰まっています。

とにかく楽しむこと。大変なことも楽しむ。シャワーが水だったり、トイレが穴だったり、荷物が届かなかったりする人がいたり、カメラのバッテリーをなくす人いたり、いろんなことがあったけど、私はマラウイが大好きになりました。どんなことも楽しむためには体調管理が1番！健康第一で楽しんでください。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7月30日(土)	福岡→香港→南アフリカ	宮崎を出発する時点で、荷物の重さがかなりオーバーしており、パッキングのやり直しに時間がかかった。マラウイでお会いする皆さんへのお土産をジップロックに15個分。27時間のフライトで体調を崩す人もいて心配したが、持ち直してよかった。全員の座席を把握しておくといよい。
7月31日(日)	午前：南アフリカから移動 午後：マラウイ	
8月1日(月)	午前：JICA マラウイオリエンテーション／日本大使館表敬 午後：(無償) リロングウェ中等教育養成校建設プロジェクト視察／OVOP視察	JICA 事務所や大使館など、厳重な警備が当たり前前の場所を訪れ、平和ボケしている自分に気合が入った。大貫さんや岡田さんが、現地に密着して活躍する姿に熱いものを感じた。1日目のマラウイにいちいち感激しっぱなしで大興奮の1日だった。
8月2日(火)	午前：中等理数科教育教科プロジェクトについて学習・専門家との意見交換 午後： 〃 支援校訪問・現地教員との交流会	徳丸さんの話を聞いて、学校があれば、そこには教育がある—というのは当然でないのかもしれないと思った。教育を行っていくために人を育てることの大事さ、使命感を持って教育を行っていく人材の育成をしなくてはならないのだと思った。
8月3日(水)	午前：カトリック系聾学校見学・中等教育学校交流 午後：教育研究所見学	急きょ聾学校の見学ができた。とてもよかった。生徒との交流の時間が短かったことが残念だった。マラウイの教科書事情についてももう少し考えたい。何かできないか。
8月4日(木)	午前：ゾンバ県病院見学・ゾンバ刑務所見学 午後：UNICEF 事務所訪問・意見交換会	玉枝さんの人柄！医療環境が十分でない中、人柄と工夫でどれだけの人が救われているのだろう。刑務所にいながら活躍の場があることは彼らにとって生きる糧になるのだろう。
8月5日(金)	午前：マラウイ柔道協会訪問・交流 午後：ザラニヤマ森林保護区の持続的な保全管理プロジェクト視察	柔道協会の子どものたちの礼儀正しさに感銘。「柔道をやめることを家族に反対されている。それは空腹につながるから。」とても悲しい現状だと思ったが、それでも柔道をやりたい子どもたちがいる。何かできることはないか—と考えずにはいられない。お土産にも喜んでもらえてよかった。

日 時	訪 問 先	所 感
8月6日（土）	午前：カスングナショナル パーク事務所訪問・見学 午後：カスングナショナル パーク見学	象牙を得るために密猟がやまない。炭を得るための森林伐採。自分とは遠いことではなく、すぐ近くでおきている。生きるためには仕方がない？ お湯の出ないシャワー、電気がなく蝋燭—全然不便を感じない。普段わたしは多くを望みすぎているのだろう。
8月7日（日）	午前：カムクワンバ氏の風 車見学 午後：市場見学	学ぶことで人生は変わる—カムクワンバ氏の原点に触れた。市場で、現地の人達の熱気から、たくましさを感じた。「生きている」。私もマラウイアンたちも。
8月8日（月）	午前：JICA マラウイ事務 所での報告会 午後：マラウイ→南アフリ カ	約10日間。あっという間に過ぎた。マラウイでの1週間。出発、帰国してからの日々—マラウイ滞在はたくさんの気づきを得ることが出来た。空港を出るのが寂しかった。
8月9日（火）	南アフリカ→香港	全員が元気に帰国！
8月10日（水）	福岡	

学 校 名	大分県立大分上野丘高等学校（大分県）		
氏 名	裏 久 代	担 当 教 科	地歴科（地理）

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

「生き抜く力」＝「学ぶ力」＝「自分自身を成長させる力」だと考える。日本人が、日本社会で、さらには世界で生き抜くためには、生きていく環境に適応していかなければならない。それぞれの国や社会での生活・文化や慣例・慣習、人間関係など、常に学ぶ姿勢をもち、適応させ、その中で自分を成長させる力があれば生き抜いていける。決して物質的にも社会的なチャンスにも恵まれていないマラウイの環境において「生き抜く力」を感じたのは、置かれた環境の中で精一杯の「学ぶ力」を感じたときであった。主語が誰であれ、生きていく社会がどこであれ、「学ぶ力」こそが「生き抜く力」だと感じた。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／生徒たちに伝えたいこと

「教育」の重要性。生徒の「生き抜く力」＝「学ぶ力」を育てる教育環境は、社会教育や家庭教育などもあり、決して学校教育に限ったことではない。その中でも、私たち教師にまずは出来ることは、学校教育の重要性やその責任の重さを再認識することであると感じた。学ばなければどの分野においても力がつかないことはもちろんのこと、自分自身の可能性にも気付かない。目の前に訪れたチャンスさえ掴むこともできないのではないかな。学ぶ姿勢の大切さ、本質的な意味で「学ぶこと」の大切さを、日々の授業での実践を通じて伝えていきたい。

3 教育指導への活用について

私が担当している地理Bの学習指導要領の目標は「・・・前略・・・、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。」というものである。「高校での地理教育」＝「国際理解教育」という認識のもとで日々の授業を実践している。国際理解教育の軸は開発教育であるとも感じている。今回の研修もその一教材として十二分に活用できる。高校では、教科指導と同じレベルで進路指導が極めて重要である。教育学部、経済学部、農学部、医学部、工学部・・・どのような進路に進んでも、開発途上国の現状や視点をもって、グローバル社会を認識することは極めて重要であり不可欠であると考えている。日々の授業に加え、進路指導にも役立てていきたい。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

個人では足を踏み入れることのできない公的な場で研修できたことは貴重な経験であった。研修場所や内容もよく練られており、各研修地での研修の目的も明確であった。企画されたスタッフの方々の思いや心遣いを感じた。研修内容の量・質ともに概ね満足であった。ただ、研修という名目で開発途上国へ行ったことが初めてだったので、自分の中での折り合いがつかないだけかもしれないが、「(経済的に)豊かな生活を送る人たちからの視点」からの研修が多かったように思う。日本人である以上、日本人としての視点が軸になるのは当然だが、マラウイの人々、アフリカに生きる人々の視点で考えられるような、「生活」に根付いた研修があっても良いのではないかと感じた。隊員が派遣されている農村の日常生活を体験したり、マラウイの将来を担う若者や農村で生きる庶民の声を聞きたかったとも思う。JICA や政府系職員、現地の教員など、大人同士での意見交換の場や時間は豊富であったが、若者や庶民からの視点で現状を理解する場が極めて少なかった。自国の現状や、自国の将来をどのように考えているのか。中等学校での交流の中で日本側の教員からの企画で生徒たちの夢を書いてもらった際に、短い時間であったが率直な若者の想いを垣間見ることができ得るものが多かった。政策レベルと庶民レベルでの両方の視点をもって一国を見れば、もっと多面的な見方へとつながるのではないかと感じた。

5 JICA に対する要望・提言

一人あたりの GDP の数値から、「最貧国マラウイ」「アフリカで、世界で、最も貧しい国マラウイ」という表現が国内・国外研修地各所で多用されていたが、「正しく伝える」という観点から検討が必要だと感じる。あくまでも、途上国の中でも経済や生活水準の指標が低い「後発開発途上国」という表現を用いるのが基本ではないだろうか。「後発開発途上国」に分類されている国は世界に約 50 ケ国あり、全世界の 4 分の 1 もの国が該当する。中南アフリカの 34 ケ国が該当し、マラウイもその一つではある。「後発開発途上国」＝「最貧国」の表現は、「最も貧しい国」との誤解を与えかねないし、実際誤用されている。また、GDP で示される数値は、あくまでも国際的な市場経済体制からみた一つの目安でしかない。石油やダイヤモンドなど資源を独占している一部の超富裕層により、一人あたりの GDP が引き上げられ、著しい格差によって一般国民の貧困の度合いが GDP では見えにくいのが多くのアフリカの現状であると思われる。「世界で最も貧しい国」として紹介されたマラウイの子どもたちの笑顔を写真で見たときに、日本の子どもたちに矛盾や楽観的な印象を与えはしないだろうか。子どもたちは一生に一度しか「マラウイ」について学ぶ機会に出会わないかもしれない。「正しく伝える」という観点から、JICA 側からの情報発信の際の表現の仕方について検討が必要だと感じた。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

毎日多くの情報にさらされます。事前に自分自身の抱く課題は何なのか、何を見たいのか、何を知りたいのかを明確にしていくと良いと思います。あれも、これもと得ようとする、情報の収集（写真や各研修場所での質問など）が広く浅くなってしまうような気がします。自分自身の課題をもち、研修を通じて感じたことを戻ってきてからさらに検証することも大切だと思います。マラウイを知り、理解することが目的ではなく、あくまでもマラウイを通じて中南アフリカの現状を理解するという視点で見れば、普遍的な課題の解決へとつながるような様々な授業への応用もできるのではないかと考えます。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月1日（月）	JICA マラウイ事務所訪問 日本国大使館表敬 中等教員養成校建設プロジェクト視察 OVOP ショップ視察 現地職員・隊員歓迎夕食会	・マラウイの概要について説明を受けた。識字率や義務教育の修了率など教育面の課題があげられる中、安全な水へのアクセス率が85%と高いことが印象的であった。日本のODAでこれまで1000以上の井戸を掘ってきた実績が、確実に人々の衛生環境の向上に役立っている。 ・西岡大使の「マラウイ政府の方針自体が世界的レベルでの発展や豊かさを目指していない。」という言葉が気になった。日本の支援方針との矛盾はないのか、疑問に思った。封建的な地主制度や慣習の残る農村部の改革には、国家レベルでの働きかけが必要であると感じた。 ・建設に携わっている建設会社が日本企業ではなく地元企業であることに、ODAの抱える課題に対する私の認識を少し変えた。ハード面の環境は申し分ないものだった。これにソフト面の環境が整えば、マラウイの将来に大きな希望が拓けると感じた。 ・大分県発祥の「一村一品運動」が国策として根付いていた。物や金ではない、発想による国際貢献の形を見た。途上国の自立支援、人材育成のモデルになる。「付加価値の高い農業」を目指しているマラウイの方針に合致している。品質は申し分ない。流通が課題。
8月2日（火）	中等教育強化プロジェクト	・大分県出身の専門家の徳丸さんの思いやバイタリティに感銘を受けた。同じ県出身者として誇りに思った。初等教育段階での退学者が約50%という。10代

日 時	訪 問 先	所 感
	プロジェクト校視察・意見交換	前半の女兒の出産の多さが、この国の抱える様々な課題の原因の根源であるように感じた。 ・現地の地理歴史の教員と意見交換を行った。マラウイでは日本について津波、トヨタ、自動車産業、マラウイの援助国であることなどを教えるという。マラウイにとっての日本の存在は大きいと感じた。「日本にはもっとマラウイに学校を建ててほしい」とためらいもなく言われた。日本の援助によって、マラウイの自立の目を摘んでいるような印象を強くうけた。日本の支援のやり方を再検討する必要があるのではないかと感じた。
8月3日（水）	中等学校での交流授業 マラウイ教育研究所・意見交換	・歌やクイズなど、こちらが準備した企画に生徒たちは積極的に参加してくれた。生徒たちに将来の夢を聞いた。マラウイの若者の夢を抱く力は日本の若者を上回っていた。政府系機関で話を聞くことが多い中、率直な若者の想いを垣間見ることができ、印象深い研修となった。 ・マラウイで使用されている教科書が販売されていたため、初等教育8年生の社会科の教科書を購入した。教科書の最初には、「悪い教師の例」、最後には「HIV・AIDS への注意喚起」がイラスト入りで掲載されていた。初等教育の教科書にこのような内容を掲載しなければならないマラウイの現状をあらためて認識した。
8月4日（木）	隊員活動視察（理学療法士） UNICEF 事務所訪問 意見交換	・チェワ語で現地の人や子どもたちと生き生きとコミュニケーションをとる隊員の玉枝さんの姿は、庶民の目線での国際貢献のあり方示してくれているようだった。日本の授業で使用するためのインタビューにも快く応じてくれた。 ・国連による政策レベルでの国際貢献の姿を垣間見た。隊員の玉枝さんのような「現場」と、政府レベルでの両者が連携・連動していくことが必要だと感じた。UNICEF 事務所内各所に貼られた「全ての女性には、教育を終了させる権利がある。」というポスターの言葉が印象に残った。
8月5日（金）	柔道協会訪問	・柔道を通じて子どもたちが挨拶やマナーなどの社会性や忍耐強さ、集中力を身につけている姿に感銘を受けた。スポーツの教育力に可能性を感じた。一方で、「おなかか空くから柔道はしない」という子どもたちがいることを聞いて、残念で悲しい気持ちにもなった。協会の方から「新しい畳を送って欲しい」と言

日 時	訪 問 先	所 感
	森林保護区保全管理プロジェクト視察	われた。マラウイの各所で「〇〇が欲しい」と私たちに対してマラウイ人の大人が何のためらいもなく言うことへの違和感はぬぐいきれない。 ・最近動き出したばかりのプロジェクトであった。森林保護区では、薪炭材伐採の現状を目の当たりにした。毎日の生活の燃料として、また少しでも現金収入をえるために薪炭を違法に伐採する人たちに、水源涵養や温暖化防止のために伐採を制限できるのだろうか。途上国における環境教育の難しさを痛感した。
8月6日（土）	ナショナルパーク事務所訪問・見学	・ナショナルパークでありながら、密猟によって野生動物の姿がほとんどみられなかった。多くの木々がありながらも鳥のさえずりさえ聞こえない。広大な敷地内に観光客の姿もほほなかった。長期的な視点での国づくりについて、マラウイ人や政府が方針を描くことが必要だと感じた。この国で、生物多様性や森林保全など地球環境レベルで捉える考え方を普及させるには、相当な時間がかかる印象を受けた。
8月7日（日）	カムクワンバ氏の風車見学	・カムクワンバ氏の自伝の中の写真でみた自宅や家族の様子と、現在との違いに驚いた。学ぶことで、自分の人生や家族の生活を大きく変えたカムクワンバ氏のことを、日本の若者には英語の教科書や市販される書籍を通じて知られているが、マラウイの国民にはほとんど知られていない。教育の重要性を理解するための教材として活用できるはずである。マラウイには眠っている人材や資源がありながら、活用できていないものが他にもあるのではないかと感じた。

学 校 名

菊陽町立菊陽西小学校（熊本県）

氏 名

緒 方 美 恵

担 当 教 科

6 年生担任

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

マラウイの大地で大きな太陽が沈み、次の日に大きく輝いた太陽が昇る光景を毎日目にしながら大きな太陽が人々の希望と重なり、人々の「生き抜く力」の根源は「明日への希望」だと感じました。2001 年の大飢饉で生死の危機から風車で発電を起し村の人々に希望を与えたウィリアムカムクワンバ君との出会い。現地では、教育が明日への希望につながり様々な活動支援が行われていました。国際協力に携わる人々も国の発展に希望を持ち活動されていました。「希望」が人々に笑顔を与え、前向きな生活を生みだし、人々の生き抜く力につながっていました。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

これからの教育や取り組みについて、現地の先生方、JICA マラウイ関係者、ユニセフ職員と様々な方々から話を聞くことができ、国を支える教育の重要性について改めて考え直す機会となりました。また、たくさんの日本人が国際協力という場でいきいきと活動されている姿を拝見し、私自身も熱を持って教育に励んでいきたい、国際協力に携わっていききたいと熱い思いを持つことができました。また、マラウイで出会った人々の温かさや笑顔に触れ、どんな環境であろうともたくましく生き抜く自分でありたいと思いました。熊本地震がおき、元気のでない自分自身の心に強さや勇気をもらうことができました。子どもたちにも、希望を持って前向きに生きる人々の姿を伝えていきたいと思います。

3 教育指導への活用について

マラウイで知った現状を伝えながら、そこで生きる人々から学んだことを伝えていきたいと思っています。風力発電を作り生活を変えていったカムクワンバ少年、電気も水もない土地で情熱を持ち活動する青年海外協力隊の人々、学習することのありがたさを知っているマラウイの子どもたち、人々の思いから自分の生き方につなげる学習を行っていききたいと思っています。日本の当たり前の生活が当たり前ではないこと、世界を視野に入れた教育や国際協力について学び深めていきたいと思っています。

4 研修に関する全体的な所感／意見について

全ての研修の背景にマラウイという国への熱い思いが感じられ、内容濃い充実した研修でした。共に参加したメンバー、研修で出会った人々、全ての方々から学ぶことが多くあり出逢いに感謝

しています。アフリカという日本と全く異なる環境に行くのは不安も多くありましたが、自分自身の視野を世界へ、地球の未来へ広げていくことができました。日常の慌ただしい日々を離れ、私たちの知らない異国の地で刺激を受けることで、自分自身の生き方を見つめ直し、これからの生き方を考えるいい機会になりました。

5 JICA に対する要望・提言

事前研修から事後研修と、現地での学びがより深まっていく研修を設けて頂き感謝しています。研修から得たものは大きく、学校現場にしっかりとフィードバックしていきたいという思いが強くなります。国際理解教育を推進していくスタートとし、学びを実践していきたいと思います。県の JICA デスクともつながりを持ち相談しながら、継続した取り組みを進めていきたいと思っています。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

研修参加者とのつながりが、たくさんの不安を取り除いてくれました。同行スタッフも含み、ネットワークを大切にしてほしいと思います。写真やビデオは共有すると、欲しい情報が得られると思います。言語があれば、現地教師との意見交換会や交流授業でもっと交流が深まっていたのではと後悔します。英語や現地語は、少しでも話せた方がいいなあと思いました。研修後に伝えたい授業のイメージを持っていくと、必要な情報をより深めていくことができたと思います。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8 月 1 日 (月)	・ JICA マラウイ事務所オリエンテーション ・ 在マラウイ日本国大使館表敬 ・ リロングウェ中等教員養成校建設プロジェクト視察	・ JICA マラウイの活動の様子や国の現状について知ることができた。渡航中に注意すべき安全面や健康面の話もして頂き、心構えができた。 ・ 緊張の中での大使館訪問だったが、マラウイで活動している日本人や企業のことが見えてきた。マラウイという国が、今後発展していくためにいろいろな模索がされていた。 ・ 建設現場に行き、規模の大きいプロジェクトに驚いた。工事に取り組むマラウイの人々の姿から、工事が予定通りに進まない現場のもどかしさを感じた。日頃、当たり前に行っていた日本の掃除教育の素晴らしさを知った。

日 時	訪 問 先	所 感
	・ OVOP（一村一品） ショップ視察	・ 大分県の一村一品運動が、マラウイにつながっており驚いた。様々な製品が開発され、今後の展望が見られた。
8月2日（火）	・ 中等理数科教育強化プロジェクト視察 SMASSE ・ 中等理数科教育強化プロジェクト視察 / 意見交換会	・ 中等の理数科教育に力が入れていることが分かった。国を発展させるために大切な分野であることが伝わった。現職の教員研修に力を入れ、リーダー校から研修を広げられているのが分かった。教員の質の向上が求められていたが、初等教育では100人ほどの子供たちが木の下で教科書もなく学んでいると聞き、大きなギャップを感じた。 ・ 日本とマラウイの教育について、現地の先生方と意見交換ができる素晴らしい機会だった。専門に分かれ、初等教育分野がなかったのが残念だったが言語分野に参加した。テストに向け、講義式のスタイルが主流であるのを感じた。研修会には、リフレッシュメントウォーターという制度があり、途中配られるコーラーやパンに文化の違いを感じた。
8月3日（水）	・ 聾学校視察 ・ 中学校での交流授業 午後 ・ マラウイ教育研究所見学	・ 少人数で教育設備も整い手厚い教育が施されていた。先生方も工夫を凝らした授業づくりを実践されていた。聾学校でも進級試験制度があり、校長室に成績順が張り出されていたのに驚いた。近所では、ビニール袋を丸めたボールでサッカーを楽しむ少年たちと出会った。 ・ 到着が2時間も遅れ緊張の出会いだったが、歌と踊りで心がほぐれると子どもたちは笑顔いっぱい活動してくれた。高校生年代にあたる子供たちだったが、素直で生きるパワーを感じた。将来の夢を書いてもらおうと医師や看護師が多く、必要とされる生活の背景が見えた。 ・ 国中の教科書を印刷しているのに、壊れた機械がいくつもあり驚いた。積み重ねられた製本できない大量の教科書を見て、子どもたち一人一人に教科書が行き渡らない理由が分かる気がした。5年生からの教科書は、全て英語で表示されていた。「農業」という教科書に興味を持ち購入した。
8月4日（木）	・ ゾンバ県南病院理学療法士隊員活動視察	・ 小児科病棟での子供たちの怪我の様子が生々しかった。熱湯での火傷やミニバスでの事故からの怪我が多く、包帯からは血が滲み出ている。理学療法士である玉枝隊員が明るく、現地語でたくさんの人々と触れ合っていた。現地の方々から信頼

日 時	訪 問 先	所 感
	・ 刑務所バンド訪問 ・ UNICEF 事務所訪問 意見交換会	され、愛されているのを感じた。 ・ 病院隣の刑務所で、グラミー賞候補になったバンドがいるということで玉枝隊員が案内してくれた。懲役 10 年というボーカルが明るく歌い、突然の訪問者を楽しませてくれた。 ・ UNICEF は募金活動程度にしか知らなかったが、国の教育政策から国の発展まで関わっており、今まで見えてなかった世界の教育が見えてきた。教育統計学という、日頃は考えもしなかった数字から教育の現状を探っておられた。学ぶことで国が豊かになっていくことを語られ、自分自身をもっと勉強したい気持ちが高まった。
8 月 5 日（金）	・ マラウイ柔道協会見学 / 交流会 ・ 市場見学 ・ ザラニヤマ森林保護区の持続的な保全管理プロジェクト視察	・ 礼儀正しい子供たちの振る舞いに驚いた。数年前、熱ある隊員さんが指導を始められたことからのスタートで現地の指導者に引き継がれていた。日本の武道から、礼儀の心までも引き継がれていることがうれしかった。 ・ 活気ある市場に人があふれていた。野菜や魚が売られている近くで、散髪屋があり髪の毛が散らばっており、不衛生な空間だった。女性は、髪を編み込み、チテンジを身に着けおしゃれに装っていた。 ・ 地球環境問題で扱っていた森林伐採という現場に初めて訪れた。製紙や木材のための需要かと思っていたが、生活のための炭にしていく話を聞き心痛くなった。自転車にまきをくくりつけ運んでいる人々と多くすれちがった。まきは、人々のわずかな収入源となっていた。
8 月 6 日（土）	・ カスングナショナルパーク見学 事務所訪問	・ 密猟の話を聞くことができ、いろんな対策が講じられていること、深刻な問題であることが分かった。湖のほとりで、カバやインパナと出会い、林の中に像を見つけることができた。 ・ 夜は停電しろうそくでの生活だったが、夕日、星空、朝日と自然の偉大さ、素晴らしさを体感することができ感動の連続だった。
8 月 7 日（日）	・ カムクワンバ氏の風車見学	・ カムクワンバ君の家を訪ねることができ、お父さんや妹さんと会うことができた。発電風車を実際に見ることができ、カムクワンバ君の少年時代を想像することができた。学校に行くことができなかった少年が図書館に通い知識を得、生活を変えていった事実を子供たちにも伝え、学ぶことの素晴らしさを考えていきたいと思った。

日 時	訪 問 先	所 感
8月8日（月）	・ JICA マラウイ事務所 報告会	・ JICA の皆様が様々な要望にも応えて下さり、研修がより充実したものになったことに感謝の気持ちを伝えた。マラウイの時間はゆったりと流れ、計画通りにいかないこともあったが、心穏やかな現地の人々の温かさを感じる研修となった。

学 校 名	霧島市立横川中学校（鹿児島県）		
氏 名	藏 園 清 邦	担 当 教 科	英 語 科

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

「生き抜く力」とは未来へ希望を抱く力。「明日は今日よりも、もっとよくなる」と考え希望を持ち続けられる力ではないでしょうか。「風をつかまえた少年」として有名になったカムクワンバ君に象徴されるように、希望を捨てず行動しようとする力が生き抜く力になると考えます。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

まず、自分自身の成長につながったことは、世界を少しでも良くしようと日々努力している人々を自分の目で見ることができたことです。これからは自分自身も世界をよくするための行動をしていきたいと考えました。また、十分なモノがない中で幸せそうに暮らしている人々を見て「豊かさ」について改めて考えることができました。

次に子供たちに伝えたいことは、「豊かさとは何だろう」という問いです。大量生産大量消費に慣れ、モノがあふれた世界で生活していると欲望は尽きることなく、満たされることはありません。豊かさとは何か、これからの社会はどうあるべきかを生徒とともに考えていきたいと思います。

3 教育指導への活用について

マラウイは日本とは対極的に、物質的に満たされた社会ではありません。しかし、「豊か」さや「幸せ」という言葉を考えたときにどちらの国が「豊か」で「幸せ」なのかは分かりません。生徒に「豊か」さや「幸せ」の意味を考えてもらいたいと思います。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

世界最貧国と呼ばれるような国を訪れる機会は滅多に得られるものではありません。最貧国という言葉だけでイメージしてしまうマイナスのイメージを大きく変える研修でした。テレビや本から得られる情報だけでなく、自分の目で見てみないと分からないことはたくさんあると思います。今回は旅行では訪れることができないような場所にまで行き、現地の人の話を聞いてたくさんのことを学ぶことができました。また校種や教科をこえて他の先生方と協力することがこの研修の醍醐味だと思います。

5 JICA に対する要望・提言

事前学習で体験型学習やワークショップの理論的な部分や、作り方をもう少し詳しく教えていただければよかったと思います。事前にわかっていたら滞在中に撮る写真や、集める情報にも変化が出てくると思います。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

マラウィに行くのであれば『風をつかまえた少年』を読んだり、TEDtalk でカムクワンバ君の動画を見たりすることをお勧めします。マラウィという国が身近になってきます。マラリア対策としては、短期滞在なのでマラロンという予防薬が役に立ちます。現地では、こまめに写真を撮影したりメモを取ったりしておくことで還元授業に役立つと思います。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7 月 30 日 (土) ～ 7 月 31 日 (日)	日本発 ホンコン ヨハネスブルグ マラウィ着	福岡空港から出発し、ホンコンで乗り換え、南アフリカのヨハネスブルグに朝方到着しました。ヨハネスブルグでのトランジットは2時間と短いにも関わらず混んでいて、危うく間に合わないかと思いました。マラウィに到着すると自分の荷物だけ見つからず、初めてのロストバゲッジを経験し途方に困りました。
8 月 1 日 (月)	JICA マラウィ事務所 在マラウィ日本国大使館	オリエンテーションではマラウィに関する説明をしていただきました。中でも出生率が4以上で数十年後には人口が現在の2倍程度になるという話には日本との違いに驚きました。若者が増えこれからの成長が期待できる国なのだと思います。 大使館では西岡大使からマラウィと日本の経済についての話を聞かせていただきました。主要産業が農業であり、主な輸出品はタバコに頼っているため、これからはその農産物にどのような付加価値を付けていくかが大事だとおっしゃっていました。しかし健康志向が強まる中で、タバコが主要産業では限界があるため、新たな道を模索する必要があると感じました。

日 時	訪 問 先	所 感
	リロングエ中等教員養成 学校建設プロジェクト	日本の支援による中等教員養成学校の建設現場に行き、もうすぐ開校する大学の見学をしました。現場を監督する大貫さんから「マラウィ人は言われたことはちゃんとするが、ずっとしている。考えて作業することは苦手だ」という話を聞き、国民性というものを考えました。
	OVOP ショップ視察	大分で生まれた一村一品がマラウィにも根付いていました。バオバブオイルなど海外でも人気が出そうな商品があり品質の高さに驚きました。
8月2日（火）	中等理数科教育プロジェクト（事務所）	徳丸専門家よりマラウィ中等理数科教育教科プロジェクト（SMASSE）について説明していただきました。小学校を卒業できるのが5割程度であったり、クラスに100人以上の生徒がいたりと学ぶ環境の根本的な課題も多いと感じました。
	中等理数科教育プロジェクト（支援校）	現地教員との交流をする機会があり意見交換をしました。「日本の教員は英語ができなくても中等教員になれる」ということに驚いていました。母国語で専門用語が表現できないため、母国語で中・高等教育が行えることが当たり前でない国はいっぱいありますが、改めて日本の教育レベルの高さを考えました。
8月3日（水）	聾学校見学	聾学校という性質上、少数指導のため卒業試験の通過率がほぼ100%だと聞き、ほかの小中学校も収容人数を制限することで卒業できる生徒が増えるのではないかと考えました。
	中等学校交流授業（ナマロンバ）	現地の中学生との交流授業を行いました。音楽に合わせて踊るアクティビティ、日本に関するクイズや、生徒の夢を書いてもらうドリームツリーなど生徒が積極的に活動してくれました。司会をしながら、どこの国でも生徒は一緒だと思い、いつか外国で教えてみたいと考えました。
	マラウィ教育研究所	マラウィ全体の教科書を印刷しているという場所を見学しました。日本とは中身の違う教科書を見て驚きました。教科書を買うこともできるので授業実践の参考になります。
8月4日（木）	ゾンバ県病院視察	協力隊員の玉枝さんに小児病棟を案内していただきました。整備された環境とはいえない中でケガの治療に取り組む子どもたちに胸をうたれました。

日 時	訪 問 先	所 感
	UNICEF 事務所訪問	UNICEF 職員である畠山さんから、マラウイ教育の実態を教えてくださいました。幼稚園や保育園などの就学前教育が重要だと聞き、早急な整備が必要だと思いました。
8月5日（金）	マラウイ柔道協会 ザラニヤマ森林保護区	柔道着を着て「おはようございます」や「お願いします」とお辞儀をしながら礼儀正しく振舞う姿が印象的でした。いつかはここからオリンピック選手が輩出されることを期待しています。 森林伐採の現状を見ることができました。まだ電気が普及していないマラウイは火力に頼っているため炭にしてお金を稼いでいるということでした。しかし伐採によって動物が住む場所を失っているため、観光資源も失っていることになります。早く負のスパイラルから抜け出す手立てが必要だと思いました。
8月6日（土）	カスングナショナルパーク	国立公園であるにもかかわらず道は整備されておらず、たどり着くまで大変でした。サファリドライブに3時間ほど行きましたが、ほとんど野生動物を見ることができず残念でした。しかし、夜の星や朝日は今まで見た中でも一番きれいなもので思い出に残りました。「無い」ということがマラウイのアピールポイントなのかもしれません。
8月7日（日）	カムクワンバ君風車見学	TED talk で有名になり絵本や教科書の題材にもなっているカムクワンバ君の風車を見学しました。お父さんや妹に会うこともでき、風車をみながら教育、学ぶ機会の重要性を改めて考えました。
8月8日（月） ～ 8月10日（水）	JICA マラウイ事務所 帰国	大きなケガや問題もなく日程を終えることが出来ました。乗り換えの都合で南アフリカに一泊でき、少しだけ南アフリカを体験することができて良かったです。

学 校 名	福岡市立福岡女子高等学校（福岡県）		
氏 名	嶋 田 亜日香	担 当 教 科	英 語 科

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

- ・どんな状況であれ、臨機応変に対応できること。
- ・物事を前向きにとらえ、行動に移していくこと。

2 視察を通して自身の成長につながったこと／子供たちに伝えたいこと

今までどこか他人事としてとらえていた開発途上国であったが、マラウイに行き、マラウイの人たちや JICA で働いている方たちと知り合うことで、とても身近なものにとらえるようになり、開発途上国への関心が高まった。

開発途上国の現状を知る中で、日本と開発途上国との関係や開発途上国への支援の必要性などについて学ぶことができた。また、自分が見聞きしたこと、学んだことを子供たちにはもちろんのこと、いろんな人に伝えたいという強い思いをもった。

日本と比べると、すべてにおいて不便さを感じ、最初は戸惑うことや不満に思うこともあったが、マラウイでの約 10 日間の生活を通して、自分の満足度は自分で決めることができること、求めすぎないことで幸せを感じることができることなど、自分の中での許容範囲が広がったと感じている。

3 教育指導への活用について

開発途上国については、とても遠い国のことで、私たちには関係ないように思えていたが、実際、JICA の取り組みや帰国してからの自分での学習を通して、日本と開発途上国は共存していることに気づかされた。開発途上国のために日本がやってあげている感が私たち日本人の中にはあるが、そうでないこと、そして開発途上国の支援が自分たちの支援にもつながっていることなどを伝えたい。また、グローバル人材とは英語が堪能であるということだけではなく、世界的な視野で物事を見て、自分にできることを行える人であることを伝えていきたい。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

今回の研修内容は私たち教員にさまざまな学びを与えてくれるものだった。開発途上国を訪れる機会はなかなかないので、このような機会を与えていただきとても感謝している。私たち教員がさまざまな経験をもち、その経験をもとに生徒に伝えていくことで生徒の世界観も広げることができると思う。ぜひ、今後もこの研修を続けていただきたい。

5 JICA に対する要望・提言

派遣が決定してから、出発をするまでの期間が短いため、準備をする時間にもう少し余裕がほしかった。ワクチンを受けたり、予防薬を処方する病院も特別な病院なため、時間を確保するのが簡単ではなかった。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

マラウイという国を知ることができたこと、研修を通して多くの人と知り合うことができたことで、自分の世界がとても広がった。普段の生活の中ではめったに経験できないことを体験してください。体調を崩さない限りは、JICA の方たち、一緒に参加した先生方のおかげで、どんなことも笑顔で乗り越えられた。貴重な経験をたくさんして、生徒に伝えてあげてください。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
7 月 30 日 (土)	福岡発→香港→南アフリカ	福岡から約 27 時間かけてマラウイへ到着。初めて見るアフリカの地、マラウイは自分の思い描いていたものとはかなり異なり、近代的で驚いた。見るものすべてが新鮮で車窓からずっと写真を撮り続けていた。
7 月 31 日 (日)	午前：南アフリカから移動 午後：マラウイ着	
8 月 1 日 (月)	午前：JICA マラウイ事務所オリエンテーション 在マラウイ日本国大使館表敬 午後：(無償) リロングウェ中等教員養成校建設プロジェクト視察 OVOP (一村一品) ショップ視察	JICA 事務所や大使館を訪れたり、教員養成校の建設現場で指揮をとる大貫さんや OVOP の活動を知る中で、今まで名前さえも知らなかったマラウイという国で多くの日本人が活躍していることを知り、日本とマラウイのつながりの深さを感じることができた。
8 月 2 日 (火)	午前：中等理数科教育強化プロジェクトについて学習・専門家との意見交換会 午後：中等理数科教育強化プロジェクト支援校訪問・現地教員との交流会	中等理数科教育強化プロジェクトに関して専門家の徳丸さんの話を聞き、教育の大切さを改めて感じた。また、午後、現地教員との交流会をもつことができ、マラウイの教育環境の大変さを知った。大変な教育環境の中でもなんとか現状を変えていこうとする教員の意欲を感じた。

日 時	訪 問 先	所 感
8月3日（水）	午前：カトリック系聾学校見学 中等学校での交流授業 午後：マラウイ教育研究所見学	中等学校の子供たちはシャイだが、素直で明るく、私たちが準備してきた日本についてのクイズや踊りをとても楽しんでくれた。また、自分の夢を書くという活動では、マラウイの子供たちがどんな夢をもっているのかとても関心があった。どの子もスラスラと自分の夢を書き、夢を語る姿が前向きでとても印象的だった。日本で同じ年齢の子供たちに接しているが、マラウイの子供たちのように将来に対する夢や前向きな姿勢がないことを感じた。
8月4日（木）	午前：ゾンバ県病院での協力隊員（理学療法士）の活動見学 ゾンバ刑務所見学 午後：UNICEF 事務所訪問・意見交換会	現地の国立病院を訪れて、十分な施設が整っていない状況を目のあたりにする。しかし、紙を利用して椅子など工夫して作っていて、ないことを悲観することなく、ない中から作り出していくたくましさを感じた。協力隊の玉枝さんの紹介で、突然、刑務所を訪れ、グラミー賞候補になった囚人の人たちで組んだバンドの練習場面を見せてもらう。とても生き生きとしていて、罪を犯した人たちの自己肯定感を高めていることを感じた。
8月5日（金）	午前：マラウイ柔道協会訪問・交流会 午後：ザラニヤマ森林保護区の持続的な保全管理プロジェクト視察	柔道協会を訪問。現地の子供たちが礼儀作法をしっかりと身に着けて、懸命に活動している様子を見ることができた。靴をそろえる、部屋の出入りの時には礼をするなど、礼をつくす姿に感激した。午後は森林保護区へ。マラウイ人にとって生活の糧として必要な薪、炭の確保のため、森林伐採が進んでいることを知り、森林伐採を食い止めることの難しさも感じる。
8月6日（土）	午前：カスングナショナルパーク事務所訪問・見学 午後：カスングナショナルパーク見学	密猟の現状を学ぶためにナショナルパークへ。象牙を得るため密猟が行われ、象の数が激減していることを知る。パーク内の宿舎に一泊する。停電したり、お湯が出ずシャワーを浴びれなかったりしたが、そんな状況にも動じなくなった自分がいた。それよりも星空や朝焼けの美しさ、野生動物や鳥の声がある中でゆっくりと流れていく時間がとても貴重に思えた。

日 時	訪 問 先	所 感
8月7日（日）	午前：カムクワンバ氏の風車 見学 午後：現地の人の生活を見るた め、市場見学	カムクワンバ氏の自宅を訪れ、彼が作った 風車を見学。貧しいながらも学ぶ意欲を持ち 続け、現状を変えた彼の行動力を感じる。午 後は市場を訪れ、マラウイの人たちの実生活 の様子を見る。市場はとても活気があり、笑 いがあり、マラウイ人のたくましく明るく生 きる姿を見ることができた。
8月8日（月）	午前：JICA マラウイ事務所での 報告会 午後：マラウイ発→南アフリカ 南アフリカ泊	マラウイでの一週間はあっというまだった が、多くのことを見聞きして、学ぶことがで き、とても充実した日々だった。マラウイに 来る前と後で自分のアフリカへのイメージが 変わったこと、また自分自身も成長できたの ではないかと思う。この研修を通して、マラ ウイという国を知ることができたこと、多く の人たちとの出会いがあったことが今後の私 の財産になると思っている。
8月9日（火）	午前：南アフリカ・ヨハネスブ ルグ発→香港	
8月10日（水）	午後：福岡着	

学 校 名	直方市立直方東小学校（福岡県）		
氏 名	清 水 啓 子	担 当 教 科	小 学 校

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

○ 現状をありのままに受け入れる力

- ・ マラウイの人と触れ合った中で、最貧国と言われている厳しい国でも、笑顔で楽しそうに過ごしている姿が印象的だった。自分の置かれている状況に不満をもてば切りがないし、不満をもったまま生活していても中々向上心は生まれてこないように思う。マラウイに行く前の自分自身に当てはめてみても、周りの人と比べて、置かれている状況に不満や憤りを持つことが多く、やる気や向上心はあまりなかったように思う。研修に参加して、マラウイの人々の様子を見ると、厳しい状況でもありのままを受け入れ、その中で楽しみを探しているように見え、そこに生き抜く力を感じた。

2 視察を通じて自身の成長につながったこと / 子どもたちに伝えたいこと

- ・ 現地で働く日本人の方から話を聞く機会がたくさんあった。どの方もマラウイがよりよくなる為に、目の前の子どもたちがより良い教育を受けられる為に活動していた。事前研修や現地の研修で、マラウイが置かれている現状を知り、正直どうすればマラウイが豊かになるのか分からず、八方塞がりであると感じた。しかし、そんな中でもマラウイで働いている日本の方々が向上心を忘れずに自己研鑽に取り組んでいる姿に衝撃を受けた。私も不満をもち、マイナスにばかり考えるのではなく、少しでも良くなれるように、できるところから、前向きに取り組んでいきたいと考えられるようになった。
- ・ 子どもたちには、今置かれている生活環境は当たり前ではないということを伝えたい。電気や水道などがあることの大切さも分かってほしいと思った。また、海外でたくさんの日本人がその国の為に働いていること、不満ばかり持つのではなく、その中から楽しさを見つけることの大切さも伝えたい。

3 教育指導への活用について

子どもの発達段階に沿って、興味が持てるように活動を仕組みたい。一方的に伝えたり教えたりのではなく、子ども達が体験し、実感できるようにマラウイの写真やチテンジなどの具体物を用いて子ども達に伝えていきたい。「マラウイは最貧国で可哀想」とは思ってもらいたくないので、授業の進め方に気をつけていく必要がある。

他の教員にも積極的に経験したことを伝えていきたい。

4 研修における全般的な所感 / 意見について

事前、事後研修も含めて、とても充実した研修でした。毎日のスケジュールも私たちのことをよく考えてくださって計画されていて、どの研修も本当に良い経験になりました。見学するだけでなく、意見交流をする場面が多く設定されていたことも自分の考えや思いを整理する上で良かったです。マラウイに研修に行けたことで、自分の生活を振り返り、反省することもできました。マラウイの為に懸命に働いている青年海外協力隊の方々を見て、自分も国際社会の為にできることはないかと考えるようになりました。

5 JICA に対する要望・提言

研修に参加した全員が怪我をしたり、体調を崩したりすることなく活動できたのは JICA の方々のおかげだと思います。私たちの希望もたくさん聞いていただき、柔軟に対応してくださってとても感謝しています。事前研修で、前年度研修された方の話や前年度の流れなどをもう少し聞くことができれば、準備や心構えがしやすいのではないかと思います。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

マラウイでの研修は本当に充実したもので、あっという間に過ぎていきます。貴重な経験を忘れないためにも、こまめにメモを取り、自分の考えも書いておくの良いと思います。また、今回の研修で毎晩みんなで集まって、今日一日で感じたことを交流しました。そうすることで、自分が思っていなかった見方もできて視野が広がったと思います。なので、お互いの考えを交流する場を設定すると良いと思います。

現地の方の話を聞いたり、意見交流したりする場がたくさんありました。私は、英語がほとんど話せなくて、積極的に参加できず後悔することがあったので、英語ができると良いと思いました。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月1日（月）	JICA マラウイ事務所オリエンテーション 在マラウイ日本大使館表敬訪問 リロングウェ中等教員養成校建設プロジェクト視察 OVOP（一村一品）ショップ視察 事務所員・隊員・専門家との歓迎夕食会	JICA 事務所では、健康、事業概要、安全ブリーフィングを受けた。意味のある研修にするために、健康、安全には細心の注意をすること、無理をしないこと、振り返りの時間を大切にすることというアドバイスを受けた。話を聞く中で、「援助のやりがいがある国」という言葉が印象的だった。 大使館では、大使から日本とマラウイのつながりや、マラウイの置かれている現状について話を聞くことができた。教員の代表としてマラウイに来たということを実感し、身の締まる思いがした。 マツダの大貫さんに教員養成学校の建設現場を案内していただいた。より良い教育を進めるために、日本の支援が生かされていることを知った。話の中で、マラウイの人は穏やかな気性の人が多く、言われたことには真面目に取り組むが、一方で自分で考えて行動できないという問題もあるということが分かった。 OVOP（一村一品）ショップでは、それぞれの専門家が丁寧に指導し、商品が作られていることが分かった。 歓迎夕食会で、隊員の方と話をすることができた。水や電気がない土地で暮らしていたり、教材がない状態で教えていたりしているという話を聞き、自分たちが当たり前にあると思っているものは当たり前ではないと気付かされた。「何もないけれど、子どもたちが目を輝かせて授業を受けてくれることが嬉しい。」という話を充実した表情で話している姿を見て羨ましく感じた。
8月2日（火）	中等理数科教育強化プロジェクト視察（リロングウェ） 中等理数科教育強化プロジェクト視察・意見交換会（サリマ）	徳丸さんに話を伺った。教師の質を上げることで教育の質を上げるという考えを聞き、自分自身も教師の質を上げていかなければと思った。このプロジェクトが終われば、すべて終わるのではなく、日本の支援がなくても活動が継続できるようにとマラウイのことを真剣に考えていることが強く伝わってきた。 サリマでは、よりよい学習を行うために、教員の要望を聞いて研修を自主的に行っていることが分かった。意見交換会で、たくさんの意見を交流することができた。教員をしていて、嬉しい、よかった

日 時	訪 問 先	所 感
		と思うことは何か。という質問をした時に、教員が少し困ったような顔をしていた。教員が嬉しい、良かったと思えるような教育環境を作ることも教育の質を上げる為に必要なのではと思った。
8月3日（水）	MUA 聾学校視察 中学校での交流授業 (ナマロンバ) マラウイ教育研究所視察 (ゾンバ)	予定にはなかった聾学校へ行くことができた。子どもたちが卒業後自立していけるように、手に職をつけられるアートの時間があることを知った。また、一般の初等教育と同じように国家試験を受けることも知った。一般の初等教育の子どもたちの合格率よりも聾学校の子どもの合格率のほうが高いことが分かり、少人数学級が実現できれば、一般の初等教育も充実したものになるのではないかと考えた。 交流授業では、2時間以上遅れてしまったが、生徒や先生方が笑顔で迎えてくれた。日本のクイズや歌遊び、ドリームツリー作りをしたが、どの活動も意欲的に取り組んでくれてほっとした。目を輝かせて、こちらが何を言いたいのか真剣に聞いてくれて、とても嬉しく感じた。 教科書を作っている現場を視察させていただいた。全国の教科書を印刷機2台だけで作っていることに驚いた。どこの施設に行っても、物資が不足していると感じた。
8月4日（木）	ゾンバ県病院視察 UNICEF 事務所訪問	隊員の玉枝さんに病院を案内していただいた。火傷や骨折で入院している子どもが多かった。病院のどこへ行っても、マラウイの人が玉枝さんに話しかけていて、とても信頼されていると感じた。また、玉枝さんの提案で急遽刑務所へ行けることになった。刑務所では、グラミー賞にノミネートされた囚人バンドの演奏を聞いた。病院や刑務所など一見マイナスなイメージがある場所でも、笑顔が絶えず、みんな楽しそうにしている様子が伝わってきて、この明るさも生きる力につながっていると感じた。 ユニセフでは、統計からみたマラウイの現状やこれからについて話を伺った。現場で働いている人との考えのギャップを感じたが、いろいろな面からマラウイを見て、豊かになるためにはどうしたらいいのかを考える必要があるのだと思った。
8月5日（金）	マラウイ柔道協会訪問	柔道協会では、柔道の練習を見学した。子どもたちや入室する際に令をしたり、靴をきちんとそろえたり、日本の礼儀がマラウイにも伝わっていて嬉しく感じた。

日 時	訪 問 先	所 感
	ザラニヤマ森林保護区の持続的な保全管理プロジェクト視察（リロングウェ）	密猟した現場を見せていただいた。木を切って売るよりも、炭を作った方が高く売ることができるので、森林保護区内で密猟者が炭を作った跡がたくさんあった。森林保護区であるにも関わらず、太い木が少ないようにも感じた。密猟者を捕まえるのは私たちごっこで日々努力されていることが伝わってきた。
8月6日（土）	カスングナショナルパーク見学	ナショナルパークでは、レンジャーと一緒に野生動物を探した。しかし、想像していたようなたくさんの動物には会えず、ナショナルパークでさえ動物がいないことに驚いた。他の場所から、動物を集めれば、訪れる人も増えると思うのだが、そうしないところがマラウイらしいところだと感じた。
8月7日（日）	カムクワンバ氏の風車見学	カムクワンバ氏の風車を見学することができた。カムクワンバ氏の家族が温かく迎えてくれた。風車は想像していたものよりも小さかったが、子どものカムクワンバ君が努力して勉強し作ったものを見ることができて良かった。何もないところから自分で考え、工夫して作ることができて素直にすごいと思った。これも生きる力なのだと感じた。
8月8日（月）	JICA 事務所報告会	マラウイで体験したことの交流や報告会を行った。あっという間の研修だったが、私たちの為にたくさんの方々が動いてくださっていることを改めて感じた。日本に帰ったら、子ども達にしっかりと伝えたいと思った。

学 校 名	佐賀市立新栄小学校（佐賀県）		
氏 名	吉 田 宗 平	担 当 教 科	全 教 科

1 今回の研修参加を通して見つけた「生き抜く力」とは

自分の夢や目標に向かって、行動し、成功しても、失敗しても、なぜそのような結果になったかを振り返り、次の一步を踏み出そうとする勇気と行動力が「生き抜く力」であると考えている。

2 視察を通じて自身の成長につながったこと / 子どもたちに伝えたいこと

【自身の成長につながったこと】

- これまで行ってきた日本での教育の在り方を見つめ直し、継続していく所と修正していく所が明確になったこと
- 今後、自分自身がどのような方向に進んでいきたいかを見通すことができたこと
- 研修に行った仲間や現地のスタッフの方々と交流できたことやその人脈を得ることができたこと

【子どもたちに伝えたいこと】

- 「スポーツや音楽は、言葉の壁を越える！」
実際に現地のチェワ語を上手に話せなくても、サッカーボール1つあれば一緒にプレイできた。また、音楽のリズムにのれば、スポーツ同様、日本人であろうが、マラウイ人であろうが、共に楽しむことができたことで上記のように感じた。
- 「真の豊かさとは何か？」
物があること、お金があること、快適な生活ができること……。確かにそれも豊かさの1つであろう。しかし、今回の研修を通し、真の豊かさとは、「互いに尊重し合い、思いやりの心をもって生活していこうとする心があるかどうか」だと感じた。
- 「武道（日本）の良さ」
マラウイの柔道協会において、子どもたちが自然に礼をしながら入室していた。相手や物を大切にしようとする心が「礼」に表れていて、日本から遠く離れたマラウイの地でこの姿を見ることができて感動した。

3 教育指導への活用について

【道徳】 ウィリアム・カムクワンバ少年を題材にして、「夢や希望を持つことの大切さ」「努力することの大切さ」「人のためにできることを考える大切さ」などへと展開できる可能性を秘めている。

【社会】 マラウイの「水」事情を導入に、「住みよい暮らしを守る～水はどこから～」を展開していくことで、子どもたちの「水」に対する意識に変化が見られそうだ。

【開発教育】 マラウイのことを知るだけでなく、マラウイのことをきっかけに、「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを学年全体や保護者を交えて行うことによって、どのような立場の人でも共生できる社会作りに参加することにつなげていきたい。

【平和・人権教育】 マラウイの人たちとの出会いやマラウイでの文化を伝えていく中で、肌の色や国籍は違っていても、それぞれが貴重な存在であることや「みんな違ってみんないい。」ということに気付かせていくきっかけになり得る。

4 研修に関する全般的な所感／意見について

今回の研修を通して、良かったことが4つある。

1つ目は、マラウイの人たちとの交流である。言葉は片言であっても、表情やジェスチャーなどで何とかコミュニケーションを取ることができた。また、ボール一つあれば、キャッチボールをしたり、サッカーをしたりしながら共に楽しむことができた。その使ったボールにサインしてもらったが、そのボールは私の宝物となった。さらには、マイペースと言われるマラウイの人らしからぬムダリさんとの出会いだ。安全にしかも配慮が行き届いた JICA の運転手である。しかも、私たちが「シマを作っているところや一般の家庭を見たい。」と申ししたところ、家に招待をしてくれ、願いを叶えてくれた。やはり、日本人であってもマラウイアンであっても、相手を思いやる心は世界共通だと感じられた。

2つ目は、マラウイで出会った日本の人たちとの交流である。私たちの要望をできるだけ叶えようと調整をしていただいた古川さん。マラウイの大学建設にかかわり、1000人近くのマラウイの作業員たちを掌握している大貫さん。ゾンバの国立病院で理学療法士として、入院患者と真摯に向き合い、信頼を得ている玉枝隊員。元隊員であり、現在はマラウイのユニセフでボランティアに励んでいる長根尾さん。手探りながらも体当たりで子どもたちと向き合い、理数科教師として指導に当たられている坂井隊員。その他にも多くの方々と話をさせていただき、たくさんの刺激を受けた。ぜひ今後も交流を続けたい方々である。

3つ目は、今回の研修に共に参加したメンバーたちである。九州各県からの小・中・高・特別支援の異校種の先生方とこの2週間あまりを共に過ごし、いろいろな話ができただけから。魅力的な先生方がたくさんいらっしゃる、今後も情報交換しながら、刺激し合える関係を築いていけたら…と考えている。

4つ目は、これらの出会いを通して、「今の自分にできることは何か？」や「今後の自分がやりたいことは何か？」が明確になったことである。今の自分にできることは、大好きになったマラウイのことを多くの子供たちや保護者に伝え、「真の幸せ（豊かさ）とは何か」を共に考えていくこと。目の前の子供たちの成長に何が必要か考え、具体的な実践を積み重ねていくこと。今後やりたいことは、自分の原点である剣道を再開し、もう一度心身共に鍛え、マラウイアンと剣を交えること。シニアボランティアか専門家としてマラウイの人材育成に関わる仕事がしたいこと。

このような機会をいただけて、立野さんはじめ、JICA 九州のみなさんには本当に感謝しています。ありがとうございました。しっかりと実践を重ね、報告できるのを楽しみにしています。

5 JICA に対する要望・提言

- マラリアの予防薬が「メフロキン（週1）」と「マラロン（毎日）」の2種類が推奨されているが、「メフロキン」は副作用でうつ状態になりやすいとのことだったので、「マラロン」を薦めた方がいいと感じた。
- 現地が長期休業中だということはわかるが、できるだけ現地の子どもたちとゆっくりかかわり合う事ができる時間を確保してほしい（ほしかった）。
- 安全面等への配慮も考えてのことだと思うが、現地の高級ホテルだけに宿泊するのではなく、青年海外協力隊の方々が生活をしているような厳しい現地の生活も体験することにも価値があると感じた。
- 今回は報告書について、「昨年度を参考にしながら、いつでもよい」と言われていたが、10月中旬になって「今週末提出してほしい」との連絡があった。計画的に行っているので、最後まで任せていただくか、先に形式と提出期限を示していただくかしてほしい。

6 今後の本研修参加者へのアドバイス

- (1) 現地でのことを事前に調べられる分、調べておくことがおすすめ。調べておいても、十分に刺激を受けることがたくさんあるから。
 - (2) 体調を十分に整えておくこと。そうすることで、現地での様々な体験や交流を積極的に行うことができるから。
 - (3) 1日の終わりに、研修参加者全員でその日の「ふりかえり」の時間を持ち、感想や意見をシェアリングすること。自分の考えが広がったり、深まったりするから。
 - (4) 当日または翌朝までに、一人でその日体験したことや感じたこと、考えたことをメモしておくこと。様々な刺激的な体験を行うので、翌日の体験をしたら感動や記憶が薄れてしまうから。
 - (5) 現地で体験したいことなど、希望があれば JICA 担当の方に相談すること。今回の研修では、こちらの要望にかなり応えていただき、想像以上の充実した研修になったから。
- ※ 担当者によって違うかもしれませんが、貴重な機会なので、後悔がないように伝えられることは伝えておきましょう。

7 各訪問先の所感

日 時	訪 問 先	所 感
8月1日（月）	在マラウイ日本国大使館 JICA マラウイ事務所 リロングウェ中等教員養成大学建設現場 OVOP（一村一品）ショップ	【表敬訪問】 西岡大使から、マラウイの現状をうかがった。「資源は少なく、質・量ともに課題は多いが、（物質的に）貧しくとも温かい心がある（Heart of Africa）。」という言葉が印象に残った。 【オリエンテーション】 マラウイにおける JICA 事業についてうかがった。無償資金協力や技術協力など、多くの経済的・人的支援をアフリカのマラウイという小国に行っていることに驚いた。しかし、貧困率が72.1%（2013）、寿命54.7才（2012）、中等学校就学率29.5%（2012）などのデータを示されると非常に納得した。 【リロングウェ中等教員養成大学建設プロジェクト視察】 ODAにより2014年4月15日から2016年8月31日の期間で竣工を目指し、建設が進められていた。限られた予算や物資の中であっても、できるだけ室内を明るくするための工夫や車いすでも通りやすいスロープを付けるなど、考えられた建物になっていた。 【視察】 地域の特産物や手作り商品などを、その地域の方と日本人が協力をしながら経営をしている。旅行者にとっては、安心感があるし、現地の人にとっては労働場所の確保にもつながると感じた。この一村一品運動が日本の大分が発祥だったことも驚きだった。
8月2日（火）	SMASSE（スマッセ）事務局 中等理科教育教科プロジェクト（ムサルラ・コミュニティ中等学校）	【リロングウェ中等理科教育教科プロジェクト視察】 JICA 専門家の徳丸さんから、この教科プロジェクト（SMASSE）について詳しく説明していただいた。1つ目が「現職教員研修」、2つ目が「新規教員養成課程カリキュラム支援」、3つ目が「アクションリサーチによる生徒主体教育の現状と改善」である。率直な感想は、日本的なやり方がマラウイの実態に合うのかという疑問であった。日本の研修のよさを、現地マラウイの実態と上手く融合させていくことがさらなる効果につながると考えた。 【学校視察及び意見交換会】 クラスターのリーダー校であり、地域内17校の拠点校であるムサルラ・コミュニティ中等学校を視察した。基本実験機材や化学薬品、技術支援等が行わ

日 時	訪 問 先	所 感
		れており、研修や機材貸し出しを行っているとのことだ。ただ、一クラスあたり 100 名近くの生徒がいることが多いマラウイの学校の状況を考えると、効果的な活用は厳しいと言わざるを得ない。現地の先生方と意見交換をしていると、笑顔が多く親しみやすさは共通するものを感じた。しかし、給料が安く農業などの別の仕事と兼業している人もおり、指導力向上に目が向きにくい状況もあるようだ。
8 月 3 日（水）	ろう学校 ナマロンバ・コミュニティー中等学校 マラウイ教育研究所	【視察】 マラウイの特別支援教育の現状を知るために急遽、視察させていただいた。一番驚いたのは、マラウイ全体での初等教育卒業率が約 35%なのに対し、このろう学校では 100%ということだ。やはり、1 クラス 20 名程度の少人数であることに加え、絵や手話を効果的に活用し学習を進められていることの 2 つに要因があるようだ。それが可能になるのも経済的な支援があるからだと思った。 【交流授業】 日本で事前に考えていた授業を行った。1 つ目は、日本のことを身近に感じてもらうためのクイズ。言葉が分からなくてもわかるように拡大写真を使った。2 つ目は、手（体）遊び歌で「頭・肩・膝・ポン」を日本語バージョンとチェワ語バージョンで行った。やはり、歌や遊びは世界共通なところも多く、盛り上がった。3 つ目は、桜の木の幹を描いた模造紙の上に、桜の花びらの形をした紙に将来の夢を書く活動を行った。日本の子どももマラウイの子どもも夢が花開くようにとの願いを込めた。もう少しゆっくりかかわりたいと感じたが、子どもたちの弾ける笑顔が見ることができて、一番印象に残った交流であった。 【視察】 JICA の支援もあり、80 年来のかかわりがあるとのことだった。国のカリキュラム作りや現職教員の研修などもここで企画立案されているようだ。しかし、せっかく作った教科書も現状では、クラスに 1 冊程度しかないとの話を聞き、愕然とした。
8 月 4 日（木）	ゾンバ国立病院	【理学療法士 玉枝隊員の活動視察】 マラウイの子どもたちや保護者、同僚からも信頼されていることが、そのかかわり方から伝わってきた。非常に重度のケガや病気の子どものいるが、玉枝隊

日 時	訪 問 先	所 感
	UNICEF 事務所	員の笑顔や技術が子どもたちにとっての希望の光のように感じた。やはり、人の力の大きさを痛感し、「自分にできることは何か」を改めて考えさせられた。 【訪問】 畠山さんから、データから見るマラウイ教育施策の課題点を示してもらった。普段あまり詳しくデータを分析することが少ないので新鮮な面もあった。しかし、ただデータだけを比較し、検討しても実際の現場がどのような課題に直面しているかなど、現実とすり合せて考えていくことが、さらにより結果へと結びついていくのではないかと感じた。
8月5日（金）	ザラニヤマ森林保護区	【持続的な保全管理プロジェクト視察】 マラウイの自然環境や森林保護区、国立公園の概要について話をうかがった。保護区の木々を薪炭にしてから運び出す密猟者（グループ）がいるようで、その乱獲により森林が減少しているとの問題もあるようだ。しかも、マラウイの電化率は9.8%しかなく、生活のために森林伐採を繰り返しているという負の連鎖による課題も見られる。
8月6日（土）	カスングナショナルパーク	【視察】 密猟により、動物の種や個体数が激減しているとのことだった。このナショナルパーク（東京都と同範囲）に、1990年にはアフリカ象が2000頭以上いたそうだが、今では20分の1の100頭あまりしかいなくなっている。実際に一日探し回ったが、最後の最後でアフリカ象を遠目に確認することができたにとどまった。象牙に関しては、日本もかわりがあることを改めて感じ、人ごとではないと痛感した。
8月7日（日）	マラウイ柔道協会	【視察及び体験】 マラウイの子どもたちが道場に入る際に、きちんと礼をしている。やはり、それは柔道（武道）の「礼に始まり、礼に終わる。」の精神を受け継いでいるからだと感じた。柔道はスポーツとして世界に広まったために、競技の勝ち負けのみがクローズアップされることも多い。しかし、マラウイの地では、「相手を敬う心」や「物を大切にする心」までもしっかりと受け継がれているのを目の当たりにした。ここで、日本の武道のよさを改めて感じ、心が震えた。私自身、剣道を学生の間には行っていたが、社会人になってからは稽古する機会が減っていたので、改めて剣道の

日 時	訪 問 先	所 感
		稽古を続け、いつかこのマラウイの地で剣道協会にも足を運びたいと強く思った。
8月8日（月）	JICA マラウイ事務所	【報告】 非常に充実した研修になったことを報告させていただいた。特に、マラウイの子どもたちや先生方、スタッフの方々との交流、また日本人でマラウイにかかわる方々との意見交換などによって、自分自身の原点を再確認できたこと、今後の方向性が見通せたことなどを伝えた。さらに、参加者の報告を聞き、見方や考え方の共通点や相違点に気付くことができ、視野を広めることができた。

Ⅲ. 授業実践例報告書

ようこそマラウイ

市丸 恵理

ICHIMARU ERI

県立虹の原特別支援学校（長崎県）

担当教科：特別支援全科（音楽科）

●実践教科：生活単元学習、
総合的な学習の時間

●時 間 数：2時間×3（+α）

●対象学年：中学部生徒、教職員

●対象人数：約100名

2018/08/03

カリキュラム

■実践の目的

- アフリカ「マラウイ共和国」の生活や文化を知り、世界の国への興味関心を高める。
- タイズに答えたり、チェワ語の手遊び歌や物を頭上に乗せて運んだりするなどの体験活動を通して、楽しみながら異文化を体感する。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1～2時限】 テーマ：ようこそマラウイ ねらい：マラウイについて知る。写真を見たり、話を聞いたり、体験活動を通して五感でアフリカ・マラウイを感じる。	① 写真スライドでマラウイを紹介。 （場所、特産品、挨拶、お金、食事、教育など） ② 手遊び歌「頭・肩・膝・ポン」（チェワ語）。 ③ 文字が読めないとは？【体験①】 2本のペットボトルから「水」と書いてあると思う方を選び試飲する。 ④ 絵本の読み聞かせ。 「風をつかまえた ウィリアム」 	・ マラウイ（アフリカ）の民族衣装 ・ PC ・ 携帯用キーボード ・ ペットボトル2本 中身（水・塩水） 文字（水・毒） 
※授業は各学年で実施。 （各2時間） ※学年の実態に応じて一部内容を変更した。	⑤ ウォーキング選手権！ ～頭にのせて運ぼう～【体験②】 ⑥ マラウイの紅茶・お菓子を試食【体験③】  	・ 紙コップ ・ 絵本 ・ 籠など頭上にのせる物 ・ マラウイで購入した紅茶やお菓子 ・ ポット、紙皿
	⑦ 感想を発表。	

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【集会の導入】（10分） テーマ：マラウイ紹介 ねらい：① 写真や寸劇、手遊び歌を用いてマラウイの一部を紹介し、興味を持たせる。 ② マラウイ展の紹介・宣伝	① アフリカの民族衣装を着た仲間と寸劇。 ② チェワ語の手遊び歌を紹介。 速度を変えながら振り付けをつけて歌う。 ③ 写真を数枚紹介し、その他のマラウイグッズの展示場所を紹介する。	・ マラウイ（アフリカ）の民族衣装 ・ 携帯用キーボード ・ 模造紙（歌詞） ・ 拡大写真

授業の詳細

生活単元学習「外国の文化に親しもう」

【2時間】 テーマ：ようこそマラウイ

① 写真スライドでマラウイを紹介。



マラウイの場所、特産品、言語、お金、食事、教育などを紹介した。初めて聞くチェワ語での挨拶は意欲的に発音を楽しんでいた。また、長時間座って注目するのが難しい生徒も、普段より集中していろいろな写真を見ていた。クイズでは、日本との違いを見つけた。コーラの値段が日本と比べて随分安いことに驚いていた。

シマを作っている動画・食事中の動画を
見た。

食事にはみんな関心が高く、シマの味が気に入り、どんな味がするのか質問が出た。また、外で調理していることや食用でうさぎを食べること、手で食事していることなどにびっくりしていた。



② 手遊び歌「頭・肩・膝・ポン」(チェワ語)。

あたま かた ひざ(ポン)!
ムトウ マピュア マオンド
マオンド
マオンド
ムトウ マピュア マオンド
ジコモ ♪

生徒たちは音楽が大好きなので、すぐに振り付けをしながらチェワ語で歌えるようになった。キーボードで速度を遅くしたり速くしたりすると、さらに大きい声を出して楽しんだ。

ある生徒は、「マオンド」の響きが気に入って、歌が終わった後も数分おきに「マオンド」と口ずさんだ。

③ 文字が読めないとは？【体験①】

ネパールやインドで使われる文字で「水」か「毒」のラベルが書かれた2本のペットボトルから「水」と書いてあると思う方を選び試飲した。ラベルを眺めても全く文字が読めず、生徒は飲む直前までドキドキしていた。今回は「毒」のラベルの方は「塩水」を準備した。文字が読めないと、現実には体に害のある物を口にするかもしれない話をする
と「文字が読めないと困る！」という声があがった。



④ 絵本の読み聞かせ。（「風をつかまえたウィリアム」）

内容を少し簡単にして、PCでスライドショーにして説明をしたり問いかけたりしながら絵本を読んだ。話の内容から、マラウイの暮らしぶりが生徒にとって分かりやすくイメージしやすい教材だった。映像をよく見ている生徒が多かった。



⑤ ウォーキング選手権！ ～頭にのせて運ぼう～【体験②】

マラウイ（アフリカ）の文化の一つである“頭上に物をのせる”体験を行った。まず頭にタオルを丸く巻いたものを置き、その上に籠やバケツなどを実態に応じてのせ、床のテープをバランスとりながらモデル歩きするようにした。生徒はとても意欲的で、試行錯誤しながら楽しんで歩いた。各クラスで取り組んだ後は、クラス代表を選出し、決勝戦を行った。

優勝者は現地の布を体に巻き付けてみんなの前で歩いた。拍手喝采を受けて大変盛り上がった。



モデルあるき
できるかな

めざせ
ゆうしょう!



BGMはゾンバ刑務所バンドのCD



優勝賞品の葉

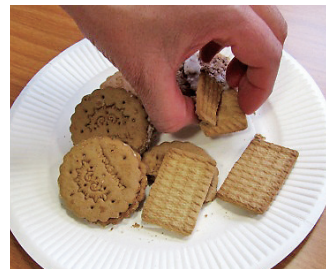
⑥ マラウイの紅茶・お菓子を試食【体験③】

マラウイのスーパーで購入した紅茶とお菓子をみんなでいただいた。学年によっては、相談して机や椅子を使わず床に座って飲食した。紅茶はティーバックだったので、事前にポットに準備しておいた。生徒の反応は、紅茶もお菓子も日本のものと同じような味で美味しかったようである。完食していた。

○ どうやって分ける？

はじめはお菓子を1人1つずつ配り、その後、再度人気のクッキーをクラスに数枚ずつ配った。すぐおかわりの手が出る生徒がいたが「相談して食べてね」と言うと、各クラスでじゃんけんをしたりクッキーを割って分配したり工夫して食べていた。

→ 限りある食糧の取り合いなどから世界では戦争が起きていることを確認した。



⑦ 授業の感想を発表。

<生徒の感想>

- ・ 学校に行けずに働かなくてはいけない子どもたちがいるなんてつらい。
- ・ 友達がたくさん学校を退学して減っていくのはさみしいと思う。
- ・ 進級できなかつたら困るし、学校に行けなくなったら勉強もできなくて仕事にも就けない。
- ・ 頭に物をのせるのは難しかったけど楽しかった。
- ・ マラウイの紅茶やお菓子はおいしかった。
- ・ 日本がいかに恵まれているかが分かった。

【集会の導入】（約10分）

テーマ：マラウイ紹介



学部集会で、同僚と寸劇を披露したり、手遊び歌や写真を用いたりしてマラウイを紹介した。また、ホールで開催しているマラウイ展について宣伝した。本校は、ティームティーチングで生徒の人数に対して約2～3分の1の人数の教師がサポートで授業に入るため、協力体制が良く共に取り組むことができた。生徒は教師が身に付けているアフリカの衣装に興味深そうに見ており、寸劇でのチェワ語のやりとりや手遊び歌を楽しんでいた。短時間ではあったが、生徒はよく注目して、気分が高揚していた。

マラウイ展での紹介

カリキュラム

■実践の目的

マラウイに関する写真や記事、置物、衣服などを掲示・展示し、見たり触ったりすることでアフリカ・マラウイについて興味を持つきっかけとする。

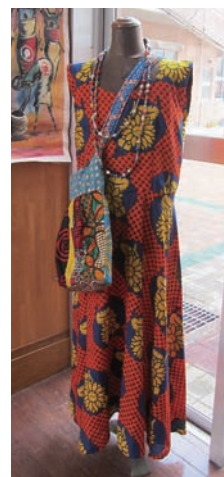
授業の詳細

- 展示場所は、最も人通りの多い玄関前のホールにした。その後、中学部ホール壁に掲示。
- 気に入った写真の横にシールを貼ったり感想を書き込めるようにしたりして、いつでも自由に鑑賞し、気持ちを共有できるようにした。



↑ 全体図

大人気の
マネキン →



布製品やお金 →



↑ 教科書（国語・農業・英語・数学）

マラウイのデータ
JICA 海外研修の募集要項や新聞記事など →





↑ チテンジ布、バッグ、絵画、
本、コースター、新聞など



↑ たくさん触って遊んだ「象」と「かば」



成果と課題

■ 成 果

- ・ 生徒、教職員、来校した保護者や地域の方々など、多くの方がマラウイの写真や展示物を見て下さり、質問したり感想を伝えてくれたりした。アフリカやマラウイに興味を持ってもらうきっかけになったと思う。
- ・ 授業後に、ある生徒がマラウイのことを家族に話し、一緒にインターネットで調べたとのことだった。その他、職員もマラウイについて調べたとのこと。いろいろな情報を共有できた。授業後さらに内容の深まりを感じた。
- ・ いろいろな場で私がマラウイの衣装を身に付けたことで、アフリカや諸外国の話について声を掛けられることが増えた。人との輪が広がった。
- ・ 言葉で気持ちを表現することが難しい生徒も、展示した木彫りの象やかばの置物の横を通るたびに触って楽しんだり、授業後、頭上に物をのせたまま下ろそうとしなかったりいろいろな形でマラウイの文化を体験し味わう場面が見られた。

■課 題

- ・ 授業時間の確保と内容の選定。生徒の実態に差があるため、授業内容に工夫が必要。話を長時間聞くのは難しいため、できるだけ体験活動を取り入れるようにすること。また、その際に飲食や運動を取り入れる場合は、個に応じた配慮事項を事前に担任と確認しておくこと。
- ・ 今回学校で紹介した内容は、アフリカ・マラウイの一部でしかない。主観的で偏ったイメージをもたせないように伝えること。また、研修で繋がった人の輪を大切に、今後も開発教育の一助となるべく学び続け、発信していく教師になることが課題である。

ララ☆マラウイプロジェクト

伊 東 望

ITO NOZOMI

宮崎学園高校（宮崎県）

担当教科：国語科

●実践教科：国語（保育）※・部活動

●時 間 数：①5時間 ②7時間 ③10時間

●対象人数：①2年生普通科 保育コース（26）
②2年生 特進科（22）
③部活動（42）

2018/08/02

2018/08/03

カリキュラム

■実践の目的

- ・ マラウイについて調べる
- ・ 自分たちにできることを考え、プレゼンを行う
- ・ グループ学習を行うことによって多様な意見を知り、自分の考えの幅を広げる
- ・ 論理的な思考を養うことにより、一つの事象を多角的に捉える力をつける

授業の詳細

① 【普通科／保育コース】

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1－2】「伝える」「つながる」 ・ 他者への伝達方法は？ ・ 想いを伝えるには？	コミュニケーション方法について考える 子どもたちと思いや時間を共有するために 効果的な方法について考える	
【2－4】実践（保育） 製作	4グループ（ペープサート）（四季紹介①） （四季紹介②）（モバイル）に分かれてそれ ぞれの作品を制作する	画用紙 模造紙
【5】「地球市民として」 ・ 映像や写真を通じてマラウイを知る ・ フォトランゲージによって多面的に物事を考える	いくつかの写真を見て考える。（フォトランゲージ）→自分の偏った考えに気づく 現地での様子の映像を見る 自分達にできることを考えていく	写真 映像

【1】「伝える」「つながる」

I 保育実習を振り返って、園児たちとのコミュニケーションについて考える。

- ・ 言葉が通じない → 易しい言葉に言い換える

- ・ 言いたいことが伝わらない → 口に出す前に自分の言いたいことをまとめる
- ・ 聞いてくれない → 興味がない。興味を持ってもらえるような工夫 ⇒ 相手の興味を知る
- ・ 言っている意味が分からない → 分かる努力、なぜパニック？ 子どもの一部以外を知る

外国の人も同じ？？？ 先生マラウイ行きます！

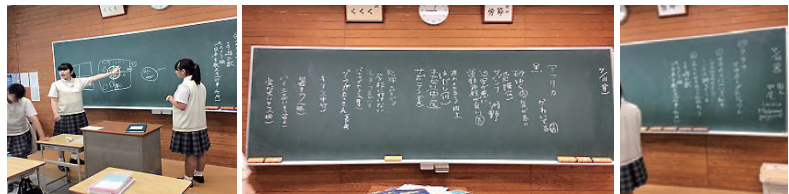
つながるためには？ → 相手を知る / 私たちのことを知ってもらう /
楽しいことを共有する

➡ ララ☆マラウイプロジェクト♪

☆ アフリカを知る、マラウイを知る

Ⅱ マラウイの子どもたちとつながりたい

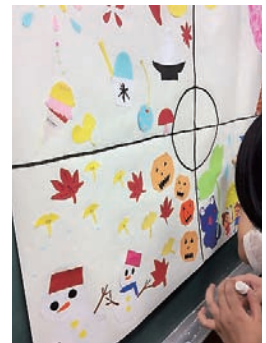
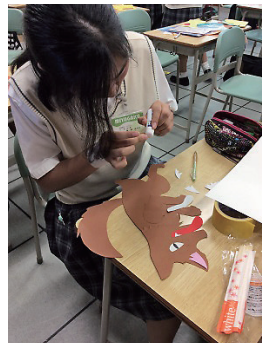
- ・ マラウイのことを知る
- ・ 国が違って子どもは同じ
- ・ 子どもの喜ぶ顔が見たい



☆ 4グループ（ペープサート）（四季紹介①）（四季紹介②）（モビール）に分かれてそれぞれの作品を制作することに

【2-4】製作

保育の先生のご協力



【5】「地球市民として」

- ・ フォトランゲージを用いて、偏見や先入観に気づく
- ・ 遠く離れたマラウイの地に自分たちの作品が届いたことを知る

◇感想◇

- ・ 地理や歴史の授業に意味があると初めて思えた。
- ・ フォトランゲージで自分が見えているものと人が見ているものと違いがあるのがおもしろかった
- ・ 知らない国の子どもたちが自分たちの作ったものを手にするのかと考えるだけでワクワクした
- ・ 将来保育士になったときにマラウイをはじめとする世界の子どもたちのことを伝えられる先生



になれたらいい

- ・ グループ活動の中でもめたりしたけど、考えてみたら世界も同じようなことかもしれない。

…続く

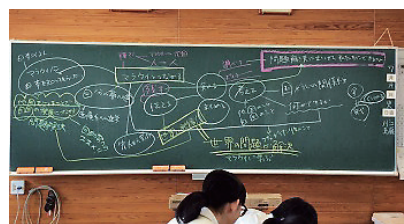
②【特進科】

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1】 ◇論理的思考 マラウイとつながる	・ブレインストーミング ・なぜ？ ・何のために？ ・着地点は？	
【2－3】 ◇論理的思考 マラウイを知る①	・地理 ・歴史 ・産業 ・保健衛生 } 4つのグループに分かれ研究・発表	データブック 地図帳
【4－5】 ◇論理的思考 貧困脱出作戦	マラウイの現状を知り、発展のための策を考える	データブック 地図帳 インターネット
【6】 ◇論理的思考 マラウイを知る②（伝える）	映像や写真を通じてマラウイを知る フォトランゲージによって多面的に物事を考える	写真 映像 マラウイの高校生からの手紙
【7】 私たちにできること		

【1】マラウイとつながる

先生マラウイ行きまーす

- ・ マラウイってどこ？
- ・ マラウイのこともっと知りたい → 何のために？
- ・ マラウイに高校生おると？ → 私たち地球上の人間やね
- ・ マラウイ生きて帰ってこれる？ → そもそも生きて帰れない国とかある？



ちょっと調べてみよう！ 私たちにできることあるんじゃない？！ 未来はつながってるんじゃない？

【2－3】マラウイを知る①

4グループに分かれてマラウイについて調べ、発表を行った。

地 理…人口、国旗の由来、面積、気候、マラウイ湖（生息する魚など）

歴 史…初代大統領、政治、たばこの生産スタート
 産 業…農業、工業、貿易、漁業、ブラックマーケット
 保健衛生…病院システム、流行している病気、保険制度



【4-5】 貧困脱出作戦

マラウイについて知ったことをふまえて、自分たちにできることをかんがえていく（プレゼン）

- ・ モノカルチャーからの脱出 → 作物を育てられる技術（ロボット利用）
- ・ 観光資源の育成 → 森林伐採を厳しく取り締まるレンジャー育成
- ・ 観光地 → マラウイ湖に水族館を
- ・ ブラックマーケットをなくせ

☆ そもそも貧しいことは悪いことなのか、脱出しないといけないことなのか??

【6】 マラウイを知る②

フォートランゲージを通して、自分たちの持つ偏見に気づく



◇感想◇

- ・ 普段自分がどれだけ偏った考え方を持っているか気づくいい機会になった
- ・ 普段の「論理的思考」を使ってフォートランゲージを進めていくのは想像以上にたのしかった
- ・ マラウイって都会！ 幸せそう！
- ・ 他の人の発見がおもしろかった
- ・ 写真を見て根拠を考えて言葉にしていく作業はおもしろい
- ・ 自分の気づかない点に気づいている人がいて、考え方の違いが勉強になった



【7】 私たちにできること

今後実施予定

◇感想◇

- ・ 発展途上国のために募金をするのは本当はどうなのかと思い始めた。
- ・ マラウイはリゾート地で楽しそうで、いつか行ってみたいと思った。
- ・ 最初ネットで調べたら「世界最貧国」というのが出てきて、マイナスイメージからスタートしたが、調べていくうちにどんどん身近に感じてきて、先生の写真とかを見たら、楽しそうだった。（建物や服装から発展の遅さを感じたが、それが何だ？と思った）先入観を持たずに自分の視野を広げていくことが大事。

- ・ 途上国支援は悪くないと思うが、発展のちぐはぐな状況を生み出したり、良くない貧富の差を生む原因にもなる。支援の仕方次第ではもらい続ける国、もらい続ける人が増えるのではないかな。便利なことは幸せなこと？ 途上国支援は先進国のエゴな気がしてきた。何か別の方法があるはず。モヤモヤする。
- ・ トイレ事情がとっても印象に残っている。人が生きていくためには必ずトイレを使うから。生きることは食べること。生きていくためにはトイレ大事！
- ・ マラウイの産業を調べて、問題解決のために何ができるのか、イメージを膨らませるのが楽しかった。これはイメージではなく、形にしていける気がする。みんなで考えるのに、これまでやってきた論理的思考がとっても役に立った。
- ・ 自分の世界の狭さに驚いた。
- ・ 太っている人はいない、普通に洋服を着ている、普通にサッカーを楽しむ子どもたちの笑顔、普通って何？
- ・ マラウイの高校生に書いたメッセージに返事が来たのが一番うれしかった。
- ・ 国語だけど国語じゃない、地理も歴史も生物も全部の教科が出てきて面白い授業だった。ワクワクした。

③ 部活動【インターアクト部】

【1】マラウイについて学習

【2－6】布絵本の作成

【7－10】季節の紹介

☆ 宮崎県高校総合文化祭 研究発表

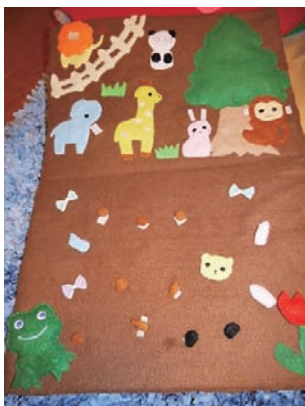
☆ 宮崎ロータリークラブ定例会発表

【1】マラウイについての学習を、特進科の生徒のプレゼンによって行った。

【2－6】普段から児童館にてボランティア活動を行っているため、同年齢の子どもたちを想定し、マラウイの子どもたちに布絵本を送りたいとのことで作成を行った。

作成した布絵本はゾンバにある病院の子どもたちに寄贈した。(玉枝さんを通して)

【7－10】クリスマスに向けてプレゼントを作成。隊員を通じて現地の子どもたちに届けた。



○ 最後に

今回、マラウイを扱うことになって一番心がけたことは、「最貧国」＝「不幸」の式ができないこと。その点においては、保育コースの生徒たちに助けられた。海外の子どもたちと繋がれるかもしれない、海外の子どもたちを喜ばすことが出来るかもしれない、そのワクワク感から名付けられた

『ラララ☆マラウイプロジェクト♪』この音の良さに、特進科の生徒たちも、部活動の生徒たちも惹きつけられ、マラウイをイメージするとき、ハミングするような楽しいイメージをいつしか抱くようになっていた。

特進科においては、昨年度より「論理的思考」を活かした授業の展開を行ってきた。昨年度はALTと共に論理的に考え、説明していく授業や、プレゼンを行った。今年度は、論理的に考えたことを文章にする作業、そして今回の物事を多方面から捉えていく授業の実践を行った。今回の授業の中で、これまでに継続して論理的思考力を養う内容となったことはよかった。

本校の場合、総合的学習の時間に礼法教育が入っているため、国際理解教育や開発教育を全職員で共有し、実施することは難しいのが現状であった。特定の教科の中で扱うことにも限界がある。しかし、この一年、その効果について十分議論し、結果、来年度より少しだけ時間を確保できるようになりそうである。また、再来年度を目途に、国際理解や開発教育について学ぶことのできるコースが普通科内に設置される運びとなりそうである。

今回の授業で、生徒はマラウイについて調べ、学んだことにより、自分が地球市民の一員であることを自覚し、世界に目を向けたり、海外を身近に感じたりすることができるようになった。この経験が、彼らにとって、いつかどこかで実を結ぶ日が来ることを願ってやまない。

今回このような経験を与えてくださったすべての方に感謝いたします。ありがとうございました。

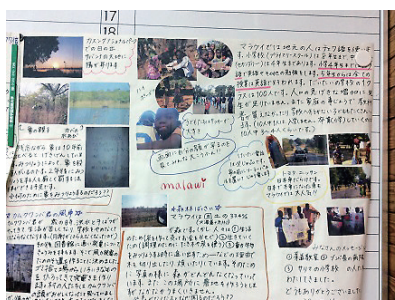
(番外)

①



宮崎大学附属小学校にて、100人村（「世界がもし104人（4年生人数）の村だったら」実施後、マラウイの子どもたちに向けて預かったメッセージ。①「僕たちは君たちのことを思っています」「ぜひ私たちのことも知ってください」「マラウイのみなさんの夢は何ですか。」「あなたの大切なものは何ですか」「世界はつながっているよ」②帰国後のマラウイの紹介。③秋の学習発表会にて「We are the world!」

②



③



マラウイを通じて中南アフリカの課題を考える。

裏 久 代

URA HISAYO

県立大分上野丘高等学校（大分県）

担当教科：地理歴史科（地理）

●実践教科：地理B

●時 間 数：地理B（導入10分×6回）
地理B（2時間）

●対象学年：高校2年生

●対象人数：地理B選択者38名

カリキュラム

■実践の目的

- マラウイの現状を通じて、中南アフリカや後発開発途上国の抱える課題を理解させる。
- 日本の国際支援の意義や目的、あり方を考えさせる。
- 開発途上国の抱える課題に関心を抱き、課題解決のために貢献できる人材を育成する。

高等学校地理学習指導要領の目標は、「国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。」という言葉で結ばれている。生徒の中にはグローバル企業や行政機関での政策・方針決定に携わる者もいるかもしれない。一国民として、また国際社会に生きる一員としてODAのあり方には関心をもってほしいとも考える。JICAの活動を通じて日本の国際支援のあり方や、途上国や国際協力の現状や課題について考察させることを目的に授業を構成した。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1～5時限：10分間×5回】 テーマ：世界へ関心をもつ。	・ 今回の研修に同行した大分合同新聞社の記事5連載分を活用。中南アフリカの抱える課題を読み取る。	・ 新聞記事（大分合同） 「アフリカに生きる～マラウイ同行記～」
【6時限】 テーマ：マラウイの自然環境 ねらい：マラウイを大観する。	・ 写真や動画を見ながら、既習の地形などの自然環境や生活の基本的知識を確認する。	・ 「マラウイの地理」より抜粋した図表 ・ 写真 動画
【7時限】 テーマ：国際支援を考える。 ねらい：①中南アフリカの課題を知る。②日本の支援の現状を知り、影響を考える。	・ 写真と動画から中南アフリカの課題を読み取る。 ・ 国際支援の影響を班で話し合う。 ・ 日本の支援のあり方について感想を記入する。	・ 写真 動画 ・ 授業プリント

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【8時限：授業開始時 10 分間】 テーマ：世界へ関心をもつ。	・ 新聞記事を活用し、貧困の捉え直しをする。	・ 新聞記事（大分合同）

授業の詳細

【1～5 時限 通常授業開始時 10 分間×5 回】 テーマ：世界へ関心をもつ。

マラウイ研修に同行した大分合同新聞記者の池田美香氏による「アフリカに生きる～マラウイ 同行記～」の5連載分の記事を活用。各自で記事を読みながら中南アフリカの抱える課題と特に印象に残った部分に線を引かせ、数名に発表させた。その日の授業内容に直接には関連しなくても時々新聞記事を扱っており、その一環として取り組んだ。マラウイの現状を通じて中南アフリカの課題を大観させ、6・7時限の授業へとつなげた。

【記事：「大分合同新聞・マラウイ」で検索 無料ネット新聞参照】

【6 時限】 テーマ：マラウイの自然環境

① 《導入》【動画】

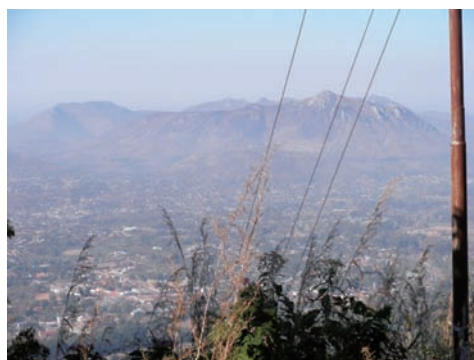
今回の研修中に 2016 年アメリカのグラミー賞にノミネートされた囚人バンドの練習現場に偶然にも立ち会うことができた。その時に撮影した音楽映像を紹介。リズム感あふれる音楽からアフリカの活力を感じさせ、アフリカに対するイメージに柔軟性を持たせるように努めた。

② 《展開》

- ・ 地図帳でマラウイの位置、既習のアフリカ大地溝帯の位置を確認。
- ・ マラウイで購入した書籍「マラウイの地理」から抜粋した図表から、地溝帯、標高などの地形や、低地と高原の気候を確認。
- ・ 写真（約 30 枚）や動画（3 本）を見ながら、大地溝帯、断層湖であるマラウイ湖、サバナの植生、内陸性気候、食文化、地理的不利国である点などを説明。生徒は要点をプリントにまとめる。【景観学習】
- ・ 後発開発途上国と JICA に関する基本的知識の確認。

③ 《まとめ》【動画】

- ・ 英語の授業で学んだウィリアム＝カムクワンバさんの TED でのプレゼン映像を紹介。

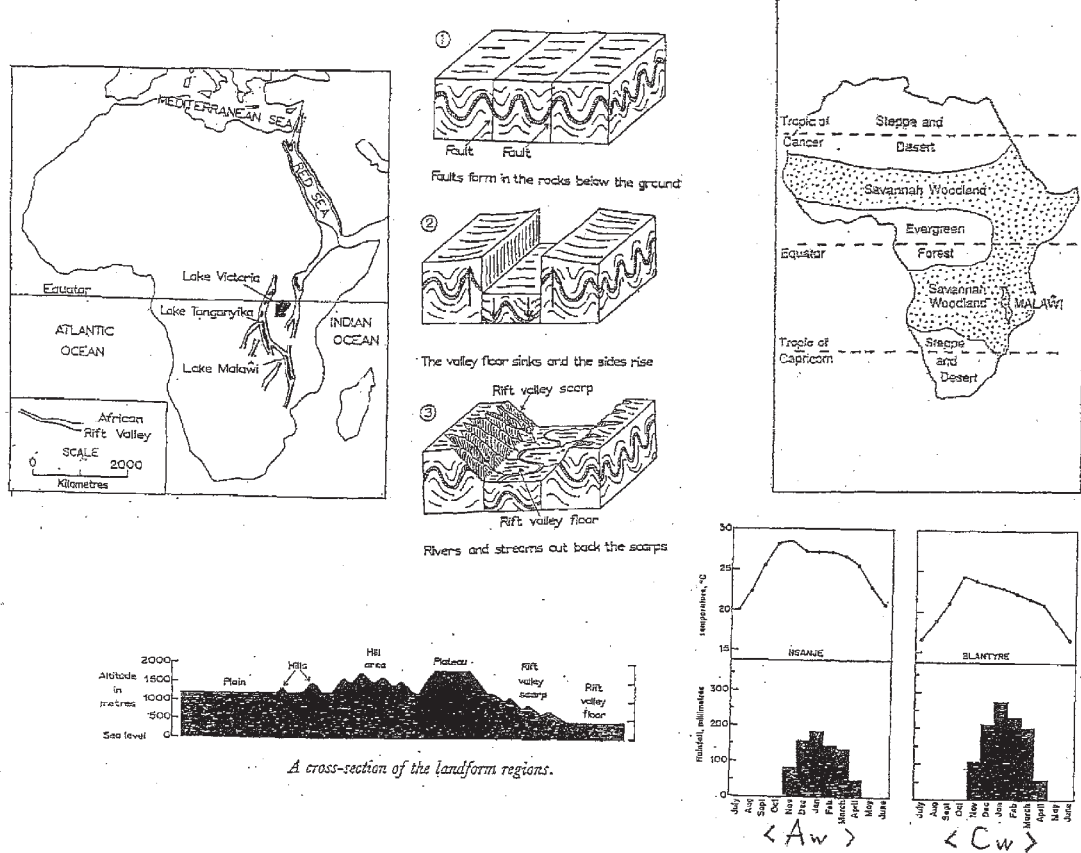


アフリカ大地溝帯



サバナの植生：バオバブ

【概要】



- ◎ プレーートの（ 広がる ）境界：（ アフリカ大地溝帯 ）に位置する。
 - ・ 国土の1/4を占める（ マラウイ ）湖 成因：（ 断層 ）湖・北部のタンガニーカ湖も同じ成因
 - ・ 国土の大部分が高原上（標高1000m前後）に位置する。
 - ・ （内陸国）→「海の『港』がない⇨他国との交易に制限」「EEZがない」⇒ 地理的不利国
- ◎ 低地：（ Aw ）気候 高原地帯（大部分）：（ Cw ）気候←気温の（ 遞減率 ）の影響

《私が滞在した8月の季節は（ 冬 ）なので（ 乾 ）季 ←南半球》

 - ・ 内陸性気候のため、気温の（ 日較差 ）・（ 年較差 ）ともに大きい。
 - ・ 旧（ イギリス ）領：宗教 キリスト教（75%） 公用語：現地語のチェワ語 と（ 英語 ）
 - ・ 主食：（ トウモロコシ ）「世界3大穀物」→「シマ」（ンシマ）に加工 （ キャッサバ ）：焼畑農業
- ◎ （ 後発開発途上国 ）（=LDC）（Least developed country）

発展途上国の中でも、特に経済水準が低く、教育や健康・栄養などの指標が低い国。世界の49ヶ国。

国際連合による社会的・経済的な分類の一つ。アジアでは、カンボジアやラオス、ネパールなど9カ国、アフリカではマラウイを含め中南アフリカの34カ国が該当する。

【7 時限】 テーマ：マラウイを通じて国際支援を考える。

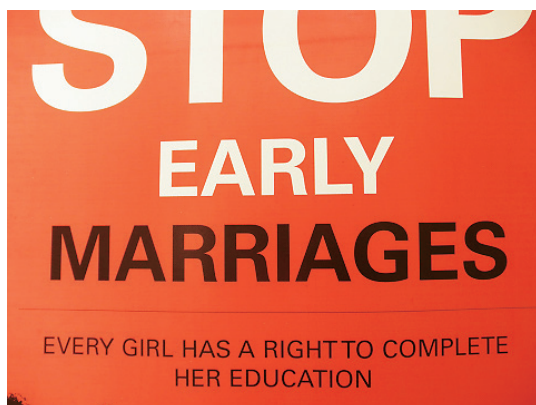
① 《導入》

- ・ アフリカの地域区分を確認する。

資源が豊富で経済的に豊かな「北アフリカ」と、後発開発途上国が集中する「中南アフリカ」に地域区分されることを地図上で確認。

② 《展開》

1. マラウイの課題≡中南アフリカの課題であると捉え、写真(約30枚)と動画(2本)と説明から、課題を箇条書きで書き出す。【景観学習】



「全ての少女には教育を修了させる権利がある」
問：この写真から何が読み取れるのか？



世界で活躍する大分県人（徳丸周志さん）

〈生徒の記述より〉

教育設備、教育制度などの教育環境が充分でない 特に女子の教育が不充分
児童婚 女児の妊娠 識字率が低い HIVやマラリアの感染症 食料不足
密猟による野生動物の減少 道路・電力インフラの未整備 森林伐採による温暖化の促進

2. 途上国を支援することによって、私たち（日本や世界）にどのような影響（恩恵やメリット）があるのだろうか。【班活動】

◎日本にとって

- ・ 企業進出の促進→市場の拡大（途上国における雇用の創出）
- ・ 資源や食料などの輸入先の安定確保。 ⇒日本の経済発展

◎世界にとって

- ・ 温暖化防止、生物多様性保全など世界の環境問題の改善。
- ・ 感染症（HIV/AIDS マラリア）の撲滅。
- ・ 貧困や格差の解消は、テロや犯罪の防止へつながる。 ⇒「人間の安全保障」への実現へ

3. 日本のODA 供与先（とうほう「地理資料集」より2012年）

供与先1位：ベトナム 3位：インドなど ←互いの経済発展のため！?
2位：アフガニスタン ←世界の秩序・テロ防止のため！?

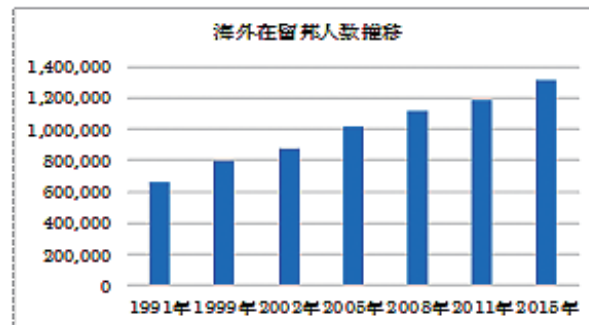
※国際支援にも様々なねらいがある。

③ 《まとめ》

海外に住む日本人の増加（外務省「海外在留邦人数調査統計」より）

「君たちも将来、海外で働くこともあるのでは？」

日本の大企業≡グローバル企業



グローバル化に合わせて、海外に暮らす日本人は増加している。長期滞在者と永住者を合わせた海外在留邦人は、1991（66万人）年から2011年（118万人）の20年で約2倍に、2015年には131万人と過去最高を更新。最近ではアジア地域の新興国や発展途上国の滞在者が増えており、民間企業関係者が増加しているのが特徴である。

④ 感想記入

〈日本の国際支援のあり方に関する生徒の意見・感想〉

- ・ 国際支援は、先進国の人道的な義務から行われているというものだった。そのメリットは途上国側だけにあると思っていたが、先進国側や世界にもメリットがあることを知ることができた。
- ・ これまでは貧しい人、かわいそうな人のために援助するイメージだった。テロや犯罪防止につながることも知り、あらためて教育支援の大切さを感じた。
- ・ 教育は途上国が抱える全ての問題に通ずるところがある。日本は教育支援を強化すべき。
- ・ 過剰な支援は自立を妨げる。本当に必要な生活や教育の基礎となる分野への支援を強化し、途上国の人たちが自分で考えていくことができるような環境づくりに配慮すべきだと思う。
- ・ マラウイの子どもたちの笑顔を見ると、先進国が市場経済の仕組みにマラウイを引き入れようとしている現状が本当に正しい道なのか少し疑問に思った。しかし、女性や子どもの人権問題の解決には、先進国の支援が必要であると思った。

【8時限 通常の授業開始時 10 分間】 テーマ：世界へ関心をもつ

大分合同新聞の記事（2016/10/28）を紹介。

『国連人口基金は今月発表した「世界人口白書 2016」で、発展途上国に約 5360 万人いる 10 歳の少女の教育や健康に投資することが、少女らの収入増につながり、投資しなかった場合との収入差が今後 15 年間に全体で 210 億ドルに上ると予測した。この試算は、貧困の連鎖は社会の損失だと提起する。（中略）少女が思春期から生産的で自立した大人になるまで、安全で健康な道をたどるのを邪魔するのは権利の侵害です。これは本人だけでなく、その地域や国にとっても大きな損失となります。（後略）』

貧困の連鎖は「人権侵害」であり「社会の損失」であるという点から捉え直しをした。

成果と課題

日本経済の停滞や社会保障などの財政問題を抱える日本の現状をふまえ、途上国支援の必要性を多面的に捉えさせることを目的とした。今年度から選挙権をもつ生徒もいる高校生段階では、中学生までに学ぶ途上国支援に対する認識から一歩踏み出す必要があると考える。日本の国際支援は人間の安全保障の実現と日本経済の繁栄を目指している《H27 開発協力大綱：国際貢献と国益の両観点から戦略的 ODA へ》ことに着目し、国際支援への関心を高められるように工夫した。生徒の感想を見る限りこちらの意図はある程度は伝わったと感じている。日本による国際支援の重要性を改めて認識することに加え、現状の支援のあり方に問題を提起するような意見も見られたことは大きな成果であった。文科省 SGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）指定校である本校では、グローバル企業や国際機関職員の講演を聴きながら「クリティカル・シンキング（批判的思考力）シート」を記入することで、与えられた情報を無批判に受け入れない態度の育成を目指している。「なぜそうなのか？」「本当にこれで良いのか？」。世界の諸課題に対しての正解は一つではない。多様な観点から問う姿勢は、多様な価値観をもつ人々で構成されるグローバル社会における合意形成のプロセスとして必要不可欠であるといえる。

今後の課題は、マラウイの学習を一つのきっかけとして、途上国の現状や世界に視野を広げるような授業を実践していくことにある。そして国際舞台で貢献できる人材や、「Think globally, act locally.」を実践できる人材の育成を支援していきたい。

たくましく生きぬく人々に学ぶ ～マラウイで出会った人々を通して～

緒 方 美 恵

OGATA MIE

菊陽町立菊陽西小学校（熊本県）

担当教科：全教科

●実践教科：外国語（1） 道徳（1） 社会（2）
学活（1） 総合（7）

●時 間 数： 12時間

●対象学年： 6年生

●対象人数： 学級 35名 学年 143名

カリキュラム

■実践の目的

- ・ 熊本地震をのりこえ、これから出会う困難な状況にも希望を持ちたくましく生きぬいていく子どもたちの生き方につなげたい。
- ・ 卒業を前に将来の自分の姿を考える子どもたち、国際協力場で活躍する人々の生き方に触れ、世界の中の日本人であるという視野で考えを深めさせたい。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1時限】 外国語（学級） 「Let's go to マラウイ」 ・ マラウイを知り、興味、関心を高める。	○ マラウイのことをクイズで紹介する。 （服装、生活の様子、食べ物 等） ○ マラウイの写真やマラウイでの体験談も混じえ、質問にも答えていく。	・ 世界地図 ・ マラウイ国旗 ・ チテンジ ・ マラウイの写真 ・ アフリカ音楽
【2時限】 道徳（学級） 「風をつかまえたウィリアム」 ・ 困難をのりこえ、夢や希望を持ち努力しようとする心情を高める。	○ 絵本「風をつかまえたウィリアム」読む。 ○ ウィリアム少年が困難をのりこえることができたのはなぜか意見交換する。 ○ 訪問したウィリアム君の家を紹介する。 ○ TED のスピーチで現在のウィリアム君の姿を紹介する。	・ 絵本 ・ 現在の家（写真） ・ 現在のウィリアム君（TED）
【3時限】 社会（学級） 「学校に行けない子どもたち」 ・ 世界には学校に行けない子どもたちがいる現状を知り、原因を考える。	○ マラウイの教育紹介（交流授業） ○ 学校に行けない子どもたちの現状・原因を知る。 ○ DVD「チョコレート農園で働くガーナの少年」	・ 交流授業写真 ・ JICA 資料 ・ DVD 「世界がもし 100 人の村だったら」

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【4時限】学活（学級） 「教育が受けられないことで起こる負の連鎖」 ・学校に行けないことで起こる問題を考え、教育の重要性を認識する。	○教育が受けられないことで起こる問題を考える ○教育が受けられないことで起こる“負の連鎖”を考える ○負の連鎖を断ち切るために必要なことを考える。	・JICA 資料：国際理解教育実践資料集
【5時限】社会（学級） 「国際協力で活躍する人々」 ・日本人がさまざまな形で国際協力に携わっていることを知り、世界の中の日本人である自覚を持つ。	○教育の負の連鎖を断ち切るため国際協力している人たちがいることを知る。 ○マラウイで出会った国際協力に携わる人々を紹介する。 ○理学療法士玉枝さんの現地での様子や思いを紹介する。	・社会科資料集 ・出会った人々の写真 ・インタビュービデオ ・マラウイからの手紙
【6時限】総合（学年） JICA 出前講座 「世界が100人の村だったら」 ・ワークショップの活動を通し、世界の現状について興味を持つ。	○マラウイ体験紹介 ○世界が100人の村だったらワークショップ ・世界のあいさつ ・文字が読めないということ ・富の分配	・ワークショップ版世界が100人の村だったら ・役割カード ・紙コップ・お茶 ・塩水・砂糖水・水 ・資料プレゼン
【7時限】総合（学年） JICA 出前講座 「青年海外協力隊体験談」 ・体験談を聞き、国際協力について理解を深める。	○JICA 紹介 ○青年海外協力隊体験談 JICA デスク熊本：阿南氏 ○質疑応答 ○「100人の村」の詩を読む	・体験談プレゼン ・100人の村の詩
【8～12時限】 総合（学年選択） 「世界の現状を伝えよう」 ・学んできたことから伝えたいことを考え、他学年や保護者、地域に発信していく。	○世界を伝えるグループ結成 ○学習発表会に向けて原稿作成 ○発表練習・発表内容練り上げ ○学習発表会での発表	・プレゼン ・チテング ・紙コップ ・お茶

授業の詳細

1 時限 外国語活動「Let's go to マラウイ」

○ 授業の流れ

外国語活動でおすすめの国を紹介する単元を活用し、マラウイの紹介を行った。マラウイを知り、興味、関心を高めてもらうため、まずは、クイズ形式で、服装、生活の様子、食べ物等を現

地の写真で紹介していった。

生活の様子がより具体的にイメージできるように、マラウイでの体験をいかしホテルで水が出なくなったことや停電したときの様子も伝えていった。興味を持った児童は知りたいことがたくさんあったので質問タイムを設け、質問に答えていった。チテンジやアフリカの音楽も紹介し、異文化を味わい楽しんでいた。



↑ 写真や新聞記事を活用し紹介



↑ アフリカンミュージック



↑ チテンジ着用に挑戦

○ 児童の反応・感想

実際に経験したマラウイでの生活の様子を話したり、現地での写真を活用したりすることで子どもたちは興味深く授業を受けていった。また、チテンジやアフリカの音楽を体感することで異文化への関心も高まっていった。授業が終わってからも興味深く様々な質問をしてきた。

- ・ 私たちの日本とちがって「マラウイ」はどんな時でも電気や水が使えなくて、水は井戸水から取り入れていると知りました。でも、日の出日の入りがとてもきれいで私たちからはなかなか見られない光景が「マラウイ」では何度も見られてとてもいい所だと思いました。「マラウイ」のように世界には私たちには知らない国がいっぱいあると分かりました。また、どんなに貧しい国だとしても、どの国にもとても良い景色や歌がありすてきな国があるとも分かりました。外国語の授業で、まだまだ知らない世界をいっぱい知る機会があるかもしれないと思うので、その時はその国の特ちょうなども知り、いろんな世界や国について調べていきたいです。

2 時限 道徳「風をつかまえたウィリアム」

○ 授業の流れ

絵本「風をつかまえたウィリアム」の読み聞かせを行い、マラウイの生活を振り返りながら、ウィリアム君の生き方について考えていった。主発問では、ウィリアム少年が困難をのりこえることができたのはなぜかを考え意見交換していった。

現地で訪問したウィリアム君の家の写真や家族との写真を紹介し、絵本がより身近に感じられるようにした。現在のウィリアム君の様子も伝えたかったので、TED でスピーチするウィリアム君を紹介した。アメリカの大学でエンジニアになる勉強をし、その後はマラウイで村のために発電やかんがい装置を作ろうと考えていることを伝えることができた。



↑ 朝の読み聞かせでも活用されていた絵本だった

↑ 現地で訪れたウィリアム君の風車と家族

○ 児童の反応・感想

絵本「風をつかまえたウィリアム」は、低学年の頃の読み聞かせで読んだことがある児童が多かったが、マラウイの話であるということで興味深く聞きいていた。ウィリアム君の家の写真や現在の様子を見られたことで、絵本が実在する人物であったことをより実感していた。ウィリアム君の生き方から困難をのりこえ努力した姿を自分自身につなげようと考えることができた。また、勉強をすることで村を変えようと夢を叶えていく姿を見て、教育の重要性についても再確認していた。

- ・ ウィリアム君の生き方から勉強は本当に大切なんだなあと思いました。風車を作ろうとガラクタを集めていた時、周りの人にばかにされても風車作りを続けようとしていたのは、図書館でしっかり勉強して「絶対に作れる！」という強い自信があったからだと思います。私も今勉強できる時間を大切にしてどんな苦しいこともプラスに考えられる広い心を持っていきたいと思います。
- ・ ウィリアム君の生き方から、困難をチャンスに変え、チャレンジしてみんなのために行動するということを学びました。自分だけのためではなくみんなのために行動してすてきだと思いました。私も少しずつでも人のために行動していきたいと思います。
- ・ どんなに絶望的な状況でもかならず一筋の光を信じてあきらめずに進んでいくことで、今までできないと思っていたことが現実になることが分かりました。

3 時限 社会「学校に行けない子どもたち」

○ 授業の流れ

前時で学んだ教育の大切さからつなぎ、マラウイの教育の現状について伝えていった。マラウイでは、中等学校への進学者は3割しかいないということ、学校施設や教科書、教員が足りないということ等、を伝えていった。ナマロンバ中等学校での交流授業の様子も伝えていった。生徒たちは医師や看護師の夢を持ち学習に取り組んでいることを伝えた。

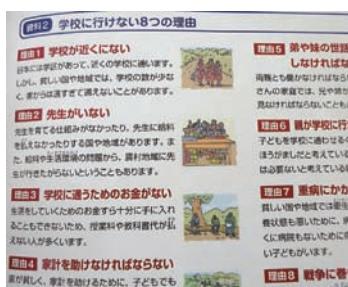
その後、JICAの国際理解教育実践資料集を活用し、学校に行けない子どもたちの現状や原因について学習していった。世界中で6700万人の子どもが小学校に行けない現状、学校に行けない理由を考えていった。

最後に、2006年にテレビで放送された「世界がもし100人の村だったら」から、ガーナのカカオ農園で働く少年の様子を視聴した。母親が病気のため働かなければならない11歳と6歳の少年の話で、学校に行くことに夢を持っている少年たちが一生働き続けなければならない世界の

現状だった。



↑ 交流授業の様子



↑ JICA の資料を活用



↑ DVD「世界がもし100人の村」

○ 児童の反応・感想

世界には学校に行くことができない子どもたちがいるということを知り、その数の多さに驚いた様子だった。なぜ、学校に行けないのかを考え、実際に、ガーナの少年が働いている様子をDVDで視聴し、学校に行くのが夢である兄弟の姿に心うたれていた。11歳の兄が弟だけでも学校に行かせたいと伝える場面が心に残り、自に何かできることがないかと考え始める児童もでてきた。

- ・ 家族のために働かなければならなくて学校に行けない子どもがいることを初めて知りました。DVDのお兄ちゃんが「弟だけでも学校に行かせてあげたい。」と言っていたのが心に残りました。他の国では、学校に行きたくても行けない人が何万にもいるというのに、日本では学校に行きたくないと思っている人がいることを考えると悲しくなります。
- ・ ガーナに住んでいる兄弟はとても学校に行きたがっていました。でも、1日中カカオ農園で働いていました。カカオ豆をとっているけどチョコレートを知らなかったのでびっくりしました。いろんな国について知らなければならぬと思いました。いろんな国について調べて、困っている人の役に立てる人になりたいです。どの国も、みんなが楽しく自由にくらすような世の中になればいいと思いました。

4 時限 総合「教育が受けられないことで起こる負の連鎖」

○ 授業の流れ

教育が受けられないことで起こる問題を JICA の国際理解教育実践資料集を活用し考えていった。問題をつないでいくと、教育が受けられないことで起こる“負の連鎖”が続くことをそれぞれが確認していった。その後、負の連鎖を断ち切るために必要なことを考えた。国際協力で活躍している人たちがいることを紹介し、次時に国際協力について学習すると伝えた。

学習の最後には、教育の大切さを訴えるマララを絵本で紹介し、教育の重要性を再確認した。



↑ 教育を受けられないことによって起こる負の連鎖について考える



教育の大切さを訴えるマララの紹介 ↑

○ 児童の反応・感想

教育を受けられないことによって負の連鎖が続いていくことを自分自身で確認し、この連鎖を止めるためにどうしたらいいのか考えていた。また、マララさんの訴えから教育の大切さも再確認していた。

- ・ 学校に行けないと、就職できず、命にも関わってくるのが分かりました。今までは、学校に行くこと、勉強することを面どうだなと思ったりしていたけれど、世の中には、勉強したくてもできない人が6700万人もいるのが分かりました。だから、こうして教育を受けたり、みんなと笑いあったりすることがどれほど幸せなことか身にしました。将来、世界にいる苦しい思いをしている子どもたちを救う仕事をしたいと思いました。
- ・ マララさんと同じで女の人も勉強していいと思うし、一人一人が夢があり、その夢をお金がないことであきらめることがないような世界にしたいです。まだ、開発途上国もたくさんあり、開発途上国でも暗く悲しい生活をするのではなく、笑顔で生活できるように私自身も何かできる人になりたいです。

5 時限 社会「国際協力で活躍する人々」

○ 授業の流れ

社会科資料集「世界で活躍する人々」を活用し、国際協力について学んだ。国際協力が、教育の負の連鎖を断ちきることに繋がっていることを伝えていった。

その後、マラウイで出会った国際協力に携わる人々を紹介した。マラウイの理数教育を推進する徳丸さん、教員養成学校を建設する大貫さん、理学療法士としてゾンバ病院で勤務する玉枝さんを紹介した。

さらに、玉枝さんのインタビュービデオを通し、国際協力に携わるきっかけや、仕事に対する思い等も伝えられた。玉枝さんの友達である囚人バンドとの出会いやゾンバ病院から届いたお礼の手紙を紹介し、人としての素晴らしさも紹介することができた。



↑ ゾンバ病院の様子とその後に届いたお礼の手紙

玉枝さんの友達である囚人バンド ↑

○ 児童の反応・感想

マラウイで出会った国際協力に携わる方々の仕事内容だけでなく、その人々の生き方や人柄まで紹介することができた。世界を旅して周った大貫さん、情勢の困難な地域での仕事を誇りにしていた徳丸さんといろんな生き方に触れることができた。また、玉枝さんのインタビューでは、いきいきと活動されている様子や現地の方に信頼されている様子も伝わった。お礼の手紙を送られる心遣いや、刑務所の中の人とも友達になれる心の寛さと、玉枝さんの人柄まで感じる事ができていた。

- ・ 今日の学習で玉枝さんのことが一番心に残りました。「苦しいこときついことがあっても、子供たちの笑顔があればがんばれる。」とおっしゃっていました。とてもキラキラしてかがやいていました。また、玉枝さんの友達がしゅう人バンドの人で、とても楽しそうに演奏していました。次に進もうとしている姿があってキラキラしている気がしました。そして、人とかべをつくらずに接している姿がとてもすてきだと思って、自分もそんな人になりたいと強く思いました。
- ・ 写真やビデオを見ていると笑顔の人もいてみんないきいきしていました。他の国だからとほっとくのではなく、助けようとする心がみんなの命、気持ちを救っているんだと思います。
- ・ 玉枝さんはだれにでもやさしく接し、堂々と生きていたので、ぼくも堂々と生きれる人になりたいと思います。日本という国だけでなく、世界という大きなぶ台で活やくできる人になりたいです。
- ・ 世界という大きなところで、だれかのために働く人たちがいるということを知りませんでした。とてもすごいと思うしあこがれです。日本という小さな視野ではなく世界という大きな視野で見ることで、思うこともちがって見えると思います。

6 時限 総合「JICA 出前講座：世界が 100 人の村だったら」

○ 授業の流れ

JICA 熊本デスクの阿南さんの講話を前に、「世界が 100 人の村だったら」のワークショップを実践した。143 名が 1 時間で行うプログラムで、世界のあいさつ、文字が読めないということ、富の分配をテーマとして行った。開発教育協会が発行するワークショップ版を活用したり、事前に阿南さんと打ち合わせを行ったりしながら準備を進めた。

役割カードを配布し、世界のあいさつからスタートした。阿南さんのアドバイスで「児童の考えをより多く引きだせるように。」とあったので、たくさんの児童から話を聞きだしていった。文字が読めないということのワークショップでは、紙コップに塩水、砂糖水、水を用意し、薬を買いに行くという設定で文字が読めないということを体感させた。富の分配では、ペットボトルのお茶を一人一人の紙コップに分配していった。途中の補足説明は、阿南さんが用意してくださった。プレゼンを活用した。



↑「世界が 100 人の村だったら」のワークショップを、学年 143 名で実施。

○ 児童の反応・感想

ワークショップ形式で体感しながら世界の現状を知っていった。説明の補足は、プレゼンで示しながらひとつひとつの活動の後に整理していくことができた。児童の思いを引きだしながら、考えを深めていくことができた。富の分配では麦茶の量を体感し、世界の不平等さに驚いていた。

- ・ たった143人だけなのに、たくさんの言語があって、たくさんの人種がありました。印象的だったのは大きな富の差があったことです。今の日本の状況を考えると、世界の国々よりも富が多いはずなのに、まだ足りないもっと欲しいとけんかをしている気がします。先進国の日本がこんなに欲張りだと開発途上国の人々を救うことはできないと思います。それどころか、気づかないうちに富をうばってしまうのではないかと思います。
- ・ 麦茶の量が、今の世界の様子でその差にがくぜんとしました。この世界は平等じゃありません。100人の村がみんな平等だと言えるようになって、みんなが幸せを感じられるようになる日がいつかくるように、日々できることをしたいです。

7 時限 総合「JICA 出前講座：青年海外協力隊体験談」

○ 授業の流れ

青年海外協力隊の体験談を JICA 熊本デスクの阿南さんに行って頂いた。最初に、JICA の紹介があり国際協力についての説明があった。その後、ニジェールでの体験談を話して頂いた。内容は、ニジェールの紹介、活動を通じて得た体験であった。感染症対策に取り組まれていた阿南さんは、きれいな水を飲めないことで感染症にかかる人たちへの対処や予防の取り組み伝えられた。最後に、マラリアで亡くなる子どもの話をされ、命について考える機会ともなった。

その後、各教室で「100 人の村の詩」を読んで、学習に対する感想を綴った。



↑ ニジェールでの体験談から、子どもの意見を引きだしながら話を進められた

○ 児童の反応・感想

国際協力に携わっていた方との出会いを見学児童は心待ちにしていた。ニジェールでの活動の様子を見ながら、環境の違いや考え方の違いに児童は驚いていた。国際協力に関わる仕事に興味を持つ児童が増え、自分も国際協力に関わりたいという感想が増えた。

- ・ 授業で教科書にのっていたので少しは勉強していたけど、本当に現地に行った人から、本当の話をたくさん聞いて、授業で勉強していたよりもたくさんのことが知れたので良かったです。
- ・ ニジェールでは、子どもが一人死ぬことなど当たり前だと話されておどろきました。学習をしてきて、当たり前の生活がどれだけ幸せで、どれだけ命が大切なのかを改めて実感することができました。
- ・ 私は、前にマザーテレサの本を読んだことがあります。阿南さんの話を聞きながらマザーテレサの行動と似ているなと思いました。マザーテレサはその仕事にたくさんの生きがいを感じていました。私の将来の夢は人の役に立つような仕事をする事です。その時、世

界に困っている人がいるなら阿南さんみたいな JICA のようなところで働きたいです。そして、いつか世界中があたりまえの生活をおくれるような世の中になったらいいです。

8～12 時限 総合「世界の現状を伝えよう」

○ 授業の流れ

総合学習の発表の場として学習発表会があり、学んできたことから伝えたいことを考え、他学年や保護者、地域に発信していく場となっている。発表していききたいものに阿南さんとの出会いを選択した児童が世界のことを伝えるグループとなり発表原稿を考えていった。何をどんな方法で伝えていくのか考え、意見を交流しながら原稿を完成させていった。4 クラスから集まったメンバーで発表練習を行い、何度も修正しながら発表につなげていった。

児童が考えた発表構成は、阿南さんのニジェールでの体験談と 100 人の村のワークショップで行った富の分配と文字が読めないということを伝えるものだった。世界の現状から、平和をつなぐ活動として取り組まれている国際協力の方との出会いを発信することができた。



↑ 体験談から幼い子の死を伝える



↑ 文字が読めないことで起こること



↑ 発表後、阿南さんから言葉を頂く

○ 児童の反応・感想

学習発表会で何を発表したいのか出しあったところ、世界のことを伝えたいと思う児童が多かった。何をどんな形式で伝えるのか、子どもたちでアイデアを出しながら創りあげ達成感ある発表になっていった。発表会当日に阿南さんに来て頂き、子どもたちはうれしい表情だった。自分たちの伝えなかったものを見て感想を頂き、取り組んできて良かったと満足する姿があった。

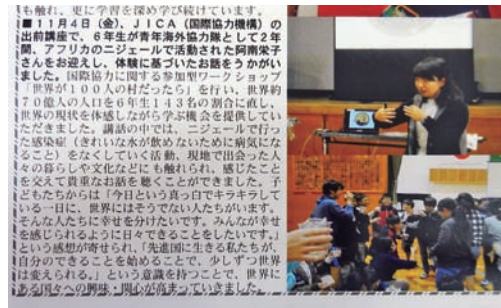
- ・ 世界チームで原こうをかえたり、つけ加えたり、低学年にも分かりやすいように劇を入れたり、時間内におさまるようにまとめました。いろいろ練習をして、服をそろえたり道具をそろえたりしました。たくさん練習して、みんなで協力してできたので良かったです。きんちょうしたけど、しっかりと伝えられて良かったです。
- ・ 学習発表会本番の時、阿南さんが来てくださいました。私は、阿南さんになりきらないとダメだと思いました。そんな中でも私は全校のみんなや地域の方々に、今、自分たちのように大きく成長できない子どもが世界にいるということを発信できたと思います。その後、阿南さんにお話を聞き、「嬉しかった。感動した。」とおっしゃられました。自分たちの気持ちが伝わったと思うので、すごくうれしかったし、発表して良かったです。これで終わりにするのではなく、次へ次へと前に進めるようにしたいです。

掲示コーナー



教室前廊下に、マラウイコーナーを作った。他クラスの児童も、興味を持ち閲覧していた。

通信で発信



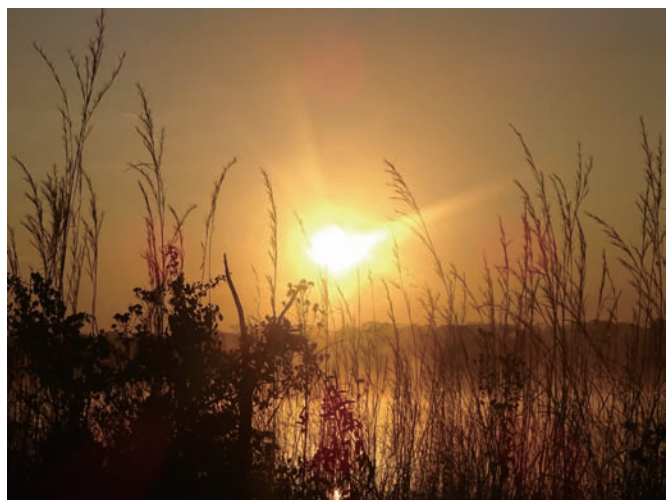
学校だより、学年だより、学級だよりと様々な通信で学びを発信していった。学校だよりは、地域にも発信できる機会となった。

成果と課題

卒業を前に6年生は、自分の将来の姿について考えていきます。その時に、世界も視野に入れ、幅広い視野で物事を考えることができればと思っていました。子どもたちの生き方につながる実践をしたいと思い取り組んできました。

教師が体験した貴重な学びは、児童も自分の生き方としてつなげることができたと思います。当初は、「日本の生活が素晴らしいことが分かりました。」「日本に住んでいてよかったです。」といった感想で終わっていた児童も、学習を積み重ねていくと何か行動できる人になりたいと、変容していった姿が見られるようになりました。

「私は将来の夢などなかったけど、授業で習ったりお話を聞いて、世界のために働く仕事もすてきなあとと思うようになりました。」夢がなかった子どもが夢を持ち、「この学習は世界のことが良く分かるからおもしろくて楽しみです。ぼくは、いつかこの世界中から貧しい国をなくしていきたいです。」学習することに喜びを持ち、「今日からは自分だけが豊かではなく周りの人々も豊かになり、それがつながることでこの地球に住む人々は本当の平和や幸せを手にすることができるのではないかと思います。知らないところでできつい思いをしたりしている人がたくさんいるので、そういうところも見つけてボランティアなどできるといいなと思いました。」世界を視野に入れた考え方が持てるようになり、「開発途上国の人々の方がみんなで協力できているのではないかと思います。逆に豊かな国ほど自分さえ良ければという考えが多いと感じました。」開発途上国から学びを生かさなければと考え



大きな太陽が力強く昇る様子を見ながら、「希望」が「生きる力」になっているのを感じました。

られるようになりました。

私自身、熊本地震後、命や日常が奪われることに暗い気持ちになっていましたが、マラウイでたくましく生き抜く人々の授業を実践しながら、希望がそこにあることを感じ、前向きな思いに変わっていきました。自分自身が授業を創りだす楽しさを改めて感じ、児童の変容する教育の素晴らしさも再確認することができました。

課題は、今後の継続です。6年生担任だから実践できたことも多くあります。他学年でも、内容を工夫しながら国際教育の推進に努めていきたいと思います。自分自身が世界の現状にアンテナをはり、今後は、自分にできる国際協力を実践していきたいと思います。

わたしたちとアフリカ ～マラウイから世界へ～

蔵 園 清 邦
KURAZONO KIYOKUNI

霧島市立横川中学校（鹿児島県）

担当教科：英語科

- 実践教科：英語 道徳 学活
- 対象学年：2年生 3年生
- 対象人数：2年生（22名） 3年生（19名）

2018/08/02

2018/08/03

カリキュラム

■実践の目的

- 日本とアフリカの関係について知り、世界の諸問題に関心を持つ。
- 日本とマラウイの文化の違いを知り、異文化を尊重する意識を育てる。

■授業の構成

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1時限】 テーマ：アフリカのイメージ ねらい：アフリカの写真から自分たちのアフリカへのイメージに気付く。	・マラウイで撮影された写真を見て気づいたことを画用紙に書き込む。 ・日本と同じことと違うことをそれぞれのグループに発表してもらう。	マラウイで撮影した写真
【2時限】 テーマ：マラウイクイズ ねらい：マラウイに関する基本情報を知る。	・パワーポイントを使用し、マラウイに関するクイズにグループで答える。	パワーポイント
【3時限】 テーマ：私たちとアフリカ ねらい：自分たちの生活とアフリカの関係を知る。	・自分たちが知っているアフリカの国を地図に書き込む。 ・アフリカと関係のある日本で使われている18品目について考える。 ・18品目がアフリカのどの国とつながりがあるか考える。	JICA 国際理解教育実践資料集
【4時限】 テーマ：教育が受けられない負の連鎖 ねらい：教育が受けられないことで起こる負の連鎖について知る。	・ウィリアム・カムクワンバ君を紹介する。 ・学校へ行けないことで起こる負の連鎖についてみんなで考える。 ・負の連鎖を断ち切るために何ができるかを考える。 ・TEDtalkを見る。	JICA 国際理解教育実践資料集

時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
【1 時限】 テーマ：Malawi Quiz! ねらい：マラウイに関する基本情報を知る。	・ パワーポイントを使用し、マラウイに関するクイズにグループで答える。	パワーポイント
【2 時限】 テーマ：Learning about Malawi through textbooks ねらい：マラウイで使われている教科書からマラウイが抱える問題や、日本との文化の違いについて知る。	・ マラウイ国定教科書に載っている「ウサギとカメ」などを読み日本との違いを知る。	マラウイ英語教科書 1～4 年生

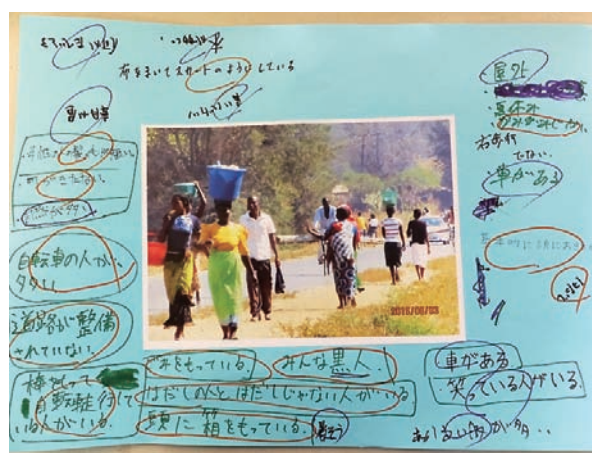
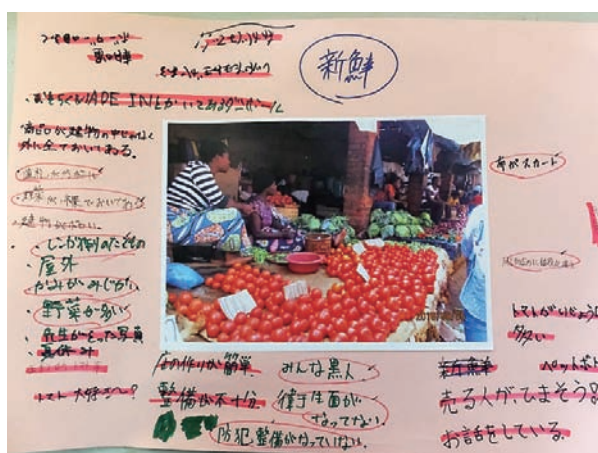
授業の詳細（2 年生）

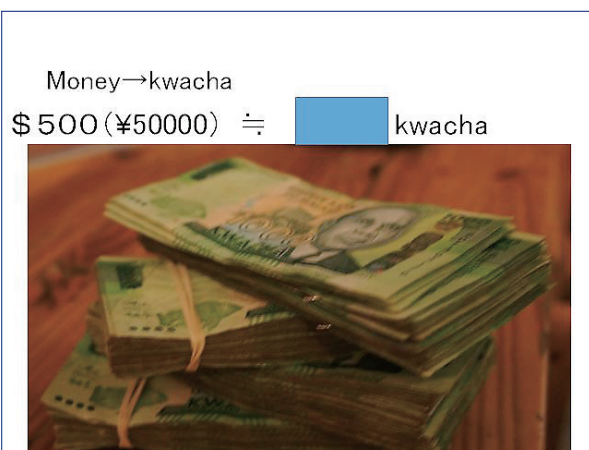
【1 時限目】

2 年生には、まずフォトランゲージの授業を行った。フォトランゲージは写真を使用した授業である。開発教育協会ホームページによると、「フォトランゲージ」の効果は 4 点ある。

1. 共感的な理解や想像力を高める
2. ものごとの多様な捉え方に気づく
3. 無意識のうちに持っている偏見や固定観念に気づく
4. メディアに対して批判的な見方ができるようになる

ただ教師の言う情報を聞くのではなく、自分たちで様々なことに気付いてほしいと考え、フォトランゲージで授業を行った。授業では 10 枚の写真を用意し、それを 1 枚ずつ画用紙に張り付けたものを用意した。生徒は 2 人 1 組のペアになってもらい、写真を見て気づいたことを自由に画用紙に書く。ある程度のことを書いたら次のペアに渡す。新しく来た画用紙を見て、前のペアが書いてないことを新たに加える。そしてまた次のペアに渡す。自分たちのもとに戻ってくるときには、自分たちが気づかなかった視点を得られることになる。その後に、日本と同じだと思うも





*生徒たちに見せたパワーポイントの1部

生徒の感想

○かわいそうだったし生活用品などがあまりなくて不清潔。○ちょっとでも助けて発展途上国の国を助けてあげたい。○日本は豊かだな。支援しないと。○日本以外の国では設備が整っているところや、自分たちとはちがう生活をしている人のことを改めて知ることができた。○先生からアフリカの話の聞いたり写真を見たりして改めて日本はいい国だなと思った。○日本以外に知っている国だとしても知らないことを知ったりすることができるので意識を高めることができる。○「マラウイ」に比べて日本が進んでいるなと思いました。自分たちはすごくぜいたくだと思います。

【3 時限目】

3 時限目にはマラウイからアフリカ全体へ視点を広げてもらいたいと思い、JICA 国際理解教育実践資料集をもとに授業を行った。生徒にはまず自分たちの知っているアフリカの国名、国の位置を地図上に書いてもらった。ほとんどの生徒はアフリカについては詳しく知らないようであった。その後、JICA 国際理解教育実践資料集 11p に掲載されている 18 品目に関して、下図のような形式で、日本とつながりがあるか、どのような点で関係があるかを考えさせ、グループで話し合いをしてもらった。

品目	○/×	なぜ・どのような点で				班
た こ 焼 き						
携 帯 電 話						
蚊 取 り 線 香						
チ ョ コ レ ー ト						

ほとんどの生徒はチョコレートやコーヒーがつながりがあることは知っていたが、それ以外についてはつながりがないと思っている生徒がほとんどであった。中にはゲーム機や携帯電話に使われているレアメタルがアフリカとつながりがあることを知っている生徒もいた。18 品目すべて

がつながりがあることを伝えると非常に驚いている様子であった。

次に JICA 教育実践資料集 12p を配布し国名をチェックさせ、その後国名入りの地図上にすべての国を蛍光ペンでマークさせた。最終的にはアフリカの半数以上の国と 18 品目を通してつながりがあることが分かり、生徒は驚いていた。

たこ焼き 日本で消費されるタコの約 60% が北部アフリカに位置するモリタニアやモロッコから輸入されています。	携帯電話 携帯電話などの精密機器にはレアメタルがたくさん用いられています。レアメタルの一つパルトはコンゴ民主共和国やザンビアなどで採掘されています。	蚊取り線香 蚊取り線香に使われている除虫菊はケニアやタンザニアなどの東アフリカから輸入されています。	チョコレート(カカオ) チョコレートの原料であるカカオの約 76% は西アフリカに位置するガーナから輸入されており、他にもコートジボワール、ナイジェリアなどから輸入されています。
ゴマ ゴマはアフリカ原産とされており、多くがナイジェリアやブルキナファソ、タンザニアなどのアフリカの国々から日本に輸入されています。	電気 日本は天然ガスをナイジェリアやエジプトから輸入しており、それは火力発電の燃料として使われています。	イセエビ 南アフリカ共和国（輸入額の 10.4%）やナミビア（輸入額の 9.6%）からイセエビを輸入しています。	ダイヤモンド アフリカの南部はダイヤモンドの一大産出地であり、ボツワナ、コンゴ民主共和国、南アフリカ共和国などが有名です。
スシ(マグロ) 青魚や利身で使われているクロマグロは、北アフリカ（モロッコ）やアルジェリア、チュニジア）から輸入されています。	バラの花 日本はケニアやエチオピアからバラを輸入しています。ケニア産のバラが輸入バラの約 20% を占めています。	ガソリン 日本は中東だけでなく、スーダンやチャドなどアフリカからも石油を輸入しています。	バナナアイス バナナの原料となるバナナビーンズの 90% 以上がマダガスカルから輸入されています。他にウガンダやセーシェルなどからも輸入されています。
桃のジャム 南アフリカ共和国から桃（輸入額の 19.5%）やあんず（輸入額の 10.7%）などの果実加工品を輸入しています。他にエジプトなどからもジャムを輸入している。	化粧品 化粧品には花の香を出すためにアラビアゴムが使われています。アラビアゴムの産地は、スーダン、チャド、マリ、セネガルなどが挙げられます。	うなぎ 近年、日本近海ではウナギの稚魚の不漁が続いており、2012 年にマダガスカルからアフリカ産ウナギの稚魚の輸入が開始されています。	ゲーム機 ゲーム機などにはタンタルというレアメタルが使われています。アフリカではエチオピア、ルワンダ、モザンビーク、コンゴ民主共和国などがタンタルの産出地です。
プラチナの指輪 貴金属などによく使われているプラチナの約 76% を南アフリカから輸入しています。他に産出国としてジンバブエなどが挙げられます。	コーヒー アフリカのコーヒー生産国としては、タンザニアやエチオピア、ケニアが知られており、日本ではモカやキリマンジャロといった名前で見られています。		



JICA 教育実践資料集 p12

授業の最後には実践資料集 p10 に掲載されているコラムを配布し読んでもらった。自分たちの生活が便利になることで、世界のどこかで苦しむ人たちがいることに生徒も驚き、心を痛めていた。

コラム レアメタルが軍事資金に

携帯電話やパソコン、ゲーム機などの電子機器は私たちに便利で快適な生活をもたらしてくれます。携帯電話やパソコン、ゲーム機にはレアメタル（希少金属）と呼ばれる金属が使われており、そのレアメタルを巡って世界規模でどういった問題が生まれているのか、皆さんは知っていますか？

レアメタルを巡って紛争が起こっている地域があります。コンゴ民主共和国（旧ザイール共和国）では、レアメタルの一つ、タンタルが採掘されています。その埋蔵量は豊富で、世界一とも言われています。そのレアメタルを巡って、国や軍、武装勢力などによって紛争が起きています。そして、現在でもコンゴや隣国の国々では多くの武装勢力による活動が続けられています。その多くは、コンゴでのレアメタルの

違法な採掘活動から活動資金を得ています。携帯電話やパソコンなどの、レアメタルを使う電子機器への世界的な需要の高まりに伴い、レアメタルを巡る戦いは後を絶ちません。レアメタルの需要が紛争を長引かせているのです。

私たちが便利で豊かな生活を求める一方で、その私たちの生活がアフリカでの紛争のきっかけとなっているのです。各国の政府や企業、メーカーだけでなく、私たち消費者もこういった問題の責任を意識しなければいけないといえるでしょう。まずは世界各地で何が起きているのかを知り、考えることから始めましょう。

【4 時限目】

4 時限目の授業では、教育を受けられないことで起こる問題について授業をした。授業の導入としてウイリアム・カムクワンバ君の紹介をし、教育を受けられないことでどんな問題が起こるか、どうして学校に行けないのかを考えてもらった。その後、JICA 国際理解教育実践資料集 p23 の負の連鎖のワークをグループでもってもらった。



やってみよう!

「学校に行けない」のカードを一番目に置き、そこからどのようにつながっていくかを考えてみましょう。項目がない場合や足りない場合には、白紙のカードに書き込んで、新しいカードを作りましょう。

学校に行けない	収入が少ない	働くための技術や能力が身に付かない
仕事ができない	食料が買えない	自分の子ども、学校に行けない
収入の安定した仕事に就けない	病気になるやすい	学校に行く時間がない
読み書きができない	十分な栄養が摂れない	子どもが親の手伝いをしなければいけない

教育を受けられないことで起こる負のスパイラルに気づいてもらった後は、どうすれば負の連鎖を止めることができるかを考えてもらった。生徒のアイデアで最も多かったのは「募金をする」「学校を作る」というものだった。解決方法のアプローチには様々な方法があることを教え、JICA や UNICEF などが問題を解決するために取り組んでいることを紹介した。その後は実際に TEDtalk で話すカムクワンバ君の映像を見せた。生徒の感想は以下のとおりである。

○教育を受けられないことで、社会について知ることもできない、友達を失ってしまうと思いました。将来仕事に就くこともできないので、教育を受けるということは、将来にも関係していると分かりました。また世界の未就学児童数が 6700 万人もいるということを今日の授業で分かりました。少しでもみんなが学校に行けるようになってほしいです。そしてみんなが平和であり、幸せな世界になってほしいです。○今自分たちが普通に学校にかよえていることが、普通ではないことを頭にしっかりといれていきたいです。○学校の大切さを改めて知ることができた。学校に行けないといろいろな負の連鎖が続いていくから、かわいそうだと思った。○人間はあきらめないうで頑張れば何でもできるのではないかと思います。私たちにとっては当たり前のことがマラウイでは全然当たり前ではないことに驚きました。学校に行けることはすごく幸せなんだと知ることができたのでよかったです。○世界には、自分が思っていたよりも、もっとたくさんの未就学児童がいることを知り、とてもビックリしました。カムクワンバ君は自分で何ごとも勉強し、発電用の風車まで作り上げてしまい、すごいなと思いました。今、自分が勉強をすることができることに感謝したいです。

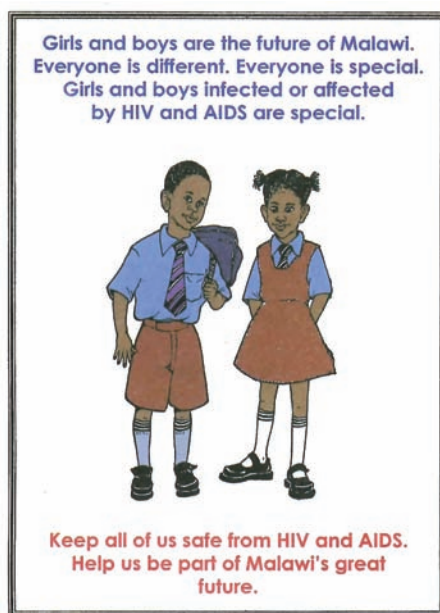
授業の詳細（3年生）

【1 時限目】

3年生では担当する英語の授業でマラウイを紹介した。3年生にはグループで Malawi Quiz に答えてもらった。内容は2年生におこなったものといっしょである。

【2 時限目】

3年生には Malawi で購入した国定教科書を使用し授業も行った。小学校2、3年生用の教科書に「ウサギとカメ」に関する物語が出てくるが、日本のものとは少し違った内容になっている。また、教科書の冒頭に AIDS への警告文が掲載されている。英語で内容を読み取ると同時に文化の違いや国が置かれている状況も理解することができる。



UNIT 11 Hare and Tortoise

tortoise rich agreed surprised shell
friendship



A long time ago, Hare and Tortoise were friends. Tortoise was rich and he had a happy family. Hare was jealous of Tortoise.

One day, Hare asked Tortoise to go and play a game in the bush. They should cook each other. Tortoise agreed. Tortoise was to be cooked first. Tortoise climbed into a pot of water and hid in his shell. Hare covered the pot and put it on the fire.

After sometime, Hare believed Tortoise was dead. He removed the pot from the fire. Hare was surprised to see Tortoise coming out of the hot pot smiling. Hare

42

was afraid. He knew that Tortoise was going to cook him.

Tortoise said it was Hare's turn to be cooked. Hare knew he was going to die. He did not have a shell to hide in. Hare ran away. That was the end of their friendship.

Answering comprehension questions

- 1 Who was Hare's friend?
- 2 Why was Hare jealous of Tortoise?
- 3 Where did Tortoise hide?
- 4 Who ran away?

Exercise A Completing sentences

Complete the following sentences using the correct word from those given in brackets.

Example I killed a big (hair/hare) yesterday.
I killed a big hare yesterday.

- 1 She is cooking in a big (port/pot).
- 2 Zion is wearing a (new/knew) dress.
- 3 I want to (buy/by) some tomatoes.
- 4 Mrs Dula is a (reach/rich) woman.
- 5 We have to (eat/it) vegetables every day.

43

3 年生感想

○日本ではうさぎとかめで終わるけど、マラウイでは続きがあって3年生が見ても大丈夫なのかなという怖い内容で驚いた。1年生からエイズのことを学ぶのが重要さが表れていてすごいと思った。○日本と全く違ったのでとてもビックリした。日本にもある「うさぎとかめ」でもこんなに内容がちがうのもビックリした。○日本ではありえないことがたくさんあったりして驚いたけどこのような国はたくさんあるし、それを理解していかないといけないんだと思いました。○私たちには先生たちもたくさんいて、エイズなどの生徒もいないので今の自分たちを大切にしないといけないと思いました。世界には勉強がしたくてもできない子たちがたくさんいることをわすれずにしたいです。○日本や他の国ができるだけたくさん、いろいろな面において支援をしていった方がいいと思った。

成果と課題

■成 果

- ・ マラウイという国を通して、アフリカや世界が抱える問題を生徒に教えることができた。
- ・ 他国と比較することで自分たちの国の恵まれた状況を理解することができた。
- ・ 支援を必要とする国があることを知ることができた。

■課 題

- ・ 問題があることは認識できているが、どのような支援をすればよいのか、自分たちに何ができるかというところまで考えが及んでいない。「かわいそう」で終わらせない取り組みが必要である。

Malawi Go Project

嶋田 亜日香

SHIMADA ASUKA

福岡市立福岡女子高等学校（福岡県）

担当教科：英語科

●実践教科：英語

●時 間 数： 高校 1, 2 年生（3 時間）、
3 年生（5 時間）

●対象学年： 高校 1 年生、2 年生、3 年生

●対象人数： 約 40 名、30 名、40 名

カリキュラム

■実践の目的

- 写真やビデオなどを通して、マラウイの現状を伝える中で、私たちが抱えているアフリカの固定観念を覆し、知識や情報を得ることの大切さを知る。
- マラウイの人たち（特にウィリアム・カムクワンバくん）の生き方を通して、どんな状況でもあきらめずに挑戦していくことの大事さを考える。
- マラウイと日本の教育の違いを知ること、教育の大事さやなぜ人は学ぶのかについて考えさせる。
- マラウイでの JICA の支援を通して、国際協力・国際支援の在り方や意義について考えさせ、グローバル社会で生きていくことはどんなことか考えさせる。

■授業の構成

高校 1 年生	高校 2 年生	高校 3 年生
第 1 次 【アフリカ・マラウイについて知る】 （パワーポイントを用いて） ① マラウイについて概略説明 行程・地理・面積・人口・公用語・チェワ語・通貨 ② アフリカのイメージについてグループ討議 気候・食生活・人々の生活などについて、自分たちがもっていたイメージと合っていたこと、違っていたことに気付かせる。 ③ マラウイが抱える諸問題について説明 農業の生産性、電力・水資源、教育、保健・公衆衛生 ④ 夢をもって生きている子どもたちの紹介 マラウイの子どもたちの写真を見せて、夢をあきらめずにたくましく生きている姿を紹介し、考えさせる。		第 1 次 【アフリカ・マラウイについて知る】 （パワーポイントを用いて） ① マラウイについて概略説明 1, 2 年生と同じ内容 チェワ語・通貨 ② アフリカのイメージについてグループ討議 1, 2 年生と同じ内容 ③ 自分が撮ってきた写真を見せながら詳しく説明

高校 1 年生	高校 2 年生	高校 3 年生
第 2 次 【マラウイの教育について考え、ウィリアム・カムクワンバくんの生き方から学ぶ】（パワーポイントを用いて） ① マラウイについてフリートーキング（英語で 1 分程度） ペアでマラウイについて覚えていることを英語で出し合う。 ② マラウイクイズ 場所、大きさ、チェワ語、主食などについて ③ なぜ、勉強するのかについてグループ討議（英語で） グループで考えを共有しあう。 ④ マラウイの教育の現状について知る。 義務教育の期間、就学率、識字率、女子進学率、教師の問題、教育を受けられないことで起こる負の連鎖 ⑤ ウィリアム・カムクワンバくんについて知る。 彼の人生について学び、TED のスピーチを見せて、あきらめないことの大切さを知る。	第 2 次 【マラウイが抱える諸問題について知り、国際協力・国際支援の在り方について考える】 ① マラウイの諸問題について説明 ② マラウイでの JICA のさまざまな支援について説明 ③ なぜ、国際協力・国際支援は必要なのかをグループ討議 ④ JICA 制作の VIDEO「依存大国日本」を視聴 ⑤ マラウイで青年海外協力隊として活動されている玉枝さんのメッセージ・ビデオ視聴 ⑥ 私たちにできることについて考えさせる。	
第 3 次 【国際協力・国際支援について考える】 （パワーポイントを用いて） ① ウィリアム・カムクワンバくんの TED スピーチを英語で視聴。Dictation を行う。 ② マラウイの教育問題について知る。 ③ マラウイで JICA が行っている教育支援について知る。 ④ 国際協力・国際支援とはどんなことかについて知り、考える。 世界の中での開発途上国の数を知り、なぜ国際支援を行うのかについて個人→グループで考えさせる。 ⑤ JICA 制作の VIDEO「依存大国日本」を視聴 ⑥ 視聴後、自分が考えたことを書く。	第 3～5 次 ① 各自で私たちができることについて調べ学習を行い、A 4 用紙 1 枚にまとめる。 ② JICA エッセイコンテストに向けて作文を書く。 ③ JICA エッセイコンテストに応募	

授業の詳細

高校 1 年生・2 年生

《第 1 次》

【アフリカ・マラウイについて知る】（パワーポイントを用いて）

- ① マラウイについて概略説明
行程・地理・面積・人口・公用語・チェワ語・通貨
- ② アフリカのイメージについてグループ討議
気候・食生活・人々の生活などについて、自分たちがもっていたイメージと合っていたこと、違っていたことに気付かせる。

③ マラウイが抱える諸問題について説明

農業の生産性、電力・水資源、教育、保健・公衆衛生

④ 夢をもって生きている子どもたちの紹介

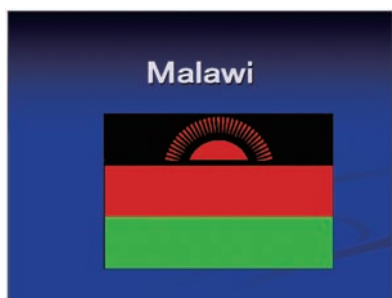
マラウイの子どもたちの写真を見せて、夢をあきらめずにたくましく生きている姿を紹介し、考えさせる。



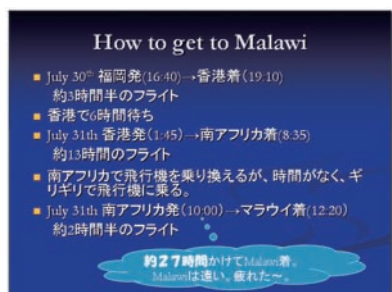
① 表紙

生徒の興味・関心を高めるために、流行っていたポケモン GO にならって、「Malawi Go プロジェクト」と名付けた。

→ポケモン GO が流行っていたときだったので、生徒の興味・関心を高めることができた。



② マラウイの国旗の紹介。



③ マラウイまでどうやって行ったかを詳しく説明し、アフリカまでの長旅について説明。

→日本からマラウイまで約 27 時間をかけてたどり着いたことに大変驚くとともに、日本からアフリカから離れていることを実感していた。



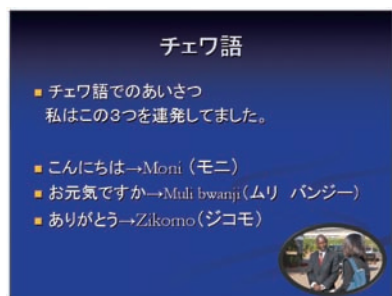
④ 地図を見ながら、日本からマラウイまでの経路を説明。

→地理上で日本からマラウイまでの遠さを実感することができていた。



⑤ マラウイの場所、面積、人口、公用語について説明。

→マラウイの場所、面積、人口、公用語どれについても生徒にまったく知識がなく、初めて知る国のことで、興味深く聞いていた。



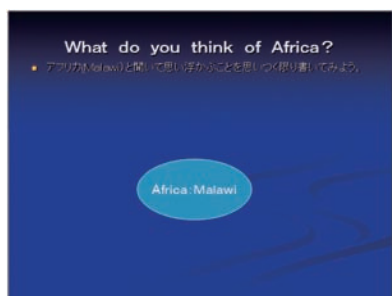
⑥ チェワ語でのあいさつについて説明。

→私自身もよく使ったあいさつ3つを紹介した。日本語とまったく違う言葉、音の響きに、生徒は興味をもって反復していた。この授業後も、この3つの言葉「モニ」「ムリバンジー」「ジコモ」を生徒はよく覚えていて、校内で会ったときに、チェワ語であいさつしてくる生徒もいた。



⑦ 通貨について説明。

→クワチャが使用されていること、私自身が5万円を換金したらすごい札束となって出てきたことを話すと、とても驚いていた。この差はマラウイの貨幣価値が低いことを表すことを説明する。

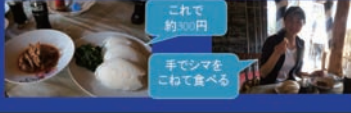
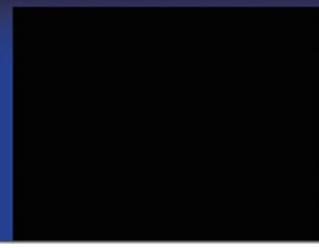


⑧ アフリカのイメージについてグループ討議。

→アフリカのイメージについて、最初個人で考えさせ、グループで出し合った。

砂漠、ライオン、はだし、暑い、虫、水がない、黒人、チョコレート、発展途上国、子供が働いている、治安が悪い、コーヒー、ネルソン・マンデラ、貧しい、コンピュータがない、電気がない、雨が降らない、子だくさん、スポーツ万能、死亡率が高い、蚊、感染症、トイレがない、植民地などとにかくいろいろなイメージが出てきた。

多くがマイナスイメージのもので、アフリカに関する情報が限られていることを実感した。

気候 亜熱帯気候 11月～4月が雨季 5月～8月が乾季  Malawiは南半球なので、私が訪れた3月は冬だった。しかし、日本の冬と違った。朝と夕方が冷え込み、日中の日差しはかなり強い。半袖でもいいくらい暑い暑さだった。でも、日本みたいに蒸し暑くなく、過ごしやすかった。	⑨ 気候について説明。 →アフリカは一年中暑いというイメージをもっている生徒が多く、また、マラウイが南半球にあるということを認識している生徒も少なく、マラウイが冬であること、また過ごしやすかったという話に驚いていた。
食生活 ■ 主食 トウモロコシの粉で作った「シマ」 ■ おかず 野菜 肉(鶏肉や牛肉) 魚(チャンボ→マラウイ湖で獲れる)  これで約300円 手でシマをこねて食べる	⑩ 食生活について説明。 →主食がトウモロコシの粉で作った「シマ」であること、それに肉、魚などを添えて食べることを説明する。また、私自身が手を使って食べた経験なども話す。
人々の生活 ■ 交通手段 車、自転車、バイク、バスなど ■ 買い物 スーパーマーケット、市場 ■ 伝達手段 携帯電話、郵便  自分が思い描いていたアフリカの生活よりも、かなり近代的だった。スーパーで売られている物も日本とあまり変わらなかった。多くの人が携帯電話を使っていることにも驚いた。	⑪ 人々の生活について説明。 →交通手段は車、自転車、バイク、バスなどが使用されていること、買い物も日本と変わらないスーパーマーケットや市場で行うこと、伝達手段として携帯電話が使われていることを説明する。 私自身も、マラウイを訪れてとても驚いたことの 하나가、携帯電話が使用されていることだったが、生徒たちも携帯電話が使用されていることや日本と同じようなスーパーマーケットがあることにとても驚いていた。 アフリカのイメージを覆すものの一つだったと思う。
首都 リロングウェの朝の様子 	⑫ 首都リロングウェの朝の様子を視聴。 →実際に、私自身が撮ってきたリロングウェの朝の通勤時間帯の様子をビデオで見せる。マラウイの人々が身に着けている服装、バスや車、自転車で通勤している様子など、日本とあまり変わらない様子に驚くとともに、マラウイという国、人々がどんな感じなのかつかめたようだ。

Malawiが抱える諸問題

- 農業における生産性の向上
- 森林資源の減少
→森林伐採……生活の糧(薪・炭の採取)




森林伐採をされた跡 薪を炭にした跡

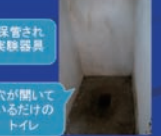
Malawiが抱える諸問題

- 電力開発
→電気が通っているのは都市部で約30%
地方は5%にも満たない
- 水資源
→安全な水へのアクセス率 86%
しかし、農村部の井戸は約25%が故障



Malawiが抱える諸問題

- 教育の拡充
→初等教育(小学1年～8年)は義務教育だが家庭の問題などで学校に來れない子もいる。
→十分な教育環境がない。
教科書が足りない。

学校に保管されている実験器具 穴が開いているだけのトイレ

Malawiが抱える諸問題

- 保健・公衆衛生問題
→エイズ・HIV感染
HIV感染者 10%
- →マラリア(蚊により感染)
蚊帳の中で寝る、蚊取り線香を使う
- →その他の感染症
毎晩、蚊取り線香をたき、蚊帳の中で寝て、とにかく蚊に刺されないように気をつけた。普通に寝ることがありがたみを感じた。



夢をもつ明るく元気な子ども達



⑬ マラウイが抱える諸問題について説明。

→農業の生産性の悪さ、森林伐採の現状、電化率の低さ、安全な水へのアクセス不足、教育の問題、保健・公衆衛生面での問題など、日本では考えられない現実がマラウイの人々の生活の中に問題としてあることを説明する。

マラウイの人々の生活の大変さを感じるとともに、自分たちが暮らしている日本の生活がどんなに恵まれているかを実感しているようだった。

⑭ 夢をもつ明るく元気な子どもたち

→現地の中高等教育施設を訪れたときの生徒たちの様子、また生徒たちに将来の夢を書かせたときのことなどを話す。私自身も驚いたことの一つではあったが、生活が厳しいにも関わらず、どの子どもたちも将来の夢をもっていて、堂々と語る姿に、こちらが元気をもらったこと、決して現状に悲観せず、たくましく生きる姿が見られたことを話す。

	生徒たちもマラウイの子どもたちの写真を見て、今の自分たちのことを振り返っているようだった。
	マラウイで撮った朝日が昇る様子を動画で見せる。 →アフリカのマイナスイメージを取り除きたいという思いもあって、最後にいつも笑顔を絶やさないマラウイの子どもたちの写真、そして、ほんとうに綺麗だった朝日の動画を見せた。 どんなに厳しく困難な状況でも、あきらめずに前を向いて生きているマラウイの人たちの姿から何かを学んでほしいという意図でこのような終わり方にした。
	

《第2次》

【マラウイの教育について考えウィリアム・カムクワンバくんの生き方から学ぶ】（パワーポイントを用いて）

- ① マラウイについてフリートーキング（英語で1分程度）
ペアでマラウイについて覚えていることを英語で出し合う。
- ② マラウイクイズ
場所、大きさ、チェワ語、主食などについて
- ③ なぜ、勉強するのかについてグループ討議（英語で）
グループで考えを共有しあう。
- ④ マラウイの教育の現状について知る。
義務教育の期間、就学率、識字率、女子進学率、教師の問題、教育を受けられないことで起こる負の連鎖
- ⑤ ウィリアム・カムクワンバくんについて知る。
彼の人生について学び、TEDのスピーチを見せて、あきらめないことの大切さを知る。

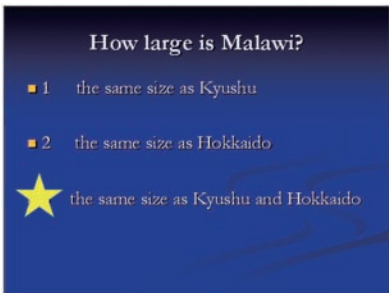
《第3次》

【国際協力・国際支援について考える】（パワーポイントを用いて）

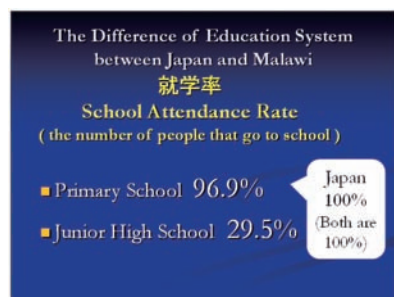
- ① ウィリアム・カムクワンバクンの TED スピーチを英語で視聴。Dictation を行う。
- ② マラウイの教育問題について知る。
- ③ マラウイで JICA が行っている教育支援について知る。
- ④ 国際協力・国際支援とはどんなことかについて知り、考える。

世界の中での開発途上国の数を知り、なぜ国際支援を行うのかについて個人→グループで考えさせる。

- ⑤ JICA 制作の VIDEO「依存大国日本」を視聴
- ⑥ 視聴後、自分が考えたことを書く。

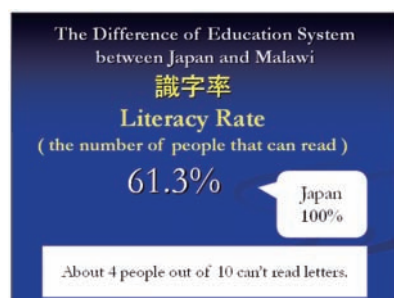
	① 表紙
	② マラウイクイズ →前時の振り返りのかねて、マラウイについてのクイズを行う。 多くの生徒がマラウイの位置、大きさ、チェワ語について、よく覚えていた。 クイズ形式なので、生徒も楽しみながらマラウイの振り返りを行うことができた。
	

How do you say “ ” in chichewa? ■ 1 How are you? ■ → Muli bwanji ■ 2 Hello. ■ → Moni ■ 3 Thank you. ■ → Zikomo 	
What is the main food for Malawians?  They grow maize. They make nshima from maize.	③ マラウイの主食は何か？ →マラウイの主食については、なんとなく覚えていたが、「シマ」という呼び方は出てこなかった。 シマの作り方を動画で撮ってきていたので、それを見せた。現地のマラウイ人の住居の様子（キッチンが外にある、火でお湯を沸かす）などもわかり、興味をもって見ていた。
How to make nshima 	
What do you study for?  ① Please think about it by yourself. ② Please talk about it in a group and share your thoughts.	④ なぜ勉強するのかについて考えさせる。（個人→グループ） →生徒たちが普段考えない「なぜ勉強するのか」という問いをして、この後の教育の大切さについて考えさせる第一歩とする。 個人で考えた後、グループでそれぞれの考えを共有し、いろいろな考えを知る。
The Difference of Education System between Japan and Malawi 義務教育 Compulsory Education (the education people have to take) ■ Primary School 8years ■ Junior High School 4years (They should pay for the school fee) 	⑤ マラウイの教育の現状について知る。（日本との比較） →義務教育について マラウイは小学校8年間で義務教育であり、中等教育に進むためには費用が必要なことを説明する。日本は小学校6年間、中学校3年間の計9年間で義務教育であることと比較させる。



→就学率について

日本は小学校、中学校ともに 100%であるのに対し、マラウイでは、小学校が 96.9%、中等教育では 29.5% と就学率が低いことを説明する。その背景としては、義務教育の小学校でも、家庭の状況で学校に通えない子がいること、中等教育においては、義務教育ではないこともあって就学率が低いことを説明する。



→識字率について

まず、61.3% という数字だけを出して、これは何の数字かを考えさせた。日本はほぼ 100% であるのに対し、61.3% の人しか文字の読み書きができないことにとても驚いていた。この数値がわかりやすいように 10 人のうち 4 人が文字の読み書きができないことを例として挙げて説明した。



ポスターを見せて、何のポスターか考えさせる。

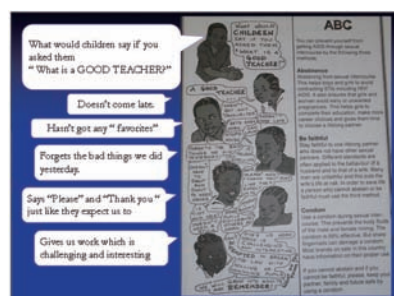
→ STOP EARLY MARRIAGES というところから、早く結婚しないように促すポスターであることに気づくことができた。マラウイでは、女の子が 13、14 歳で妊娠してしまって、妊娠した場合、学校を退学せざるを得ず、教育を受けられない状況になってしまっていることを説明する。

The Difference of Education System
between Japan and Malawi

	Japan	Malawi
義務教育 Compulsory education	小学校 6年間 中学校 3年間	小学校 8年間まで (中学校4年間は 費用が必要)
就学率 the school attendance rate	小学校 100% 中学校 100%	小学校 96.9% 中学校 29.5%
識字率 a literacy rate	100%	61.3%
女子進学率	100%	24%
1クラスあたりの 人数(小学校)	約30~35人	約100人

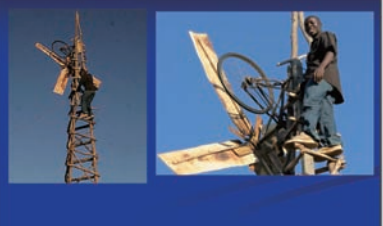
日本とマラウイの教育制度の違いについて

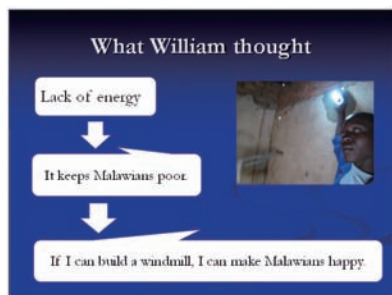
→これまで見てきた教育制度の違いを表で再度確認する。特に、女子の進学率の低さ、そして、一クラスの人数に注目させ、女子教育が進んでいないこと、教員が抱える負担が大きいことなどについて話をする。



教員について

→このページを見せて、それぞれが言っている吹き出しを確認する。
「どんな先生がいい先生」という問いに対し、生徒が「遅刻しない」「お気に入りがない」「悪いことをしてもすぐに忘れてくれる」などが書かれている。これは何に載っているものかを推測させる。教科書に載っていることを伝えるととても驚いていた。

The problem about teachers - Some teachers don't have teachers' license. (教員免許を持っていない先生がいる。) - Their salary isn't satisfactory. (お給料が満足いくものではない。) - They have to teach various subjects. ex) math, science, English. (いろんな教科を教えないといけない。) - They have to teach too many students in a class. (One teacher has about 100 students in a class.) - They don't have enough textbooks and facilities. (十分な教科書がないし、設備が整っていない。) 	教員が抱える問題について →マラウイの教員が抱える問題について取り上げ、教員の勤務状況が厳しいこと、教育環境が十分に整っていないことなどについて説明する。このような悪状況の中、教員のモチベーションがなかなか上がらず、教育の質の低下につながっていることについても述べる。
What will happen to you if you can't get a good education? 	もし、よい教育を受けることができればどのようなことが起こるか？ →教育が受けられないことで起こる負の連鎖について説明をし、教育の大切さについて考えさせる。
 It's a windmill.	ウィリアム・カムクワンバくんについて →この写真を見せて、何の写真か考えさせる。 2年生は英語の教科書でカムクワンバくんについて学んでいたので、すぐに答えが出たが、1年生は答えが出るまでに時間がかかった。
The windmill the boy built 	→この風車を作ったのは、ウィリアム・カムクワンバくんという14歳の少年だったことについて説明する。
William Kamkwamba He was born in Malawi in 1987. In 2002, when he was 14 years old, he had to give up going to school, because his family couldn't afford to send him. He went to the library and read the book about electricity. In 2002, huge floods caused serious damage to Malawi. After floods, a drought badly affected crops.  	→ウィリアム・カムクワンバくんについて簡単に紹介する。 2年生はすでに英語の教科書で読んでいたが、1年生は初めて知ることだったので、ここに書いている以外の情報もいれて説明をする。 14歳の少年が自学で学び、ガラクタを集めて風車を作り、電気を起こしたことにとっても感銘を受けていた。



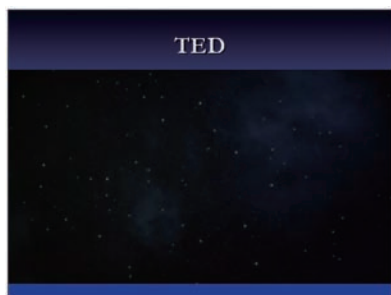
→ウィリアム・カムクワンバくんが考えたことをわかりやすく吹き出しで説明する。



→実際に、自分が訪れて撮ってきた写真を見せて、家族について、住居について話をする。カムクワンバくんの父親が英語を理解できなかったため、妹さんが通訳をしてくれたこと、カムクワンバくんが有名になって、家族も喜んでいること、現在、カムクワンバくんはアメリカで勉強していることなどについても話をする。

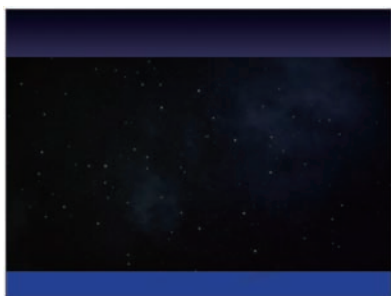


→カムクワンバくんのお父さん（左上の写真）
カムクワンバくんの親戚（右上の写真）
カムクワンバくんの妹さん（右下の写真）



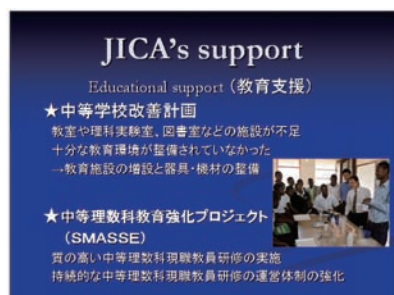
TED のウィリアム・カムクワンバくんのスピーチ(2009 年度版)を視聴。

→最初は日本語の字幕入りで見させて、カムクワンバくんのスピーチの内容を理解させた。



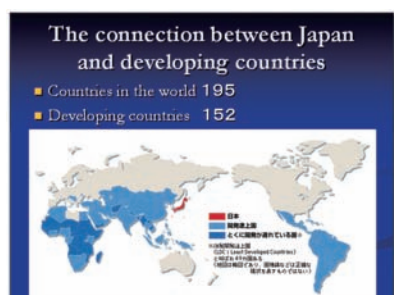
→2 回目は英語のみで見させて、Dictation をさせた。

	ウィリアム・カムクワンバくんのメッセージ →彼のメッセージから生徒たちにあきらめない姿勢をもってほしいという思いをのせて、最後にこのメッセージを載せた。 この後、生徒たちにカムクワンバくんから学んだことという内容で感想を書かせた。
	マラウイの子どもたちから学ぶ →現地で会った子どもたちの写真を見せて、生活は厳しいが、現状に不平不満を言うことなく、どの子どもたちも明るく元気で、未来に希望をもって生活をしていることを伝えた。
	→途中で会ったはだしの少女たち（左上） 自分たちで作ったボールを使って遊んでいる子どもたち（右上） 1日1食しか食べられないけれど、熱心に柔道の練習に励んでいる子どもたち（中央） 日本から持ってきた帽子を嬉しそうにかぶる子どもたち（左下） けがや感染症などの病気で病院に来ていた子どもたち（右下）
	→ipadで自分の写真を興味深そうに見ている子どもたち（左上） 頭の上に荷物を載せてどこかに向かっていった女性たち（右上） 病院で理学療法士として働いている青年海外協力隊の玉枝さんと彼女がお世話をしている親子（左下） 柔道の練習を終えた後の子どもたち（右下）
	マラウイの問題 →高校1・2年生は教育の問題についてのみ扱った。（高校3年生は農業、電気、水、公衆・衛生問題などいろいろな問題について扱った。） これまで学習したことのおさらい。



JICA の支援について

→教育の問題を解決するために、JICA がマラウイで行っている活動を紹介した。(高校3年生は上記の問題に対して JICA が行っている支援を紹介した。)



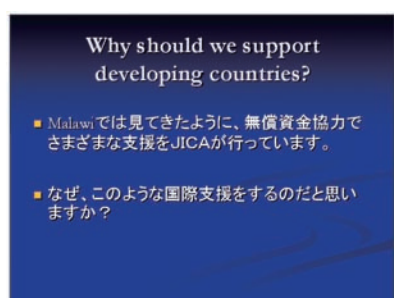
日本と開発途上国の関係について

→世界には約195か国あるが、そのうち開発途上国は何か国かという問いを出し、生徒に考えさせた。約150か国もの国が開発途上国であることに大変驚いていた。



国際協力・国際支援について

→国際協力・国際支援を行っている団体はどんなものがあるかを説明する。ODAの代表的なものとして、JICAがあること、そのほかにも、NGOの団体などがあることを説明する。



なぜ、国際協力・国際支援は必要なのかということについて考えさせる。(個人→グループ)

→多くの生徒が世界の格差を減らすため、日本は先進国なので、開発途上国を支援する必要があるなどの答えが多かった。



JICA 政策の VIDEO「依存大国日本」を視聴

→国際協力・国際支援の必要性を違う視点から考えさせたくて、この VIDEO を選んだ。内容は日本人の現在の生活は開発途上国からの輸入で成り立っていることをわかりやすく説明した内容になっている。

私自身もこの VIDEO を見て、国際協力・国際支援の在り方や意義について考えさせられたものだった。生徒も興味深く視聴していた。

	マラウイの朝日
	現地の子どもたちと撮った写真

☆使用したプリント類

Malawi から学ぶ

なぜ国際交流、国際協力が必要だと思いますか？自分の考えを書いてみましょう。

自分の考えをグループで出し合って話し合ってみよう。

未来の地球のために
～私たち一人一人にできること～

★JICA などODAの活動やNPOなどの活動から考える
★海外協力隊や民間の活動から考える
★日本が支援している国、日本が支えられている国から考える
★自分たちの将来や生活の現状、理想から考える

- 1 教育
- 2 環境
- 3 医療・公衆衛生
- 4 インフラ
- 5 人材育成
- 6 平和

★日本以外の国がどのような支援を行っているのから考える

A4用紙一枚にまとめる。友達や先生にまとめてもらい、パソコンを使ってWordでまとめてもらい、9/8（水）に提出

William Kamkwambaから学ぶ

What do you study for?

Trust Yourself and Believe,
Whatever Happens Don't Give Up...

— William Kamkwamba —

☆参考資料・教材など

WORLD TREK ～ English Communication II ～（桐原書店）
 国際理解教育実践資料集～世界を知ろう！考えよう！～（JICA 地球ひろば）
 Mundi October 2013（JICA）
 JICA 国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト 2016（JICA）
 VIDEO「依存大国日本」(JICA)

TED「William Kamkwamba（2009 年度版）」

Watching Light「Mosquito Nets in Africa」（浜島書店）

教員海外研修中に頂いた資料・現地で撮った写真・動画など

その他の取り組み

- 2年生英語選択授業（2クラス）でマラウイのことを紹介し、日本が開発した蚊帳についての英文を読む。

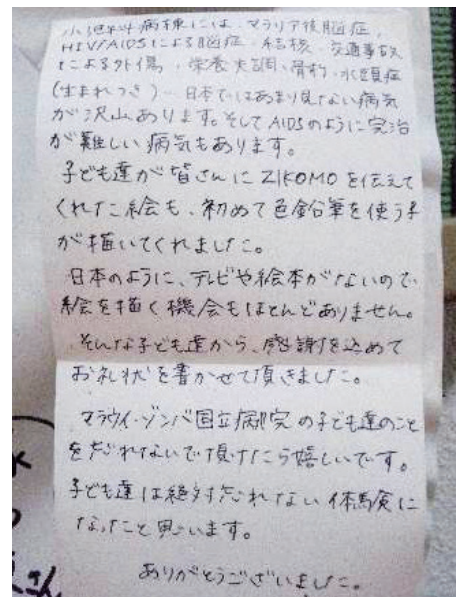
フォトランゲージなどを行いながらマラウイについて紹介し、蚊帳についての英文読解を行った。

いつも授業をしていないクラスだったが、代理で授業を行った時にマラウイについて紹介した。

- ゾンバ国立病院の子どもたちから届いた絵の掲示

教師海外研修中に訪れたゾンバ国立病院の子どもたちから「ZIKOMO（ありがとう）」というメッセージ付きの絵が届いた。国立病院で理学療法士として活動されている青年海外協力隊の玉枝さんが子どもたちに描かせたものを各校に送ってくださった。

その絵を掲示するとともに、マラウイのことについて紹介したプリントと写真を掲示した。



- 学校の月刊広報紙で紹介

JICA九州主催の教師海外研修でマラウイを訪れたこと、マラウイの紹介、掲示物の紹介などをしてもらい、全校生徒へマラウイのことについて伝える機会となった。

今後の予定	
11月の予定	
19(土)	PTA視察研修会
	中学生進路相談会
10(火)	修学旅行保護者説明会
27(日)	ビジネス文書実務検定 簿記検定
24(木)~29(火)	期末考査
30(土)	I II 風紀検査① III 人権教育特設LHR
12月の予定	
3(土)	電卓検定
4(日)~17(土)	II 国際教養科 アメリカ海外語学研修
5(月)	III 2給食実習(~9日まで)
19(月)	終業式
23(祝)24(土)	合同文化発表会

嶋田亜日香先生（国際教養科）海外研修報告 Let's learn about Malawi!

今年の夏、JICA九州主催の教師海外研修でアフリカ大陸にあるマラウイ (Malawi) という国を訪れ、マラウイという国の現状とJICAの支援活動を見ました。マラウイに行くまでは名前さえも知らず、アフリカにマイナスイメージを持っていましたが、実際に訪れてみて、マラウイの良さをたくさん知り、いろいろなことを感じました。マラウイは世界で最貧国の一つで、マラウイの人たちは日本では考えられない厳しい生活をしています。でも、決して悲観することなく前向きに生きていて、だれもが素敵な笑顔でした。どんな状況でもあきらめることなく、未来への希望をもって生きているマラウイの人たちにたくさんのパワーをもらった研修でした。(マラウイで病院を訪れたときに会った子供たちから感謝の絵が届いています。英語科準備室の横の掲示板に貼っていますので、ぜひ見てください。)



生徒の感想

《第1次授業終了後》 今日の授業を受けて思ったこと、考えたことを感想として書かせる。

★高校1年生

- 今日の英語の授業を終えて、初めて Malawi という国を知りました。Malawi はアフリカにあると聞いたので、私の勝手なイメージではあまり便利なものは普及されていないのかなと思っていましたが、意外にも、みんなオシャレだったり、いろんなお店が並んでいたりなどありました。だけど、一番驚いたのは携帯を持っていたことです。また、Malawi はマラリアに感染する危険性があるということも知りました。自分が旅行に行くときもきちんと対策していこうと思いました。私は外国のことについて、まだまだ知らないことがたくさんあるのとわかったので、いろいろなことに興味を持っていきたいです。
- 写真を見たとき、想像していたものとは全く違う写真だったので驚きました。私たちからすると、ガラクタのように見える実験道具にも驚きました。あの実験道具で実験をしても危険じゃないのかなと心配にもなりました。でも、子どもたちがとてもキラキラした笑顔をしていたので、すごくいいなと思いました。私から見ると貧しくて苦しく生活しているイメージだったので、幸せそうな姿の写真とかを多く見られてよかったなと思いました。
- “マラウイ”という国は名前だけは知っていてもそれ以外のことは全く知りませんでした。アフリカの国なので、なんとなくイメージとして“貧しい”とか“発展していない”とか、そういうことを考えていました。しかし、今回の先生の現地での話や青年海外協力隊で働く女性の話を聞いて、そんなイメージが払拭されました。もちろん問題を抱えてはいるけど、アフリカ特有の文化や国民性にとても魅力を感じました。日本人って少しドライな感じがするけど、マラウイの人たちは日本人より温かみのあるような人たちなんじゃないかと思いました。私は以前からいつか国際的な支援活動に携わってみたいと思っていました。今回の話を聞いて、その思いは強くなりました。何か自分の強みを見つけて、その能力を生かして支援に携わりたいです。そのためにも、英語だけでなく、その他の自分の強みを見つけていきたいです。
- 今日はアフリカのマラウイについて学びました。私は今までアフリカと言えば、あまり発展していなくて道路もちゃんとしてなさそうなイメージがありました。だけど、嶋田先生の撮った写真を見たら、車が道路を走っていて、着ている服も日本では売ってあるような鮮やかな洋服だったので、びっくりしました。一番びっくりしたのは携帯を使っていたことです。アフリカに対するイメージが180度変わりました。私は外国語以外に興味があるものが特にないので、嶋田先生が言ったように「英語+何か」の「何か」を探そうと思いました。
- 今までアフリカのことは、すごく不便で、すごく貧しくて大変な国で、住民もつらそうだと思っていましたが、今回の先生の話を聞いて、見方が変わりました。電気とか通っていないくて、不便な部分や大変なところもあるけど、いつも笑顔でつらさを見せなくて、楽しそうに暮らしているようなので、私も見習いたいと思いました。日本とは違う習慣もあって、いろんな国についてもっと知りたくなりました。また、英語とあと何か一つ自分の武器になるものを見つけて、貢献できるようになりたいです。

★高校2年生

- マラウイのことを聞いて日本が本当に恵まれていると感じました。電気がなかったり、トイレがむき出しだったり、日本だったら考えられない生活をマラウイの人たちは日常的にやっていて驚きました。大変な生活や問題を抱えながらも明るく元気で夢を持っている姿に私も頑張らなければと力をもらいました。
- 私はマラウイという国を初めて聞きましたが、アフリカに位置する国なので、そこまで電話や機械が普及しているとは思っていなかったのですが、都市にスーパーマーケットや普通に車が通っていることに驚きました。しかし、普及しているのは都市のごく一部であり、助けや寄付を必要としている場所もたくさんあるのだと話を聞いてわかりました。また、日本がどれだけ平和で過ごしやすいところであるのかがわかります。もっとさまざまな国の事情を知りたいです。
- 今までマラウイという国の名前も聞いたことがなくて、どういう国かも知らなかったけど、いろんな話を聞いて、日本が今すごくぜいたくで豊かな暮らしをしているんだと感じました。また、子どもたちがみんな学校に行けていなかったり、病気にかかったり、サッカーボールも手作りのボールを使ったりして、何か日本からできることはないのかなと思いました。
- 大変だろうけど、写真を見たら笑顔の人がいっぱいいて魅力的だと思いました。現地に行かないとどれだけ大変かわからないけど、その中でもたくさん夢をもってる人がいて、私たちと同じ感じなんだと感じました。

★高校2年生英語選択授業の生徒（普段教えていないクラスの生徒）

- いつもの英語の授業と違うスタイルで楽しかったです。パワーポイントで日本語で説明が書かれていたので、内容がわかりやすかったし、英語を聞いてなんとなく理解しながら日本語で書かれているのを見て確かめたり、いつの間にか英語が少しわかるようになっていて驚きました。マラウイについて全然知らなくて、アフリカと言えばマイナスなイメージが多めだったけれど、生活の様子は車や自転車も使うし、服も着ていて、私たちと変わらなくて、とても驚きました。日本で蚊に刺されてもかゆいで終わるけれど、アフリカの方ではマラリアで死に至るまでになってしまうから、蚊対策として日本が蚊帳などで関わりがあることはすごく大切な関わりだなと思いました。
- 今日の授業がなかったら知れなかった国のことを詳しく知れてよかったです。自分たちの想像とは違う環境があってびっくりしました。日本とは違って危険なことがたくさんあったり、最貧国だったりといろんなことに衝撃でした。でも、マラウイのことを知れてよかったです。勉強になりました。他の国のことも自分で調べて勉強していこうと思いました。
- 今日はマラウイの実態について詳しく知ることができました。写真のスライドなどを見ながら学べました。やっぱりマラリアだったり、医療未発達だったり、まだまだ改善しなきゃいけないところがたくさんあると思うけど、安全な水の確保など、日本も協力できることは続けていきたいと思うし、もっと支えられる部分を増やしていきたいとも思えました。英語も交えて、国について学べたのでとてもよかったです。また、やりたいと思いました。

《第2次授業終了後》「なぜ勉強をするのか」について自分の考えを英語で書かせた。(生徒の英文そのままを載せているので、間違いもあります。)

★高校1年生

- I want to become a ground staff. I am studying English so hard for that reason. I was surprised when I heard about William Kamkwamba. He invented the wind power generation by garbage. And he said, "Trust Yourself and Believe, Whatever happens Don't Give Up." I am thinking about working hard like him.
- I think I should study so I can have a better life in the future. I think that studying is the key to our future. If I study hard now, later will be easy. So, I think that I'm studying now to have a better life and an easy life in the future.
- I thought that I can go to school is natural. But in Malawi, many people can't go to junior high school. It is a big problem for Malawi to develop. I was impressed by William Kamkwamba's story. My thought was changed. I studied for my future before. But I decided to try to study to become a person who can be useful for other people. I'll study hard.
- I think I study for my future. If I study well, I will be able to get a good job. And my dream may come true. Many Japanese children don't like to study. But studying is important for our future and dream. So, I think I study for my future and dream.
- We have to work someday. And I have a dream. It is to work in foreign countries. So I have to study to make my dream come true. I think I'm happy to study in a good environment. So I want to learn a lot of things and try something. I thought about "Why do we have to study?" again. Thank you for telling us about Malawi!!
- I think studying for happiness. William couldn't read English and didn't have enough materials in Malawi. But he didn't give up. He built wind turbine when he was 14 years old. I think, thanks to him, Malawian was possible to live better. I learned if I trust myself and believe, whatever happens, don't give up, my dream come true. I get good education. So I'd like to thank to study hard.

★高校2年生

- To make my dream come true and help the country. Because if we don't study, we can't do what we want to be. Also, if we study, we may be able to help the world. So we should get right knowledge through studying. There are the reasons why we should study well.
- We study for our lives. We can get much knowledge when we are studying about something. This knowledge can make many people happy and save their lives, just like William did! That's why we study even though we don't want to. We might think some of our studies are meaningless, but these studies will somehow contribute to our future and the world.
- Before, I thought I studied to get a good job and my life. But Malawian people are different. It is difficult for Malawian to study. Because there is no textbook for each of them. After the lesson, I think we should be thankful to study. I study English and I want to contribute to foreign countries.

- To help each other. I think if we have knowledge, we could be aware of missing parts of our own lives and what we have to do to improve them. If somebody notices it, the world will be better little by little. And it is important to try to make a better place by myself. To do so, we have to acquire knowledge, so we have to study.
- I felt the importance of studying again. To study is to give us knowledge. So we can know many things and can make use of various things. For example, to help many people and to contribute to the international community. Studying will broaden our horizons and possibilities.

《第3次授業終了後》 これまでマラウイに関する授業を受けてきての感想を書かせた。3年生は第2次授業終了後に書かせた。

★高校2年生

- JICAの動画を見て、少し恥ずかしくなりました。自分自身も発展途上国とはあまり関係がないと思っていました。でも、すごく依存していることがわかり、情けないし、恥ずかしいし、複雑な感じがしました。現状を知って、少しでも発展途上国など、困っている人たちに貢献できたらいいなと思いました。勉強もすごく嫌いだけど、マラウイの子どもたちの状況を知って、勉強ができることのありがたさ、幸せさを感じました。私たちにとっては当たり前のことかもしれないし、きついことかもしれないけど、もっと視野を広げ、ありがたさをもっと感じられるようにしたいです。
- 今日話を聞いて、とても感動しました。私はこの生活が当たり前と思っていましたが、日本は輸入率がすごくて、いつ今の当たり前がなくなるのか、すごく考えるようになりました。これからもっといろいろと世界の問題に目を向けていきたいと思いました。
- JICAの動画を見て、一つ一つが心に残りました。正直、こんなに発展途上国の人にお世話になっているとは思いませんでした。発展途上国で作られたものを食べたり、作られたものを利用して洋服を作ったりなど、私たちがこんなにありがたい生活をしているのは、発展途上国の人たちがいるおかげなんだなとすごく心に染みました。
- ビデオを見て、日本が発展途上国に依存していることをしり、私たちと途上国は大きなつながりがあることを知りました。これだけ依存しているのに寄付が減っていることを知り、少し悲しかったです。ある意味、日本もまだまだ途上国な気がします。ウィリアム君のように何かをしたいという気持ちで、村の人たちを幸せにするということは難しいかもしれないけど、私たちは今ある現在をきちんと見極めて、将来役に立つ人になりたいと思いました。
- 今回、マラウイの話を聞いて、まず思ったのが、私たちが暮らしている日本は本当に恵まれているということです。マラウイでは十分に学校の教育を受けられない子どもたちがたくさんいる中で、日本では学校へ行くことが当たり前になっているし、施設も整っていて、比べると不平等だと思いました。また、私たちは発展途上国に依存しすぎていることがわかったので、発展途上国を他人事だと考えずに、少しでも自分のできることを探していこうと思いました。
- 今まで発展途上国について何度か学習をしてきましたが、日本が途上国を支援したりしているかの理由にも、ここまで輸入に頼りきっていることや、発展途上国が195か国中152か国にも及んでいて、世界には貧しい生活を虐げられている現実をマラウイという国から学びました。

また、その中でウィリアムさんは自分の力で英語の本を読んだり、その本を通して国のために活動、何かできることはないかと、1から風車を作ったことは、本当に日本にいますと考える付かないことでもありますし、とてもすばらしい気持ちだと思いました。ウィリアムさんの志もとてもすばらしいことではありますが、もっと国の中には字を読んだりすることや勉強ができない子どもたちが多く、国々で大きな差が生まれていて、学べる人がいる、いないがなくなり、支援活動が当たり前になればいいなと感じました。Don't give up. また、自分自身でも国々が困っていたりすれば支援をしたりしていく活動に取り組みたいです。

- 嶋田先生からマラウイについて話を聞く前は、マラウイがどんな国か、どこにあるのかも知らなかったし、興味もなかった。でも、話を聞いて、いろんなことを考えることができた。私たちがいつも「当たり前」だと思っていることが、マラウイでは「当たり前」ではないことにびっくりした。日本では、水が足りないというのは考えられないのに、マラウイでは、水が足りなくて、1か月に1回くらいしか洗えないと聞いた。これからは「当たり前」だと思わないで、一つ一つに感謝しながら生きていきたいと思った。

★高校3年生

- 私は、正直、日本が“やってあげている”感がありました。ですが、嶋田先生に Malawi の話を聞いて、もし、発展途上国がなくなったら、私たちの生活が普通じゃなくなると聞いて、助け合うことがこれからの私たちがやっていかなければならなかったことだと思いました。
- こうした話を聞く機会はめったにないから聞けてよかったし、日本だけがしてあげてるんじゃないくて、お互いにしていることを初めて知りました。もっとたくさんの人がこういうことを知れたらいいなと思いました。
- 今までアフリカの国と聞いて想像つくのは、貧しい人が多いとか子どもが働かされるということしかなかったけど、今回初めてマラウイという国も知ることができて、アフリカの国としてのイメージが180度変わって、日本とどんな関わりがあるのかももっと深く知りたい。
- なぜ国際支援が必要かという質問に答えるとき、すごく悩みました。考えてみると、確かになんで日本はそこまで外国を援助してるんだろう…と思いました。でも、動画を見て、日本は発展途上国からたくさんのものを輸入し、依存しているとわかったとき、本当にスッキリしたし納得しました。日本は特別いいことをしてるんじゃないくて、お返しをしているということがわかりました。
- 今までなぜ日本ばかり支援をしているのかわからなかったけれど、今回の学習で、お互いの国が支え合って、私たちの生活が成り立っているのだということを知り、アフリカの国々にもっと支援が必要だと思いました。
- 今回、嶋田先生のプレゼンを聞いて、今までで一番考えさせられた内容でした。前々から発展途上国のことは知っていましたが、今はこんなにも成長しているのだなと思いました。少しずつではあるけれど成長していくのはどんなに素晴らしいことかと感じました。国際支援はなぜ必要か？考えてみれば、根本的なことであって、それが自分ではすぐに答えが出せなかったのは、まだ自分は地球のことを理解していないからだと思いました。なので、この件に関係なく、何でもしっかりとした考えをもっていないといけないと思いました。とても中身が濃いプレゼンでした。

高校3年生の調べ学習

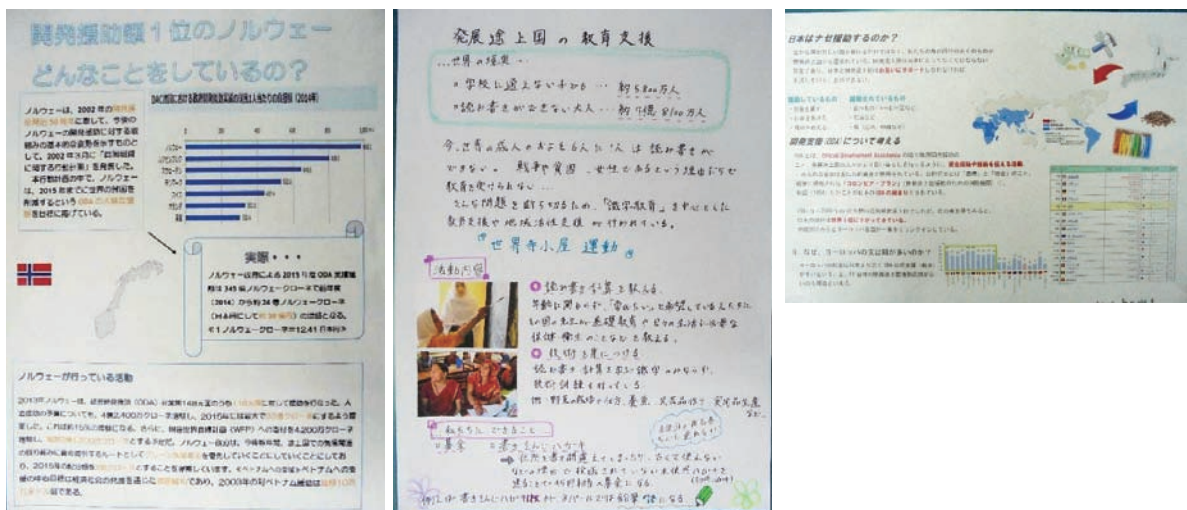
高校3年生は、第2次までの授業をした後、各自で私たちができることについて調べ学習を行わせて、A4用紙にまとめさせた。それぞれ、これまでの授業を通して、興味・関心をもったことをテーマにして、調べ学習を行った。

この調べ学習を行った後に、JICA エッセイコンテスト「未来の地球のために～私たち一人一人にできること～」の作文を書かせて、3年生全員に応募させた。

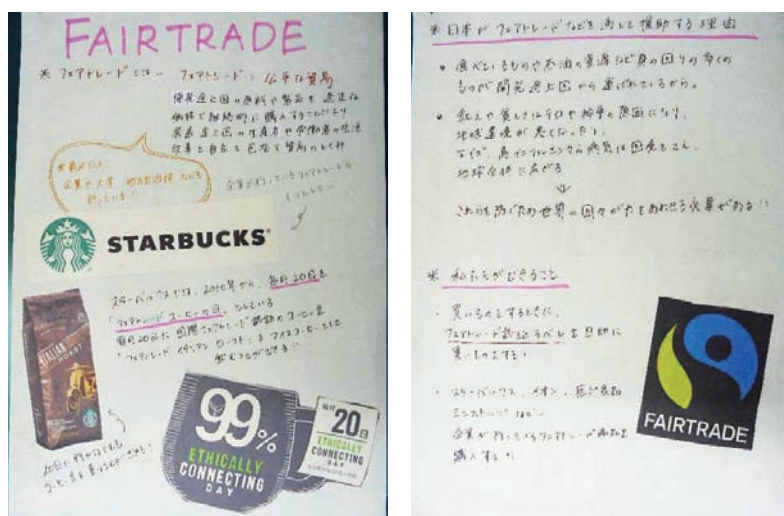
○ 世界の現実・難民問題・ミレニアム開発目標・日本が受けた支援・アトピー患者が少ない発展途上国・世界の幸福度について



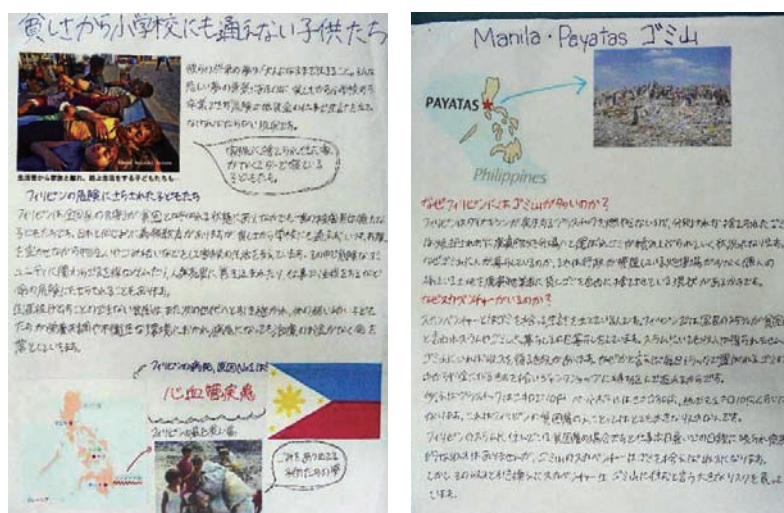
○ 開発援助額1位のノルウェー ○ 発展途上国の教育支援 ○ 日本はなぜ援助するのか



○ FAIR TRADE



○ 貧しさから小学校に通えない子どもたち



成果と課題

■ 成 果

多くの子どもたちがアフリカについて限られた情報しか持っておらず、遠い国ととらえ、自分たちに関係している国としてとらえていなかった。しかし、授業を通して、アフリカだけでなく、マラウイという国について大変興味をもつようになった。また、自分たちにとってもつながりが深い国として考えるようになり、国際協力・国際支援の意義・あり方についても考えることができた。

生徒の中には、この授業をきっかけに、開発途上国に興味をもち、国際協力・国際支援に関わる仕事に関わりたくと今後の進路を考える生徒が出てきたり、アフリカやマラウイのことについて、自分たちで調べたりする生徒も出てきた。

また、ウィリアム・カムクワンバくんの生き方を通して、自分たちもあきらめずに頑張りたいと前向きな気持ちを持つ生徒、教育の大切さについて実感する生徒も多かった。

私自身も今回の研修を通して大きな学び、意識の変化を得ることができた。私自身にとっても

マラウイは全く知らない国であったが、マラウイを訪れて、いろいろな人と出会い、さまざまなことを経験させてもらったことで、マラウイという国がとても好きになり、マラウイについて生徒に知らせたい、JICA の職員の方たちが頑張っている姿を伝えたいという強い思いをもって、授業づくりを行った。

帰国してから、授業づくりを行うにあたって学ぶことがとても多く、授業づくりを行うことで、さらに理解を深めることができた。ほんとうに人生観を変える貴重な素晴らしい経験をさせてもらい、生徒にも授業を通して伝えることができたのではないかと思う。

■課 題

授業づくりを行うにあたって、いろいろな資料を見て、授業を作ったが、どうしても自分の思いや考えが入ってしまい、生徒たちに一方的な見方を与えてしまったのではないかという危惧はある。今後、生徒たちが自分自身で興味・関心をもって、考えを深めていってほしいと思う。また、授業の中だけで終わらず、生徒たちがこれからの生活の中で、開発途上国のこと、国際協力・国際支援のこと、自分の生き方につなげていってくれればと思っている。

世界とのつながり、自分にできることを考えよう

清水 啓子

SHIMIZU HIROKO

直方市立直方東小学校（福岡県）

担当教科：全教科

●実践教科： 1：社会科（5,6時間目／10時間）
2：道徳（2時間）

●対象学年： 小学6年生

●対象人数： 31名

カリキュラム

■実践の目的

- 世界には、生活習慣や文化の異なるたくさんの国があることや、日本とそれらの国との間にはさまざまなつながりがあることに気づき、興味、関心を高めることができるようにする。
- 勤勉なウィリアム少年の生き方に触れ、自分自身の生活を振り返らせる。
- 「ごみ問題ってなあに」の資料を通して、世界の問題と自分を結びつけて、自分たちにできることを考えさせる。

■授業の構成

教科	時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
社会	【1時限】 テーマ：日本とアフリカのつながり ねらい：私たちの身の回りにあるものが、遠く離れたアフリカとつながっていることに気づかせ、私たちの生活は世界とのつながりや支えの中で成り立っていることに気づかせる。また、自分たちの消費行動が世界に大きな影響を与えていることに気づかせる。	① たこ焼きや携帯電話など18品目が描かれているワークシートを配布し、アフリカとつながりがあるかどうか予想させ、グループで話し合わせる。 ② 「レアメタルが軍事資金に」を読んで、考えたことを発表させ、アフリカとつながりがあること、つながりがあることはアフリカにとって良いことばかりではないことに気づかせる。	・国際理解教育実践資料 ～世界を知ろう！考えよう！～ （JICA）ワーク① 掲載の絵カード、コラム「レアメタルが軍事資金に」
	【2時限】 テーマ：マラウイについて知ろう。 ねらい：日本から遠いマラウイでも、日本とのつながりや私たちの生活と似	① パワーポイントを用いて、クイズ形式でマラウイについて知る。（位置、言語、食事、住居、服装、遊び、学校） ② 日本と似ているところや違う点を出し合わせる。	・マラウイ紹介 パワーポイント

教科	時限・テーマ・ねらい	内容・方法	使用教材
	ている点があることに気づかせる。		
道徳	【1 時限】 テーマ：自分の生活を振り返ろう。 ねらい：ウイリアム少年の生き方を知ることを通して、自分の生活を振り返る。	① アフリカ、マラウイのイメージを出し合う。 ② 「風をつかまえたウイリアム」を読む。 ③ 場面ごとにウイリアム少年の努力や気持ちを読み取る。 ④ 自分に置き換えて、努力した経験を出し合わせ、話し合う。	・「風をつかまえたウイリアム」（絵本）
	【1 時限】 テーマ：私たちにできること ねらい：ごみの定義を知り、ごみ問題について自分たちにできることを考える。	① 「ごみ問題ってなあに」を読む。 ② ごみとは何か文章から確認する。 ③ 自分の生活を振り返らせ、自分たちにできる身近なことはないか考えさせる。	・国語教科書 5 年読み物資料「ごみ問題ってなあに」（光村書籍）

授業の詳細

社会科

1 時限目「日本とアフリカのつながり」

1. 子どもの活動の流れ

- ① 国際理解教育実践資料～世界を知ろう！ 考えよう！～（JICA）ワーク①掲載の絵カードを載せたワークシートを配布し、アフリカとつながりがあるかどうか予想を立てる。
- ② グループで予想したものを発表しあい、なぜつながりがあるのか理由を出し合う。
- ③ 答え合わせをして、たくさんのものがアフリカとつながっていることを知る。
- ④ なぜ、たくさんのものがアフリカから輸入されているのか考える。
- ⑤ コラム「レアメタルが軍事資金に」を読み、感想を話し合う。

コラム レアメタルが軍事資金に

携帯電話やパソコン、ゲーム機などの電子機器は私たちに便利で快適な生活をもたらしてくれます。携帯電話やパソコン、ゲーム機にはレアメタル（希少金属）と呼ばれる金属が使われており、そのレアメタルを巡って世界規模でどういった問題が生きているのか、皆さんは知っていますか？

レアメタルを巡って紛争が起きている地域があります。コンゴ民主共和国（旧ザイール共和国）では、レアメタルの一つ、タンタルが採掘されています。その埋蔵量は豊富で、世界一とも言われています。そのレアメタルを巡って、国や軍、武装勢力などによって紛争が起きているのです。そして、現在でもコンゴや隣国の国々では多くの武装勢力による活動が続けられています。その多くは、コンゴでのレアメタルの違法な採掘活動から活動資金を得ています。携帯電話やパソコンなどの、レアメタルを使う電子機器への世界的な需要の高まりに伴い、レアメタルを巡っての戦いは後を絶ちません。レアメタルの需要が紛争を長引かせているのです。

私たちが便利で豊かな生活を求める一方で、その私たちの生活がアフリカでの紛争のきっかけとなっているのです。各国の政府や企業、メーカーだけでなく、私たち消費者もこういった問題の責任を認識しなければいけないといえるでしょう。まずは世界各地で何が起きているのかを知り、考えることから始めましょう。



2. 子どもの活動の成果・反応

○ アフリカとのつながりを考える前に、アンケートを取った。

① 外国に行ってみたいと思いますか。

はい…23人

(理由)

- ・有名なものを知りたい、食べたいから。
- ・色々な外国の人と遊んでみたいから。
- ・勉強をしたいから。
- ・日本以外の言葉や文化を実際に体験したいから。
- ・珍しい物を食べてみたいから。
- ・オリンピックに出たいから。
- ・日本と違う生活を少しでも楽しみたいから。

いいえ…7人

(理由)

- ・言葉が分からなくて困るから。
- ・戦争が起こっているから。
- ・日本にいたほうが安全だから。
- ・日本より汚いから。

② 行ってみたい国

- ・アメリカ ・韓国 ・フランス ・オーストラリア ・ドイツ ・エジプト
- ・イタリア ・スペイン ・ブラジル ・スイス ・イギリス

アフリカの国に行きたいと思う子どもはいなかった。

③ アフリカについて知っていること

- ・アフリカゾウがいる ・動物がたくさんいそう ・危険な動物がいっぱいいそう
- ・暑い ・ジャングル ・黒人の人がいる ・砂漠
- ・自然豊か ・赤道に近い ・水があまりなさそう ・背が高そう

④ 知っている国の名前

・様々な国の名前が出てきたが、アフリカの国名を書いた子どもはほとんどいなかった。

出てきたアフリカの国：ケニア、エジプト

・「アフリカ」が国名だと思っている子どもが18人いた。

○ 授業後の子どもの感想

- ・アフリカはたくさん国があることにびっくりしました。
- ・遠いところでもつながっているなんて知りませんでした。
- ・自分とかかわりがないと思っていたけど、つながっていることが分かりました。

〈考えた〉
日本とアフリカがこんなに繋がっていることは、
知らなかったけど色々な物を輸しているということを
学ぶことができた。良いところもあるけど問題点
もあるので国と国との繋がりでかいぜんできたら
いいと思いました。

〈考えたこと〉
私はあまりアフリカとつながり
があるとは思ってなかったけど今
日の勉強でアフリカからたくさん
輸入していることがわかったから
アフリカは日本にとって必要な国
だーと思いました。こういう事が
国と国のつながりは大切ということがわかりました。

○ 外国に行きたくない理由として、「汚いから」と答えた子どもの考えに変化が見られた。

〈考えたこと〉
私はこの勉強をしていてアフリカ
の国々や国々について知ることが
できました。またそれなりの文化も分
かり合うことが必要だと感じまし
た。

・ 違う文化や習慣に対して受け入れる気持ちが育ってきたように思う。

私たちの生活とアフリカとはつながりがあるのだろうか。



ある モーリタニア モロッコ	ある コンゴ ザンビア	ある ケニア タンザニア	ある ルワンダ モザンビーク
ある 南アフリカ ナミビア	ある 南アフリカ ボツワナ	ある モロッコ チュニジア アルジェリア	ある スーダン チャド
ある 南アフリカ エジプト	ある エチオピア スーダン マラウイ	ある セネガル チャド	ある ガナ コートジボワール

私たちの生活は、アフリカと
つながりがある。輸入する
ことで良い点もあるが、争い
につながるという問題がある。

〈輸入する理由〉
・良い関係 安く手に入る
・資源が豊富
〈アフリカの人にとって〉
○良い点
・お金がもらえる 仲良くなる
・他の国にもよさを知ってもらえる
・働く場所ができる
○悪い点
・資源がへる → 争いが
おこる

2 時限目「マラウイについて知ろう」

1. 子どもの活動の流れ

① パワーポイントを見ながら、マラウイのことについて知る。

(位置、言語、食事、住居、服装、遊び、学校)

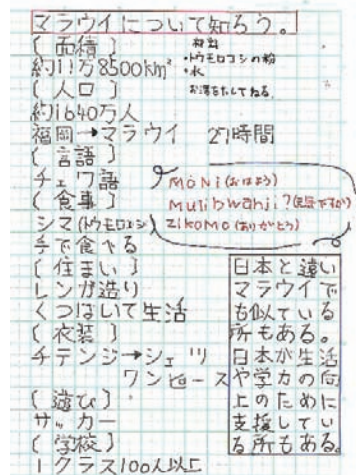


- ② 日本とマラウイを比べて似ているところ、違うところを発表する。
- ③ 日本の支援で架けられた橋や学校があることを知る。
- ④ 前時の授業から、世界で起きている問題に対して、日本も活動している人があることを知る。



2. 子どもの活動の成果・反応

- ① マラウイの紹介をする際に、クイズ形式で紹介した。子どもたちは自分の生活に照らし合わせながら興味をもって聞くことができていた。メモを取りながら話を聞く子どもも多かった。
- ② 似ているところ
 - ・学校で勉強する
 - ・スーパーがある
 - ・サッカーが好き
 - ・米を食べる
 違うところ
 - ・シマを食べる
 - ・1クラスにたくさん人がある
 - ・井戸がある
 - ・頭に載せて物を運ぶ
- ③ 日本の支援でかけられた橋を見て、マラウイのために活動をしていて嬉しいという感想が出た。また、前時の授業から、日本とマラウイは繋がりにあることに気づき、もっとかかわりを持たいという子どももいた。
- ④ 日本の人が外国で活動していることを知り、知らない所でも世界や日本のために活動している人がいてすごい、会ってみたい。もっと外国とのかかわりを知りたいと感想を発表していた。

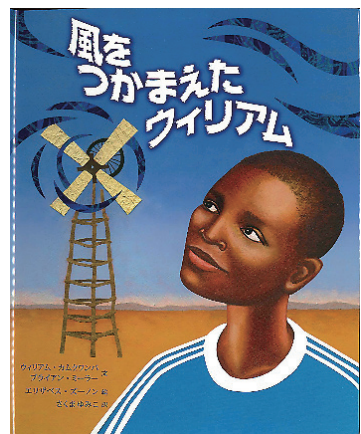


道 徳

1 時限目「風をつかまえたウィリアム」

1. 子どもの活動の流れ

- ① アフリカやマラウイについてのイメージを出し合う。
- ② 「風をつかまえたウィリアム」を読む。
- ③ ウィリアム君が置かれている状況やウィリアム君の気持ちを場面ごとに読み取る。
- ④ ウィリアム君の生き方についてどう感じたか感想を出し合う。
- ⑤ 自分も努力した経験はないか振り返る。



2. 子どもの活動の成果・反応

- ① アフリカ、マラウイのイメージ
 - ・元気
 - ・暑い
 - ・お金がない
 - ・原料がたくさんある
 - ・動物がたくさんいる
 - ・レンガの家
 - ・髪型がおしゃれ
 - ・子どもが多い
 初めにアンケートを取った時よりも具体的なイメージが出てきた。
- ② ウィリアム君はどんなことを考えて行動したかに着目させて読み聞かせることで、真剣に話

を聞くことができた。

子どもの感想

- ・ 困った状況でも努力するウィリアム君はすごい。
- ・ マラウイが、災害でご飯も食べられないくらい困っていたなんて知りませんでした。学校に行けなくても、自分で勉強して風車を作って成功したのですすごいと思いました。
- ・ 自分がもし、ウィリアム君の立場だったら、こんなに頑張れないと思います。ウィリアム君は苦しくても諦めないで頑張っていたので、僕も中学校でも諦めずに色々なことに挑戦したいです。
- ・ 私が毎日学校に通っていることは当たり前じゃないことが分かりました。世界には、ウィリアム君のように学校に行きたくても行けない人がいることが分かりました。当たり前だと思っていることにも感謝の気持ちをもって過ごしていきたいと思います。

1 時限目「ごみ問題ってなあに」

1. 子どもの活動の流れ

- ① ごみと聞いて思い浮かぶものを発表する。
- ② 「ごみ問題ってなあに」を読む。
- ③ 筆者の考える「ごみ」について文章から読み取る。
- ④ 自分の生活を振り返り「ごみ」にしているものはないか考える。
- ⑤ 「ごみ」問題について自分たちにできることがないか考える。

2. 子どもの活動の成果・反応

- ① ごみと聞いて思い浮かぶもの
 - ・ 汚い
 - ・ 落ちているもの
 - ・ 使い終わったもの
 - ・ 捨ててあるもの
- ②③ 「ごみ問題」は何か考えながら本文を読み、内容を整理した。

筆者の考える「ごみ」とは（子どもたちとまとめた話の内容）

 - ・ 物は人の意識の中でごみになってしまう。
 - ・ 「もの」として、本来ごみであるものはほとんどない。
 - ・ 現代の日本は大量にごみを出し続けている。
 - ・ 江戸時代には、物とのかかわりを大切に、簡単にはごみを出さない社会だった。
 - ・ マラウイの子どもたちは、身近にあるものをうまく使って遊び道具を作っている。
 - ・ 私たちの社会では、物を大切にしようとする心が失われようとしている。
- ④⑤ 子どもの感想
 - ・ 自分たちで勝手にたくさんのごみを作っていることが分かりました。マラウイの子どもや江戸時代の人たちのように、再利用したり、修理したりしてものを大切にしたいと思いました。
 - ・ 最初からごみだというものはないなんて考えたことがなかったので、ごみになるものをできるだけ減らしたいと思いました。
 - ・ ごみは自分が作っているものなので、自分からごみにするのを少なくすることが必要だと思いました。
 - ・ 教室に鉛筆や消しゴムが落ちていたら、そのままにせずに拾ってごみにしないようにしま

す。

- ・家でもたくさんのごみを出しているので、家の人にもごみについて教えたいと思いました。

成果と課題

授業後に再度アンケートを取った。外国に行ってみたいかという問いに対して、以前は7名が行きたくないと答えていたが、行きたくないと答える子どもは3名に減った。理由を見てみると、外国は言葉が伝わらないから怖いけど、だからと言って知らないままだといけないと思いました。もっとたくさんのことを勉強して、英語も話せるようになったらいいみたいです。と答えている子どももいた。また、アフリカについて国名やイメージなど知っていることも少なかったが、地図帳でアフリカのページを開いて国探しをしたり、自主学習でアフリカについて調べたりする子どももいた。このことから、マラウイをはじめとするアフリカの国々や世界について興味、関心を持つ子どもが増えたと考えられる。しかし、依然として、日本以外の国について批判的な子どももいるので、お互いの文化を知り合い、支えあうことの大切さを伝える必要があると感じた。国と国同士の大きいことだけでなく、中学校を目前とした子ども達に、友達同士、違いを受け入れることの大切さも伝えていきたい。

マラウイを通して、自分や世界について考えよう！

吉田 宗平

YOSHIDA SOHEI

佐賀市立新栄小学校（佐賀県）

担当教科：全教科

●実践教科：

●時間数：

●対象学年：

●対象人数：

2016/08/02

2016/08/03

カリキュラム

■実践の目的

私も子どもたちにとっても見ず知らずの国だったマラウイ。しかし、担任の研修を通じた報告や授業が一つのきっかけとなり、世界でも最貧国の一つと言われているマラウイという国を通して、自分自身を見つめ直したり、世界について考えたりしていきながら、今後の生活に役立てていくため。

実践内容

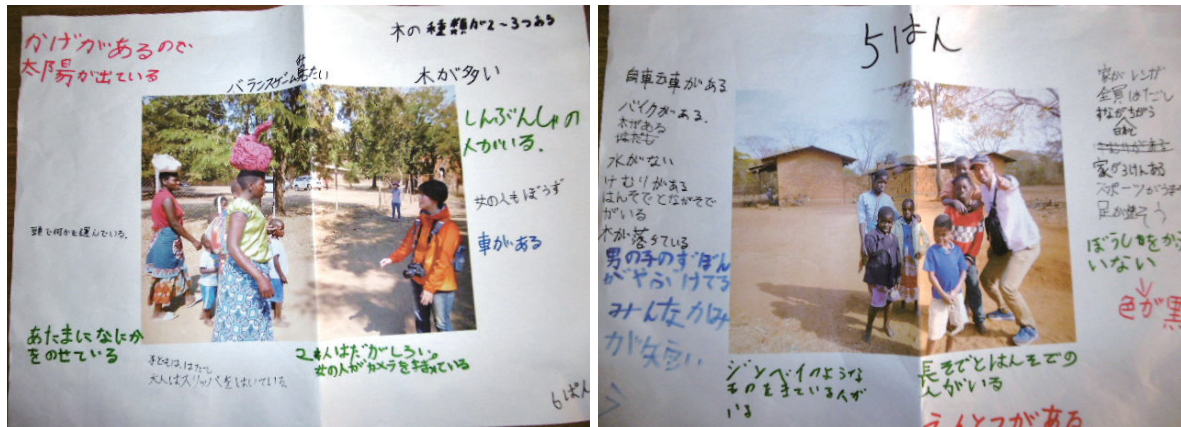
- ① 「マラウイってどんな国」（学年：学級活動）
- ② 「ウィリアム・カムクワンバ少年」（学年：道徳）
- ③ 「ゾンバ国立病院の子どもたちへ手紙を書こう」（学級：学級活動）
- ④ 「みんなちがって みんないい」（全校：人権集会）
- ⑤ 「世界がもし100人の村だったら」（学年：総合的な学習の時間）
- ⑥ その他（展示及び掲載）

1 「マラウイってどんな国」（学年：学級活動）

○ 班ごとにフォトランゲージ

マラウイについて、詳しい話をする前にフォトランゲージを行った。子どもたちは、写真を見ながら思い思いに気付いたことを書き加えていた。





上記はそのときのもの。「あたまになにかのせている。」や「色が黒い。」など様々なことを読み取っていた。

○ 全体でフォトランゲージを共有

各班で違う写真にてフォトランゲージを行っていたので、それぞれがどのようなことに気付いたのかを共有することで、マラウイってどんな国かを知るきっかけとした。



○ スライドショーやお土産などでマラウイの様子を紹介

今度は、実際に写真を見せながら、体験談やその様子について子どもたちに紹介していった。また、子どもたちは、現地の写真やお金（クワチャ）、布（チテンジ）などに興味津々だった。



2 「ウィリアム・カムクワンバ少年」(学年：道徳)

○ フォトランゲージで使った写真や世界地図でマラウイを想起

フォトランゲージで前回の授業を思い出したり、世界地図で再度日本とマラウイの場所を確かめたりしながら、「ウィリアム・カムクワンバ少年」の話をイメージしやすくなった。



○ もし今日から電気が使えないとしたらどんなことが一番困るかを考える。

- ・ 冷蔵庫が使えず、食べるものに困る。
- ・ 炊飯器が使えず、ご飯が食べられない。
- ・ テレビが見られない。ゲームができない。
- ・ クーラーや扇風機が使えず、暑すぎる・・・。



○「風をつかまえたウィリアム」の読み聞かせ

絵本をパソコンに取り込み、電子黒板に映し出しながら読み聞かせを行った。

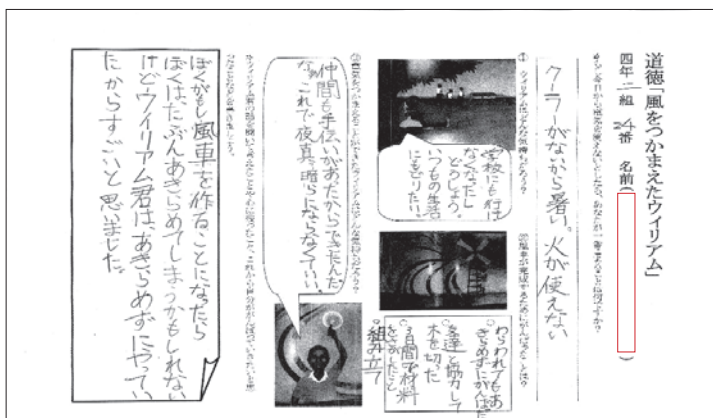
- ① ウィリアムが学校に行けなくなったときどんな気持ちだっただろう？
- ② ウィリアムは風車を完成させるために頑張ったことは何でしょう？
- ③ 風をつかまえることができたウィリアムはどんな気持ちだろう？

○ ふりかえり

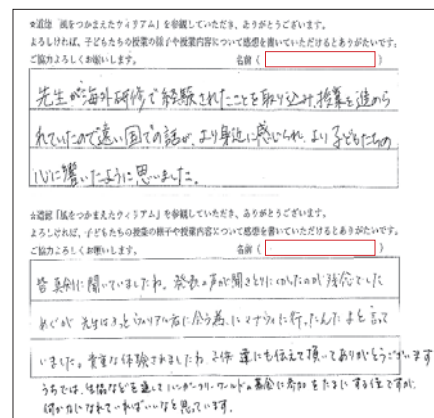
- ・ はじめることと、あきらめないことが大切だと思います。仲間の力を借りて風車を作ったのがすごいと思いました。
 - ・ ウィリアム君の話は、日本の戦争のころみたいでした。それでも、あきらめず風車を作って、生活をいい方向に変えていこうとする姿が心に残りました。
 - ・ マラウイは小さな国だけど、ウィリアム君ががんばって作った風車がいろいろな国で評判になってすごいと思いました。私もあきらめずに挑戦しようと思います。
- 子どもたちは、この「風をつかまえたウィリアム」を通して、あきらめないことの大切さや、仲間との協力の大切さなどを学ぶことができていた。



○ 子どものワークシート



○保護者からの感想



3 「ゾンバ国立病院の子どもたちへ手紙を書こう」(学級：学級活動)

○ 青年海外協力隊の玉枝隊員からの手紙を紹介

マラウイの研修で見学させていただいたゾンバ国立病院で活動されている玉枝隊員からお手紙をいただいた。その中で「ゾンバ国立病院の子どもたちのことを忘れないでいただけたら嬉しいです。」との言葉があり、その入院している子どもたちが初めて色鉛筆を使って描いたイラストやそのときの写真をクラスの子どもたちに紹介した。すると、「自分達もゾンバ国立病院の子ど

もたちへ手紙を送りたい。」との声が挙がり、作成し、送ることとなった。

○ 手紙を書く

各4人ずつの班にA3の用紙を1枚配り、手紙をかくようにした。「どんなことをかけばいいかな？」と班で相談し合い、自分達で「日本らしいものって何かな?」「習字は日本らしいよね。その前で写真をとって貼ろう。」「先生がマラウイに持って行った竹刀もいいかも。」「マラウイの国旗もいいんじゃない?」「チテンジの洋服もいいね。」などと、相手意識を持って班で協力しながら作成していった。

○ 手紙到着の知らせが届く

玉枝隊員から、「手紙が届いた。」とのメールが届き、その写真を貼付していただいた。(下)子どもたちは、初めて外国に手紙をかいた子も多く、自分達がかいた手紙を持って、ゾンバ国立病院の子どもたちが笑顔で写っている写真を見ながらとても喜んでいた。

最初は予定をしていなかった活動であったが、子どもたち自身もマラウイの子どもたちと手紙を通して交流をすることができ、価値あるものとなった。



4. 「みんなちがって みんないい集会」(全校：人権集会)

○ みんなで「子どもの世界」を歌う

集会委員会の子どもたちが中心となって、1年生から6年生までの子どもたち全員で「子どもの世界」を歌った。「その歌詞に込められている思いや願いを感じてほしい」との選曲であった。

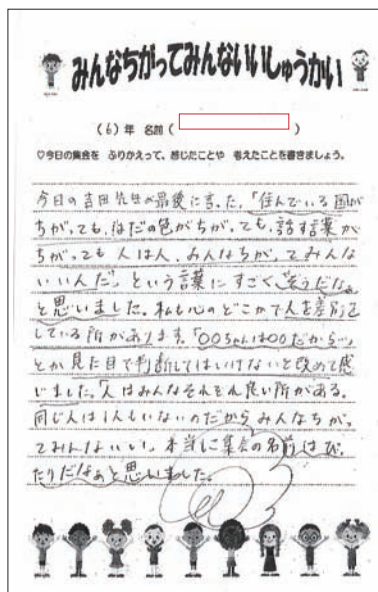
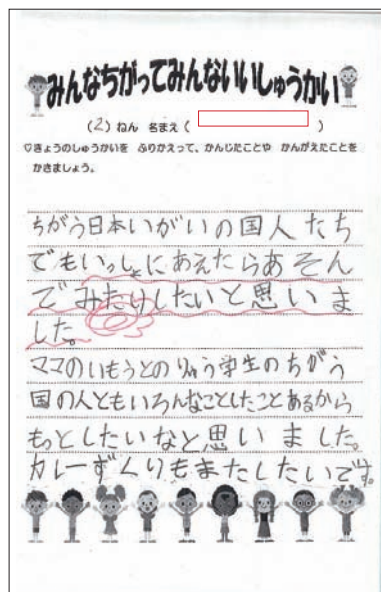
○ マラウイ体験記を紹介

マラウイでの生活の様子や日本と似ているところ、大きく違っているところなどを写真のスライドを用いて紹介し



ていった。特に、「サッカーボール1つあれば、言葉が分からなくても一緒に遊べて、仲良くなれたよ。」「住んでいる国は違っても、肌の色は違っても、話す言葉は違っても、みんな違って みんないい。」とまとめ、「遠い国のマラウイの人であっても、日本の佐賀の新栄小学校の子どもであっても、みんな違ってみんないい。」ということを伝えた。

○ 子どもたちの感想



5. 「世界がもし 100 人の村だったら」(学年：総合的な学習の時間)

○ JICA 佐賀の山田推進員の紹介

JICA 佐賀の山田さんと、TT (ティームティーチング) の授業形態で行うことを子どもたちに伝えた。「世界がもし 64 人の村だったら(新栄小学校 4 年生バージョン)」で「今世界がどのような状況なのか、体験を通して学んでいこう」と投げかけた。そして、一人一枚ずつ役割カードを配った。

○ ワークショップを行う

- ・「世界には女性と男性のどちらが多い？」の体験では、男女比が半々であり、子どもたちの予想通りであった。
- ・「大陸ごとに分かれてみよう」の体験では、各大陸の面積比からひもの長さを算出し、世界地図のように体育館に広げておいていた。実際に分かれてみると、世界の人口の約 6 割がアジアを占めており、子どもたちはぎゅうぎゅう詰めになることで、その多さを体感していた。
- ・「世界の言葉で『こんにちは』」の体験では、まず、い



ろいろな人に自分の役割カードの言葉で挨拶するようにした。子どもたちは、最初は恥ずかしがっている様子も見られたが、徐々に笑顔で挨拶できるようになってきた。次に、同じ挨拶の仲間集めをした。子どもたちは英語を話す人が多いと予想していたが、中国語を話す人が多いと分かって驚いていた。



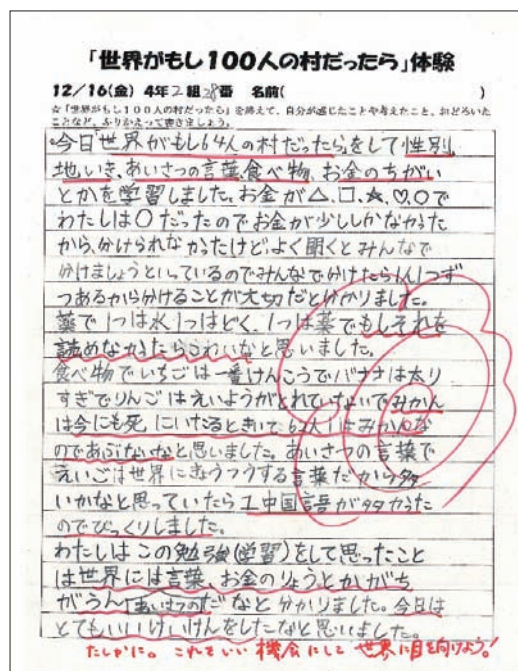
- ・「文字が読めないということは？」の体験では、代表3名を選んだ。「水、薬（砂糖水）、毒（塩水）」と読めない文字で書かれている3本のペットボトルの中から1本を代表に選ばせ、文字が読めなかったらどうなるのかの疑似体験をつた。子どもたちは興味津々で食い入るように代表の子どもたちの様子を見ていた。とても衝撃的な、今まで考えたこともない体験になったようだ。



- ・「所得が多いのはだれ？」の体験では、各グループに所得の具体化としてアメを配り、視覚的に分かるようにした。そして、そのグループごとに分けられたアメをさらに一人ずつに分けるにはどうしたらいいかを試行錯誤していた。持ちアメが少ないグループは「アメを割って分けよう」や「多いところから盗ってこよう」などの声が聞かれ、貧富の差がもたらす不公平を感じる事ができていたようだ。

○ ふりかえり

- ・ ぼくは、韓国語のカードだったけど、もう少し仲間がいるかと思ったけど、ぼく一人だったので、世界が64人だとそうなるんだなと思いました。
- ・ 韓国の人はこの授業では一人だけだったけど、毎年している韓国のトヒョン小学校との交流の時は、もっとたくさん来ていたので、不思議な感じがしました。でも、世界が64人だとするとこのくらいなんだと分かりました。
- ・ 英語を話す人が多いと思っていたけど、中国語を話す人が多かったのを初めて知りました。
- ・ どくと水と薬を選ぼうとすると、ちがう言語だととてもむずかしいので、もし外国の人が日本でこまっていたら助けたいなと思いました。
- ・ 日本はお金を持っている方の国だったけど、ほかのところは少ししかない国や全然足りていない国もあるから、他の国の事も考えて生活したり、ぼ金したりしたいです。
- ・ ○のグループは、△のグループのお金（アメ）を盗もうとするくらいお金（アメ）が少なくて欲しかったんだなと思いました。
- ・ 私たちは外国から輸入しているのに、いっぱいごみにしてしまっていることを初めて知りました。やっぱり、残さず食べたり、使ったりすることが大切なんだなと思いました。



○ 学年展示や校内展示

- 佐賀市報（子どものまなざし運動）



成果と課題

今回の実践を通しての一番の成果は、私が研修に行った「マラウイ」のことを、担任をしているクラスの子どもたちを中心にして、学年の子どもたち、全校児童、職員、保護者、市報として佐賀市の方々と共有できたことである。これにかかわったみんなが、「マラウイ」のことを通して、今の自分のことや自分達の生活のことを見つめ直したり、世界に目を向けたりするきっかけになったりしたのではないかと感じている。特に、私が担任をしているクラスの子どもたちは、実際にマラウイの子どもたちと手紙のやりとりができ、日本とマラウイのつながりを直に感じることができるよう交流を行うことができたことである。

課題としては、4年生を中心に世界に目を向けるきっかけにはなったものの、深めていくことができなかったので、来年度以降も継続した学習ができるように十分な引き継ぎを行うことである。また、学校全体としても、毎年行っている韓国のトヒョン小学校との交流に今回の研修の成果を生かしていくことが必要である。

